
それが全能結晶の無能力者

詠見嫌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが全能結晶の無能力者

【Nコード】

N2140W

【作者名】

詠見嫌

【あらすじ】

世界に「結晶」が降り注ぎ、人々は「能力」を手にした。いつか異常は正常に組み込まれ、選ばれた者は常識を超えた異能を手にする世界となっていた。それを才能の一部とし、生きる人々。けれど、少年はその「能力」を手にすることはなかった。それでも「妹」さえいればそれだけでよかった。そんな妹が同じ高校に入学した時、変化と呼ぶ物語は幕を開ける。

1 | 1 始まりの夜

1 | 1 始まりの夜

砕け散り四散した結晶を、人は雪と呼んだ。

真夏の夜に白い雪が降った。世界を覆い尽くす程の雪が。だがその雪は溶けることなく、ただ地上を白く染め上げた。そんな白く光る夜がこの世界の歴史を大きく変えた。世界一変の日。

そんな世界を書き換えるそれは雪ではなかった。これは結晶。砕かれた結晶が空を舞い、ただ落ちてきた。その結晶が落ちて来た日。神秘の光が墜落を繰り返した日。

だが落ちてきたのは結晶だけでは、なかった。

そんな奇跡のような真下で、地獄の業火が柱となって形を成した。深淵のような闇夜の下、巨大な火柱がそんな降り注ぐ結晶さえも焼き払っていた。赤気が立ち上り、木々も鋼鉄も人間までも全てを平等に焼き尽くしている。

つい先程まで空中を飛行していた鋼鉄の塊は真っ二つに折れ、そこから轟々と炎と煙を巻き上げている。そんな炎の下に少年は額から血を流し倒れていた。

「な、……なにが——」

わからない。何もわからない。時任雪哉^{ときせいゆき}には何もかもがわからなかった。

気がつけば倒れていた。さっきまで飛行機の中にいた。目覚めれば地上だった。何一つわからないまま血を流していても、生きていることだけはわかった。しかし家族の姿は、なかった。

目の前の光景に絶句し、そして絶望した。

炎は全てを呑み込み、それはまるでこの世の終焉かと錯覚させる

ほどだった。声を上げた。慟哭を繰り返しながらも、雪哉は真つ先に家族の名を絶叫した。けれど返事が返ってくることはなかった。ただ炎が雄叫びを上げるように激しさを増し、そして白い結晶が雪哉の身体に積もるだけだった。地に膝をつき、ただ崩れるように倒れた。仰向けのまま空を見つめた。結晶の雪がひたすらに降り、雪哉は涙を流した。

そんな夏に降る不可解な結晶は人々に奇跡を与えることになる。だがそんな奇跡よりも、全てを失ってしまったと思い知らされた雪哉にとってはどうでもいいことだった。そんな一人の少年の絶望など他所に世界は一人歩きを始める。たった一人の慟哭で、この世界を停止させることなんてできやしない。それでも雪哉は咆哮することとを止めることはできなかった。

1 | 2 兄妹

1 | 2 兄妹

——あの絶望から六年。

季節は春。桜咲く並木道を背に二人の男女が歩いていた。

男の名は時任雪哉。今日から新しい学年に上がる。しかし雪哉の容姿はどこか不自然だった。背丈はやや高く、伸ばした背筋は何に對しての自信なのか。そしてやけに伸ばした前髪は片目を覆い隠すほどだった。しかしその奥には鋭い眼光を見せ、闇雲に敵意を向けていた。そんな雪哉の歪さとは真逆の存在がすぐ横にいた。雪哉と肩を並べて歩く少女は雪哉よりもずっと背丈は低く、身長は雪哉の腰元までしかない。そんな少女の身体は小さく細くそれは華奢と言うのだろう。白雪の肌に、そんな肌に負けぬ程の白銀の長髪。穢れなどない白の少女。無垢なる子。そんな清楚な雰囲気だけを形にしたような少女。

少女の名は時任理愛^{あいつら}。そう二人は兄妹である。

あの六年前の惨劇、航空機墜落事故。乗員乗客は五百名を遥かに超えていた。しかし生き残ったのは十本の指で数えられる程度だった。日本国内で起きた航空機事故の中でも最多となる驚愕と悔恨の事故となった。その数少ない生き残りが雪哉と理愛である。不幸中の幸いとまるで言葉通りのように二人は無傷で生還した。しかし同乗していた両親は亡くなり、時任家は二人だけになってしまった。色んな人の援助があったおかげで生活もでき、こうして学校にも通えている。心に深い傷を負ったものの、なんとかこうして今を生きている。たった六年、たったの六年で傷が癒えるのかはわからない。しかし、

「世界が犯した過ちを教えてやろう……それは、俺を生かしたこと

だ」

「兄さんが生きてること自体過ちです」

こんな会話を平気にこなす兄妹に本当に心の傷などあるのだろうか
かと疑問さえ抱いてしまう。

雪哉は前髪に覆い尽くされた瞳を庇う様に手を翳し、小さく呻き
声を上げる。

「――共鳴？　なるほどな……魔的であるからこそ、異なつた存在
との邂逅する確立を増長させるわけか……さしずめ『マジナル・シンダー 転回式境界線』
と呼ぶべきか？」

「マジ……？　きょーかい？　……兄さん、お願いですから横文字
と変な言葉を一緒に言うのはやめてください。日本語をお使いにな
ってください、理愛はとっても心配です。兄さんがこのまま妄想し
かしくなるんじゃないかって時たま思つのです」

「案ずるな、理愛よ……俺は死なん」

「いや、そうじゃなくてですね……はあ……もう死ね」

道路の真ん中に蛆の湧いた死体でも見るような飛び切りの不快感
を露わにしたような目で理愛は雪哉を睨み、そして思いつき死刑
宣告した。だがそんな氷のような視線もおぞましい言葉も雪哉は何
の反応も示さず、ただ顔に置いた手をずらし、そのまま歩く。二人
の身長差は第三者から見ても歴然ではあるが、明らかに雪哉の歩幅
は理愛に合わせて踏まれている。理愛はそれを知らないわけがなか
った。だが何も言わない。だけど、二人は仲が悪いというわけでは
ない。たつた二人の家族。良いも悪いも二人にはない。だから二人
はいつものように同じ道を歩く。

「それにその左腕の包帯なんなんですか……ちつともそんなの流行
ってる気配なんてないです。外してくださいよ。ちらちら視界に入
ってきて鬱陶しいことこの上ないです」

何もかもが不可解すぎる雪哉を象徴づけているのはきつと左腕の
肘まで巻かれた包帯にあるのだらう。指先まで巻かれていてまるで
大怪我でもしたのかと思わせるほど大袈裟に巻きついている。だが

その左腕は思うが俛に、指先の一本一本が雪哉の意思でしつかりと動いている。そんな腕を見せ付けられては怪我をしているとは思えない。なら人に見せられない傷跡を隠しているのか？

「これは朽ちて尚、放出し続ける神の力を抑える為の聖骸布と何ら変わらないんだ。そう易々と触れていいものではないぞ。これを外す時はその者の終わりだけを見せつけるだけだ、わかったのならその手をどける」

「……兄さん、本当にこんなことしていただけるのも今の内ですよ。さつさとこの包帯も解いて、そのボサボサの長い前髪も切って、ちゃんとした日本語を喋れるようになってください。社会に出た時、どうするんですか？」

こうやっていつも雪哉は妹に諭されるのである。

だが肝心の雪哉はというと聞く耳も持たず、自分自身の描いた設定を夢想し続け、創造された人格。そんな周知に理解されることのない人間性のまま今もこうして雪哉はここにいる。

「はあ……兄さんの頭の中を覗くためだけにCTスキャンの購入を考えちゃいますよ」

「それでこの俺の深層心理を覗くことができるのか？ できないだろう」

「できるわけがないですよ。それ以前にそんなもの買うお金もないでしょ。もし買ったとしてもどこに置くんですか。まったくもう……冗談なんですから、もうちょつと気を利かせてくださいよ」

「そうか、そうだったな、すまない」

「謝り方もなんか気持ち悪いし、兄さんは学校で友達とかいるんですか？」

そんな質問にただ黙殺し、黙秘を決め込んだ雪哉にただ呆れて小さな嘆息をもらす理愛。こんな態度しか取れない人間と価値観を共有しようなどと思う物好きはいないだろう。

「なら、理愛はどうなんだ？ 友達、いるのか？」

黙っていただけの雪哉が理愛に声をかける。質問を質問で返して

いるようなものだ。理愛は不満そうに頬を膨らませる。しかし、ゆつくりと選定するように言葉を紡ぐ。

「わたしは……わたしはいいんです、わたしは上手に過ごしますから」

拒絶。必要がないとそう言った。口上こそ緩やかだが、峻拒の意思がはつきりとわかった。雪哉はこれまで理愛と暮らしてきて、友達らしい友達を見たことはなかった。理愛自体、愛想も良く、柔らかな関係を築くように、自ら進んで行動している。人間嫌いというわけでもない。けれど最後に必ず距離を置くその様は上辺だけ取り繕っているようにしか見えない。周囲の視線を気にするように、これまでもこれからも理愛は他人に気を遣って生きていきそうだ。

それは人とは違う髪の色と瞳の色だけで十分な理由になる。日本人らしい黒の色からは遠ざかった結晶のような色。人と違うというのは、それだけで異質なのだ。純粹の中に一つ異物を混入するだけで、焦点は定まるものだ。こうして学校への通学路を歩くだけで、実際何度か通りすがりの歩行者が理愛を見ていることは鈍感な雪哉でも確実にわかっていた。そしてそれを気にしていることも雪哉は知っている。しかし雪哉の心の中ではいつも舌を打ちながらこう嘯いているのだ。「くだらない」と。

「人とは違う……それは古なる戒めの力を封じた白き竜の生まれ変わり……さすが我が妹だな」

「わたし、昨日まで普通の中学生だったんですけど」

「そのように振舞って周囲の人間を巻き込まぬようにか……殊勝だな」

「兄さん、わたしまで巻き込まないで。他人に迷惑をかけたならそれこそ兄さんの病気はただの害悪ですよ」

「そんな言葉で俺を罵っても無駄だ。そして俺とお前は他人ではない……兄妹だ」

「もう他人でいいですよ、こんな兄の妹だなんてただの恥ですよ」

「お前の恥も何もかも背負って俺は生きよう」

「勝手に生きててください、わたしは兄さんの顔を見なくていいように遠くへ行きます」

途端に理愛の歩幅は広がり、速度が上がる。もはや競歩にレベルアップしていた。段々と理愛の小さな背中が更に小さくなっていく。それでも雪哉は鼻で笑い、歩き始めた。

「制服姿、似合っているぞ」

「話しかけないでください、あと追いついてこないでください」

どれだけ歩く速度を上げたとしても、明らかな身長差の前では雪哉が理愛に追いつくのは至極当然だろう。それどころか雪哉は半分の力も出してはいない。肩を揺らす程に力いっぱい歩く理愛には目もくれず、ただ雪哉は理愛と肩を並べて歩いていた。歩く理愛を横目で見れば、そこには新調された制服を着込んだ姿が見える。理愛の着る制服は雪哉が通う学校と同じモノで別に一年早くその学校に通っていたのだから、女子の制服だって見慣れているわけなのだがそれでも妹の制服姿となると見る目も価値観さえも変わるものだ。似合っているのは本心であり、ただ可憐さを際立たせている。確かに理愛の見た目は常人とは少し違いが生じているかもしれない。銀の髪に銀の瞳。だが理愛の感じている奇異な視線はただ珍しいからだけではないはずだ。異性なら振り返っても見つめてしまう美しさを理愛は持っているはずなのだから。雪哉はいつもこうして理愛を過大に評価する。しかしそれはただの過言ではない。誰が見たってきつと理愛に惹かれる。それほど魅力が理愛は持っているはずなのに、それなのに本人はというと距離を置くことだけを第一に考える自信の無さを見せ付ける。そんなものを見せ付ける必要はない。魅せることができるのだから、それを前に押し出せばそれだけできつと理愛は変わるはずだ。けれど雪哉はそんな本心をずっと内に隠し続けている。言葉だけで変化をつけることができるのなら、とつくの昔に言っている。理愛自身が気づけなければ意味がない。だから雪哉は信じているのだ。信頼しているのだ。兄妹だから。たった二人だけの、家族なのだから――

「見えてきましたね」

「そうだな」

緩やかな傾斜であつても上り坂。理愛にとっては十分過酷であつたろう。そもそも運動は得意ではないし、体力もそんなに無いのに無理をするから。小さく、息を殺すほどに小さく荒い息を零しているのも雪哉は知っていた。けれど、絶対にそのことを指摘しない。ただ無言で手を差し出す。

「転ばれては困るからな、往くぞ」

「兄さんの手を握ってなんて……本当はイヤですけど、仕方ないです、ね」

頬が紅潮していたのは体温が上昇しただけのものなのか、それとも……しかし雪哉は気付かない。あれだけ理愛を見ている、どんな細かな変化さえも見極めることができるはずなのに、肝心な部分だけ気付かないまま。

そして二人は手を繋ぐ、新たな高校生活が始まるうとしていた。けれどそれが二人の世界を一変させることなど知らぬままに、全てが動き出そうとしていた。

1―3 『種』と呼称された

1―3 『種』と呼称された

それが人の能力の一部として組み込まれたのもつい最近。

もはや普通とは何だったのかとさえ思わせるほどに、過去の人々が築いた社会というものは崩壊していた。今はもう個人の『才能』によって未来を切り開いていく世界が完成していた。

それが『異能』——人より優れ、常識を超えた能力。

超能力とも呼べるのかもしれない。別に魔法と呼んでもでもいいのかもしれない。もうなんだっていいのかもしれない。ただそれはまさに奇跡を具現させた力と呼ぶものだろう。

そんな異常な能力は小説やお伽噺の中だけのただの絵空事だと思われるにいた。もしそんな力を持っていたとしても、呆れて笑われるのが普通だったのかもしれない。しかし今やそんな幻想は人々の才能の一つとして評価され、より優秀な能力を持つ者は富や名声を得ることが約束された。そしてそんな異能と呼ばれる超能力は偶然的突発的に発現するわけもなく……今や誰もが望めばきつとその力は手にすることができるようになっっていた。

そんな奇跡が今や当たり前となつたこの世界。奇跡を当然とさせたのは今から六年前、雪のような結晶が降り注いだあの日からである。

六年前、突然降り注いだ結晶は雪のような白ではなかった。まさに光り輝く金剛石のようだった。だがそれはただの炭素の同素体の一つが落下してきたわけではない。その結晶こそがまさに人に叡智をもたらした原因なのである。それを人は『種晶』（シード）と呼んだ。ピラスのように耳に穴を開け装着する者もいれば、耳以外の

皮膚に埋め込んだりと、装身具として身につけることでそれを装備すれば力を手に入れることができる。しかし持っているだけで誰もが能力を解放できるのかと聞かれればそういうわけでもない。所持しているだけでは何も起こらない。まさに種の名を冠するように持っているだけではただの種と変わりない。その種を開花させるには人間が持つ技巧が必要となる。それは才能となり、異能を引き出せることができれば、どれだけ微力であろうとも、『有能力者』（コイダー）として分類されることとなる。どんな能力であつても、世界に貢献できればそれだけで価値を見出せる。可能性を広げることができる。力とは道を作り出すことを指す。大きな力があればそれだけでその道は多数に分岐させることもできる。それを増やせるかどうかはその人間次第となる。問題はそんな大いなる力を平然と手にしてしまった世界になつてまだ六年しか経過していないということにある。未だに能力が発現するのは突発的で、気がつけばなどと曖昧なことが多い。勿論、この能力を研究する組織なども存在する。それでもあまりにも時間が足りなさ過ぎる今の人類にできることは、そんなとてつもない力を悪用することを防ぐ為にも能力を持つ者を管理、管轄する組織を作ることと精一杯だった。今やどんな殺傷兵器よりも危険な『異能』は今以上に軍事力を高めることだつて容易に行える。能力を持った人間の軍隊を一つ作るだけで、どんな強力な兵器を保有した国すらも壊滅させることができる。とされている。そんな危険分子がどの国にも存在してしまった世界になつたのだ。そんな不安定極まりない力を安定させる為にもこの世界全てがそついった幼い頃からそついった能力を持つ子供たちを学校という機関の中で一つにまとめ、能力をより良い方向へと使用させる為に教育するカリキュラムも立てられている。

そつやつて世界の均衡を保とうとしていた。それでも、それは能力を持った人間に置かれた境遇でしかない。世界の人口の数割にも満たない者だけが持たされた能力。殆どの人間はあの結晶の雪が降り注いだのを見ただけでしかない。それは雪哉も一緒だった。いや、

違う。雪哉はそんな雪の結晶など目もくれていなかった。一夜で自分の世界を半壊させられただけのそんな夜だ。能力などに微塵の興味もなかった。

だから、雪哉は異能を持たない。

身体に種晶を埋め込んでいるわけでもなく、一切の能力を身につけることなく雪哉はこれまで過ごしてきた。世界はこんなにも変革を起こしたはずなのに、雪哉の世界はあの六年前から壊れたままなのだ。だからこそ理愛がいなければ、雪哉がどうなっていたかなんて言うまでもない。彼を塞き止めている存在だからこそ、雪哉にとっては理愛が大切だった。きつと壊れてしまった雪哉にとってはどうしても他人との感覚にズレが生じている。

それなのに、

「おはよう、雪哉。今日も朝から眠そうだね」

机の上に肘を突き、傾いた首をその手で支え、何故に不機嫌なのか仏頂面をしたまま窓の外を見つめる雪哉に屈託のない笑顔を見せ付けて近づく男が一人。手を振りながら前の席に座る。しかし椅子の向きは雪哉の方向を向いていた。雪哉と同じく高い背丈、しかしやけに線は細く、男性の体格とは思えないほどだ。そんな男は二ヤ二ヤと不敵に微笑んでいる。そんな表情が気に入らなかったのか雪哉は窓の外を見つめるのは止めて、その男に視線を移した。

「朝からその顔はやめろ、不愉快だ」

「つれないなあ、雪哉は。友達がこうして会いに来ているんだから挨拶ぐらい返してよ」

狐目をした男はそう言って、大袈裟に肩を落とす。しかし雪哉は何も言わない。これがいつもの日常なのだ。こうやっていつも夜那城切刃は雪哉に近づいてくる。入学してからずっと何の因果か悪戯か、雪哉は切刃に付き纏われている。雪哉は頑なに切刃の接近を拒んでいるのだが、どうしてか切刃は諦めずに雪哉への接触を繰り返

してくる。だからとつくに心が折れた雪哉は言葉こそ辛辣だが、拒絶することは止めたのだった。朝、通学中に理愛に友達はいないのかと聞かれた時に答えられなかったのは雪哉にとって切刃が友達なのかどうかは自分自身でもよくわかっていなかったからである。

「俺と、友達？」

だから切刃の言葉に訝しげに顔を顰め、目つきがより一層悪いものに変わってしまう。

「そうさ、僕たちは友達だろう？」

「そうだったか？」

「そうだったよ」

悪びれもなく切刃は言う、口元に手を当てて雪哉の耳元で話出す。

「組織が動いているんだろう？ 協力者は多い方がいいんじゃないのかい？」

これだ。これなのだ。これが切刃を絶対的に拒めぬ理由。ただ単に興味本位だけで切刃が近づいてくるのならただのいけ好かない優男として雪哉も適当にあしらっていた。しかし切刃は何枚も上手だったのだ。切刃は雪哉がどういう人間なのかをよく知っている。知っている上で、馬鹿にすることもせず、こうして雪哉の『設定』に乗っかっているのだ。

「邪気眼って言うんだっけ？ 雪哉の持っている眼のことは？」

「あんな劣化魔眼と一緒にするな……あれは第四世代が気紛れで与えた脆弱な力だ。石に変えることもできなければ、万物の生き死にさえも見れないなんて、どうかしている。俺の眼は違う……だが、それが何かは言えない。言えばお前もきっと狙われるだろうからな」

「組織にかい？」

「あまり大きな声で言うな……敵はどこにでも存在する。教育機関なんてもっての他だ。とくにこういった二階はな——ともかくここは苦手だ。お前も俺に興味本位で近づいただけなら止めておけ。死にたくはないだろう？」

「わかつてはいるんだけどね、どうしても雪哉のことが気になつてね」

「そうか、なら勝手にしろ。勝手に死ぬ。あと訂正しろ、組織ではない……『図書館』だ。気をつけろ、ヤツらは俺の持っている『眼』と『腕』もだが、本命はこの『禁忌』^{グロイニツク}の断片なはずだ。これ一枚で十分因果律の変動が可能だからな。奴らが血眼になつて探しているのもわかる。だが、これを上手く使えば連中を誘き出すこともできる。失敗は許されない、俺に近づくのはいいが足手まといにはなるなよ」

なんて他人が聞けば全くもって不可解な会話が展開されている。それでも切刃は雪哉の言葉を一言一句漏らさずに清聴していた。本来なら鼻で笑つてもいいところだ。それなのに切刃は馬鹿にすることなく首を縦に振っている。だから雪哉は切刃を否定できない。ただ話をし、聞くだけの関係。入学して一年以上、これといったことはなかった。互いのメールアドレスも電話番号も交換していない。休日どこかへ行ったわけでもない。計画を立てたこともない。夏休みとなればその間は顔を見ることができなかった。だから雪哉は切刃のことは何も知らない。ただ自分の話に付き合ってくれるだけではない。

「君は本当に命がけなんだね」

「そうでもないさ、もう慣れた」

「ところで雪哉、君はもう『種晶保有検査』はしたのかい？」

そんな切刃の言葉に一気に現実に戻された。そして雪哉は片目で切刃を見ると切刃自身は作ったような笑みを浮かべてやれやれと両肩を上げていた。

入学式も無事に理愛の姿を見つけることができた。それだけでいい。校長の長い言葉も甘んじて受け止めるし、これから始まる学業にまた身を粉にする所存でもある。だから雪哉の高校生活はそれだけでもいいはずなのに、どうしても余計なものがついて回る。

『種晶保有検査』とは国が義務付けた、謂わば調査だ。種晶とい

うものはいつでもどこでどうやって身に付くかわからないモノであり、自分の意思で装備するものもいれば、突然身体に入り込む可能性だってある。種晶は身体に埋め込むようにしなければ効果を発揮しないのは大前提なのだが、ごく稀に身体の中に、臓器や骨といった箇所埋没しているなどといった場合もある。だからこそ病院の検査のように大掛かりな機械の中に身体を入れなければならないのである。ここ最近、種晶の常識を逸脱し、常人を超越した能力を使っている犯罪も多少なりとも発生している。本来ならば小さな罰であっても、能力使用による犯罪行為はとても重い罪が科せられる。しかしそういった者は大抵種晶を装備していることを隠している場合が多く、また唐突に犯行に及ぶ為、捕まえることは難しい。だからこそ事前に国で種晶を保有している者を調べ、データ化することで、未然に犯罪を防ごうという仕来りからこの『種晶保有検査』は始まった。国の安全を守るためであり、義務であるのなら仕方がないのだ。雪哉はその種晶というものには触れたことすらない。ましてや欲しいとも思わない。だから何度やろうが結果は同じ。そんなものする意味はないのだ。だから雪哉にとってその制度は面倒なだけではない。十数分程度ではあるが、機械の中に缶詰にされるのは気分のいいものではない。ましてや知らない人間に身体の中身を覗かれるなんて吐き気がする。それでも雪哉は顔にこそ不機嫌さを見せても、口には出さなかった。理愛もまたその検査を受けているのだから。理愛も雪哉と同様に種晶は持たず、幾度となく検査を繰り返しても種晶は検出されなかった。当然である。二人はそんなものには興味がないのだ。その力を手に入れることが出来る世界が作られたあの日、二人は大事なものを、大切な家族を失ってしまったのだから。最も必要なものが手元にないのだから。だから力などを求めることは永劫無いだろう。

「したさ。何もなかった」

「そう、僕もだ」

結果はいつもと変わらない。雪哉も切刃も能力を持ってはいない。

そう、二人は一切の異常を持たぬ者。六年前ならそれが普通だったのかもしれない。しかし今では能力を持つ者こそが絶対という程の社会観が確立されてしまっている。能力を持つ者こそ絶対であり、能力を持たないただの人間は『無能力者』（ヌーブ）であるという言葉も生まれたのも事実だ。有能と無能、明らかな隔たりを生んだ世界。いつしか平等などという概念すらも崩れ去り、こうしてどのような場所であろうとも差を別つ空間が出来上がってしまう。この小さな教室の中にも一人、異能の才能に恵まれた者がいただけで上下関係が生まれるのである。それでも二人はそんな世界観に微塵も触れることなく、会話を愉しんでいた。種晶が無い、能力が無いという話題は一瞬で終了したのである。

「切刃、もし能力が手に入るとしたら何がいい？」

「雪哉から話を持ち出すなんて珍しいね、そうだなあ……発火も透視も念力もあまり魅力的ではないよね」

「確かに、そんなもの程度が知れる。『図書館』の連中ならばそんな能力所持者ごまんという。俺もそのレベルの能力者なら容易に立ち回れる」

「ははっ、雪哉ならそうなんだろうね。そうだなあ、能力ねえ……あまり深く考えたことないけど、憧れある能力なら、この俗世を切り離すことができる、とかだったら欲しいかな。僕の人生以前にこの世界があまり好きじゃないからね、僧にでもなって念仏唱えてようかなって思うよ」

「ほう……切刃の望む力は幻想剣か、欲を出したな。確か『勇者の剣』の一人にそれに近い能力を持った者を見たことがある」

「そうなのかい？ とんでもないね。でも得られる力なら強大がいいなあ僕は。やっぱり絶対的な力で相手を屈服させるのが普通だろう？」

「その考えは否定しない、情弱な力で満足しているのならその限界はそこまでだろう。欲するのならば限界を超越するに越したことはない」

「だったら、雪哉は何を望むの？」

「俺か……？」

そんな切刃の質問に、腕を組み頤に手を置き、両目を閉じ、ゆっくりとその言葉を咀嚼し、考察し、希望を搾り出す。

「俺は、理愛を守る力だけでいい」

「ああ、妹さんいたんだっけ雪哉。なるほど、魅力的じゃないか。素晴らしいと思うよそれ。きっと雪哉なら見つけれられるんじゃないかな」

なんてやっぱり第三者に聞かれているのなら完全に冷淡に見られてしまうのかもしれない会話だった。それでも二人は至って真面目だった。それがいつもの雪哉と切刃なのだから。どんな世界に改変されたとしても、この世界とてつもない改悪を施されていたとしても問題はなかった。二人にとってはただの瑣末。世界の顛末には興味があるが、そこに二人はいないだろう。能力を持たない者には関係の無い物語なのだから。

そんな机上でただ空論を続けていると、携帯電話が鳴った。画面を開くとそこには一通のメールが届いたと知らせるメッセージと理愛の名前が記されている。

そこには一緒に帰って欲しいとだけしか書かれていなかった。しかし珍しい。理愛が雪哉にメールを送ること自体そうないので、雪哉はというと心底気にはなった。入学初日、緊張もしただろう。髪色と目色のせいか注目されていたのは雪哉も承知している。

放課後、とはいっても今日は入学式だけで授業があるわけでもなく午前中に終了した。切刃に帰り遊びにでも行かないかと誘ってきたが、そこは丁重に断った。理愛と帰るという最優先事項を果たす必要があったからだ。ただ何もなかったとしても切刃の誘いは断っていたかもしれない。

そんなことはどうでもよく、雪哉は普段より少し早く歩いていた。校門前には沢山の生徒らが下校している中で校門に背もたれて眉一

つ動かさぬ神妙な面持ちでそこに立っていた。通り過ぎる少年少女らはそんな理愛を見て怪訝そうな目で見過ごしていく。声をかけるのすら躊躇するその緊張感にただただ圧倒されているのだろ。それもそうだ、遠くを見つめるように、まるで魂でも抜かれた人形みたいに、頂垂れる様は不自然そのものだった。だから雪哉はすぐに声をかけた。まるでいきなり消失してしまいそうな程に、理愛の存在そのものが薄れていくように思えたから。

「どうした、理愛。まるで死人のようだぞ？」

「あつ、兄さん……すみません、その、帰りましょうか——」
「ああ」

厭な予感しかない、不快だった。理愛の目はどこか虚ろで、ついさつきにでも人間の死体でも見たんじゃないかってぐらいに怯えていたから。それでも雪哉は極力いつも通りに振る舞い、理愛の言動に期待するしかなかった。

街路樹を抜け、住宅街が見える参道。生徒の姿は見えず、今は雪哉と理愛の二人しかない。散りばめた桜の道を歩いていると、ふと理愛が歩くのを止めた。数歩だけ進み、立ち止まる雪哉は振り向き理愛を見つめる形になる。首だけ動かして、理愛を見れば……どこことなく震えているようにすら見えた。

「兄さん」

「どうした」

「今日、検査しましたよね？」

「ああ、そうだな」

「兄さんはどうでした？」

「何も、何も——なかった」

「そうですか」

沈黙。吹き抜ける風の音だけが耳を劈いた。雪哉はゆっくりと正面を向き理愛と視線を合わせた。小さな銀の少女、その震えを止めてやりたかった。抱く不安を取り除いてやりたかった。

「兄さん……わたしの身体の中に、種晶が、見つかったんだって——」

「それなのに、それができなかった。その言葉は確かに雪哉の耳に届いたはずなのに、雪哉は言葉の意味を理解できなかった。ただ雪哉が築き上げてきたモノが音を立てて崩れていくのだけはわかった。何もなくていい、何もないまま、ずっとこのままでよかったのに。」

ただ今だけはそんな理愛の謝罪さえも、雪哉の耳には聞こえなかった。心に届くことはなかった。それでも、はっきりと理愛の双眸には大粒の涙が溜まってただけはわかった。

1―4 虹色との邂逅

1―4 虹色との邂逅

時任理愛は人間が苦手だ。

そしてこれは時任兄妹が運命に吞まれる直前の話である。

時間軸は入学式が終わり、同学年の生徒らが一つの教室に詰め寄る辺りになる。苗字の順番で左上から座っていくのだが、理愛の席は一番後ろ、左端、窓から外の景色がよく見える場所だった。日の光がよく当たり、陽気に誘われてそのまま眠ってしまいそう。

この間、兄の雪哉と通学し校門を越えて、この教室に戻って来るまで延々と小さな声で理愛の容姿を口にする生徒らの言葉を頻繁に聞いた。しかし理愛は慣れている。右から聞こえた言葉は左に抜けて消えていく。髪も目も日本人とは思えない銀の色。ただ髪を染めているわけでもない。どうしてこんな色彩を帯びたのかも理愛は知らない。生まれた頃からこの色のままだ。一度だけ黒に染めたことはあったが、黒は銀に馴染むことなく、理愛の髪色を変えることはできなかった。だからとくに諦めた理愛は、自分の容姿に対してどうこう言われることは最早、雑音と同義だった。そんな雑音がする方に視線を移せば、音は消え、顔を逸らされる。これが続いたせいか理愛は人間が少しずつ嫌悪を抱くようになってしまった。

元々、苦手だったわけではなかった。けれど、幼い頃から髪と目の色を冷やかされ続ければ人付き合いを嫌がり、人見知りになってしまうのも無理はないだろう。

ここでもまた三年間、自分から味方を作れず仕舞いなのだろうと入学初日から希望は捨てていた。何もかも独りでやるしかない。そう、思っていた。

「へえ、すごいね、これ」

そうやって心の壁を形成し、一つの結界を作り上げていたはずの理愛の目の前に突如として侵入する者が現れた。

「綺麗だね、銀色の髪なんて初めて見るよ。当たり前か」

一つ前の席に椅子は黒板の方を向かず、理愛の方を向いていた。そこに座る少女もまた理愛を見ていた。気がつかなかった。声を掛けられて初めて自分の髪がその少女に触れられていることに気づいた。だが理愛がその手を解くより早く、少女は理愛の髪から手を離していた。

「もうちょつと触ったら叩かれそうな勢いだっただからね、ごめんね」
そう言って片目を閉じて、片手を垂直にし、小さな舌をチロリと出し、謝罪された。毒気を抜かれ、理愛の怒気はすでに薄れてしまっていた。小さく会釈だけして、少女から窓へと視点を移した。

「私、月下虹子。つぎしたにじこよろしくね」

それなのに、こんなにもはつきり拒絶しているのに、少女は自分の名前を言い、理愛の机に肘を置いていた。だがそんな虹子の行動に理愛は動揺していた。何のつもり？ 何を狙っている？ 何を考え、思っているのか？ 考えれば考えるほど虹子の行動が理解できなかった。

理愛と同じぐらいの小さな背丈。栗色の髪は肩まで伸び、微笑むその姿は小動物さながらだ。しかしどうだろう、一つだけ虹子を見ていて他の人と違う点が見つかった。

「目の、色……」

そこで初めて理愛は声を出してしまった。しまったと言わんばかりに顔を歪め、そのまま机を見つめ、黙り込んだ。だがそんな理愛を見て、虹子ははしゃぐように下向く理愛を潜り込むようにして見つめてくる。

「そうだよ、私の目はね色がコロコロ変わるんだよ」

角度によって赤から青へ、黄にも緑にも、多彩に変色させる瞳を前に理愛は開いた口が塞がらなかった。

「銀色にもなるんだけどね、でもこればっかはキミのが綺麗だよ」

「綺麗なんかじゃ……」

そんな言葉を使って欲しくはなかった。この色は嫌いな色だから好きになんてなれない。この髪と目の色のせいですと周りからは奇妙に、気味悪く思われてきたのだから。

「色はね、意味なんだよ。同じ色なんて、つまらないじゃない。人と違う、いいじゃない。キミはキミなんだし、私だって私だからこの目は気に入ってる」

「アナタ、なに？」

不意に理愛の空間に入り込んで、言いたいことだけを呟く虹子に理愛は憤りを感じていた。ただ価値観を押し付けてくるその様に、これ以上ない悪感情を持った。

「と、き、と、う、り、あ。ふん、時任理愛って言うんだ、いい名前」

「勝手にわたしの名前を呼ばないでください」

「まあ、まあ、そう怒らないでよ、わかってる、わかってるよ。キミが距離感を大事にしていることもさ」

「そうです、私は他人と馴れ合う気は毛頭無いんです。だからこれ以上話しかけないでください」

「気に入ったよ、なんというか他人は信じない。常に警戒し、接近すれば迎撃する。その姿勢、その態度、いいね。理愛、いいよ」

全くの他人、今日まで顔すら見たこともない少女がどうしてこれほどまでに理愛を執拗に煽るのか、そんなこと理愛にわかるはずもなかった。それでも理愛がわかることがある。この女、敵だ。

「しかしリア、ね。いかにもキミにピッタリの名前だね。そうかあ、びっくりだあ」

何度も何度も理愛の名前を反芻し、一人で何かに納得している。

そして理愛の名を反芻することを止めた虹子は教室の扉を指差した。教師の一人が理愛の名前を呼んでいる。種晶保有検査の順番が回って来たのだ。だが、虹子を飛ばして理愛の名前が呼ばれた。

理愛は虹子を見る。虹子は小さく手を振り、余裕綽々に机に突っ伏している。虹子の順番を飛ばすということは、虹子は種晶を保有しているということだ。この検査は種晶を持たぬ者だけに行われる検査だ。目の色が複数に変化するなんて時点で気がつくはずだった。目の色が好みに変化させるだなんておかしいじゃないか。それが能力でなくても、十分異質だ。そんなことに気がつけないなんて怒りで思考が鈍っていたのだろうか、すっかり理愛は失念していた。

「理愛は種晶がないの？」

「ありません、なくていいですそんなもの」

そのまま虹子には目もくれず理愛は立ち上がり、颯爽と教室を出た。長い銀の髪が理愛の歩いた道の上に軌道を描くように揺らめいている。そんな理愛の後ろ姿を見て、虹子は笑った。あまりにもそんな強がりが滑稽に思えて。

「理愛、キミがどれだけ『普通』に固執しててもね、理愛がいるだけで、この世界は十分異常なんだよ」

机の上に手を置き、顔を押し付ける虹子は誰にも聞こえない声でそう言った。ましてや賑やかな教室の中ではこの言葉が聞こえる人間などいやしないうらう。

だがそんな虹子の言葉はこの先の運命が動き出すことを知っているような口ぶりだった。

こうして理愛は教師に連れられ検査を受けることになる。そして結果として種晶が見つかることとなる。それは種晶を持たない兄との絶対的な決別となる。だけどそうして、やっと物語は始まりを遂げたということになるのだ。

1 - 5 銀の少女を救うのは

1 - 5 銀の少女を救うのは

「理愛が、声を、掛けてくれない」

顔を蒼白させて、額に両手を押し当てたまま雪哉は白目を剥いて、死人のように変わり果てていた。そんなやけに厭世的に落ちぶれる雪哉を見て切刃はクスリと笑っていた。

「笑い事か、今にも俺の右腕の力を暴走させてしまうかもしれない瀬戸際だというのに」

「そうなると、どうなるんだい？」

「世界の終焉、そして創造が開始される」

「なるほど、さながら『再開』^{リスタート}かい？」

「ほう、切刃にしては上手いな。だいたい合っているぞ」

「正解ではないんだね」

そこで一旦会話が中断される。

数秒間、音が完全に死んだ。そして雪哉は再び項垂れる。

「朝、目が覚めればすでに家を出ている。学校が終わればすでに帰っている。家に戻れば、部屋に閉じこもり……そして日が変わる――」

「何があっただんだい？ 入学式の日と一緒に登校したそうじゃないか」

そんな切刃の言葉が更に自己喪失を加速させる。視界が真っ暗になっっていく、生きる気力を失っていく。何もかもが狂い出したのは一週間前、入学式が終わってからの帰り道。

理愛の身体の中に、種晶が確認されたということだ。

「妹さんの身体に種晶が見つかったって、それだけだったんでしょっ？」

「それだけ、で十分おかしいさ」

あれから一週間、理愛は孤独を徹底していた。雪哉にさえ声を掛けることをしなかった。同じ屋根の下で暮らしているのだから、確実に顔を合わせるわけなのだが、それでも他人行儀に言葉を交わすだけ。これまでも、これからそんな風に声を掛け合うことなんてなかったはずなのに。

「能力の発動は確認されたの？」

「いや、それはわからない。聞いていないし、教えてもらってない。これはよくあることだ。」

種晶が身体のどこかに見つかるなんてことはさらにある。問題は、その先の能力発現にある。

唐突にお前は種晶を持っている、だから今すぐこの場で能力を発動させて見せろと言われても、そんなこと出来るはずがない。稀に能力自体を公にすることを嫌い、能力使用を拒む者も現れはするが、そんな者は殆どいない。それでも能力を使おうが使えまいが、種晶が確認されればその時点で能力者の仲間入りとなる。そこから有能になるか無能になるかはその者に掛かってくるだけである。

しかし、そんなことは雪哉には関係のないことだ。関係ないことだった。それがもう理愛には関係あることになってしまった。

だから、今の雪哉に出来ることはそんな現実を話を逸らすことで誤魔化すことだけだった。

「昨日は先に帰って理愛の帰りを待ったんだが……帰ってきたのが夕方を過ぎていたな」

「女の子が独りで出歩くのは感心しないね」

その通りだ。この町は都心から少し離れてはいるが、それでも夜になるまで外を出歩いているなんて雪哉としては心配でたまらなかった。帰ってくるまで不安で押し潰されそうになったが、いざ理愛が帰って来た時はそんな不安消し飛んでいた。怒りも沸かなかった。

「……俺は、ダメだな」

焦燥することしか出来ない自分の無力さに歯痒くなる。無能であることを恨んだことはなかった。それでも理愛の為に何もしてやれ

ないことだけは死にたい気持ちすら覚えてしまう。

何もなくてよかった。理愛も雪哉にも種晶は持たず、能力を持たず、ただの人間だった。たった一つこうして変化を伴うだけで、兄妹の関係すらも変わってしまう。変化は恐怖だった。このまま全てが変わってしまいそう——

そんなのは嫌だ。まだ雪哉は理愛に何も聞いていない。理愛の言葉を耳にしていない。一人愚かに苦悩して何になる。行動しろ。そうでなければ、苦しいままだ。

いつの間にか雪哉は上を向き、天井を見つめた。失意に吞まれていたはずの瞳に色が灯った。いつかそこには意思が宿り、今にも行動しそう。

「ふふっ」

そんな雪哉を見て、切刃は微笑む。

「何を笑っている」

「いやね、いつもの雪哉に戻ったみたいで何よりかと」

「俺はいつも通りだ」

「そうだね」

そして会話は終了された。

ともかく雪哉がすべきことは見つかった。

「兄さんに、声を、掛けてない」

放課後の帰り、理愛はまた逃げるようにそそくさと学校を出ていた。今日も雪哉に顔を合わせることなく終了してしまった。朝、いつもより早く起き、学校へ行き、自分を殺し、放課後をむかえ、逃亡する。いつまでもこんなことをしてはいられないのだけれど、今はどうしても一人でいたかった。考えても答えは出ない。そもそも何を考えるというのだ。自虐的に笑い、理愛は家と正反対を歩いた。すぐ帰ってしまったては家でどうしても雪哉と顔を合わせるこ

つてしまう。あの兄のことだ、すぐにも駆けつけて来そうだ。

だからこそ余計に理愛は雪哉に顔を合わせずらいわけで。雪哉は気を掛けて何か言うかもしれない。そんなことをさせてしまうのが一番気に入らないのだ。

君の身体の中に、種晶が見つかったよ。

たった一言で反転した世界。下唇強く噛み締めれば噛み締める程に怨毒が滲み出るようだ。

種晶保有検査はいつものように種晶は確認されないという結果が出るはずだった。それなのに、それなのに――

「死ね」

それは誰に向けて放った鬱憤だったのか。眉間に皺を寄せ、舌打ちをするその仕草だけで十分に自分の魅力を損ねていることに理愛自身気づいていないようだ。

理由は、なかった。

やるべき目的もない。

ただ同じ歩幅でこれまで歩いてこれたはずなのに、今はもう違う。ギョツと制服のリボンを掴み、終点の無い道を歩き続ける。するとどうだろう、

「や、理愛。こんなところで何してるの？」

会いたくないヤツがいた。理愛の目が更に釣り上がった。爪先が今にも皮膚を突き破りそうなぐらいに強く握り締める。

夕焼けがゆつくりと夜空に掻き消されそうな夕方と夜の境界線の境、丑三つ時にはまだ早い。しかしそれはとても魔的に見える。厭な雰囲気だけ醸し出して、それはいる。

「月下、虹子……」

懐疑の眼差しを向けて、理愛は呼びたくもない名前を口にする。その人の形をした魔性はニコリと笑い、三日月みたいに口を歪めて、目を細めてる虹子がそこにいた。

無言で二人は肩を並べ、歩いていった。とにかく立ち止まるわけにはいかなかった。少しでも動き、声を掛ける暇すら与えない。しかし競争は得意ではない。虹子より早く、虹子より遠くへ歩くことができれば、このまま逃げることであれば、なんて……そんなこと出来るわけもなく、

「あれから、どう？」

それは何に對してのことなのか。

しかし、それが何かと聞いてはいけない。会話とは意思表示だ。

疑問を傾けてしまえば、それだけで次の言葉が紡がれてしまう。ましてやこの女とはコミュニケーションなんて行為を取りたくはない。理愛は口に栓をしたまま、自分からは声を出さないことを徹底した。「お兄さん、いたんだっけ？ お兄さんは大丈夫だったんだっけ？

ああ、なるほどね。それで、家とは正反対を歩いてるわけだ」

心の中では言いたいことだらけだった。兄のことを口にするな。どうして家の場所を知っている。お前にわたしの何がわかる。けれど言葉を口にすることはしない。挑発に乗るわけにはいかない。

「お兄さんから逃げてるんだ、自分が変わってしまったことが怖くて、可哀想に。それなのにお兄さんは何やってんのかね？ こうして理愛は苦しんでいるのにね、ダメだね、ダメダメだね」

「五月蠅い、死ね」

まるで化けの皮を剥がしたみたいに、理愛は自分の奥底に隠していた本性を曝け出した。

兄を過小に評価したことが許せなかったから。そして兄が何もできないのは、妹である自分が逃げているだけだから、それをとやかく言われる筋合いはない。

「いつも弱そうにしてるのに、やっぱりそっちがホントの顔なのかな？ こわいこわい」

殺意を向ける理愛を見て、虹子は何も言わなくなった。

それでも、虹子のことは本当のことだから。だから、その「死ね」はもしかした最初から自分に対して言っていたのかもしれない。

逃げてばかり。この一週間、たった一週間だ。それでも永遠のよう気がした。七日間の乖離でここまで理愛は苦悶していたのだ。それでも、まだ逃げることを選んでいた。

まだ、理愛の横にはしつこく虹子の姿があった。そんな虹子を見て、鬱陶しく思い、消え失せろとさえ思っていた。それでも、どれだけ敵意を向けても、消え去らない。

「種晶は見つかったみたいだけど、能力の方はどうなの？」

もちろん無言。返事はしない。

「わかんないんだろうねえ、いきなりだもん、でもさあ——」
「な、につ？」

虹子がいきなり理愛の手を握り、引つ張り出す。

理愛と変わらない小さな身体とは思えぬ程の力で引つ張られているようだ。いつの間にか成すがままに虹子に引き寄せられてしまう。振り解きたいのに、まるで手錠でもかけられたみたいに理愛の手首から腕が完全に拘束された。

「離して」

「ダメ、ついて来て」

そう言つて、虹子は路地裏を通り抜け、交差点を越えて、辿り着いた先は公園だった。

大きな噴水の見える公園。だがその噴水からは水を噴出することなく、水は枯れ果て、ベンチは転がり、遊具は錆付き、無人と成り果てたまさに廃墟だった。

駅から遠く離れたこの公園のように、人の集まらない場所はどうして終焉するしかない。そんな廃れた空間は、まるで世界から切り離されたよう。

虹子の目的地に到着したのか、理愛の手を離し、解放された。光の無い世界がそこにはあった。たった二人、まるで世界に自分と虹子しかいないようだ。

「ほら、見てよ」

いきなり振り向いて、虹子は自分の制服をゆっくりとたくし上げ

る。綺麗な腹部が露わになった。そんな行為を見て、理愛は自分の顔を手で隠し、視線を遮ろうとした。何をやっているんだこの子は、恥ずかしいのか、羞恥心をどこへ置き去りにした。逆に羞恥した理愛だったが、そんなものはすぐに消えた。だって、その目には虹子の腹部に結晶が映ったから。

「種、晶……？」

「綺麗でしょ。すごく、すごく。これはねヒトを超えることが出来るものの。そんな素晴らしいものを手にしたんだよ。」

種晶というものを見たことが無かった理愛にとって、それは透き通る透明な石と想像していただけに、虹子の腹部に埋まるそれが虹色に煌いているのを見て綺麗だと思ってしまったのは事実だ。

「ねえ」

そんな輝きに魅せられた理愛を見て、虹子は満足そうにニタリと気色の悪い笑みを浮かべた。その表情を見せられて理愛は一步後ずさる。怖い。この前にいるのは、何だ。ニンゲン、なのか？

「ねえ、見せてくれないかな？ 理愛の、見せてくれないかな。理愛の、綺麗なヤツを」

胸ポケットから折り畳まれたナイフ。銀色の刀身が鏡のように反射する理愛の戦慄する顔が見えた。そんな刃先がゆつくりと理愛に向けられる。理愛は一步、また一步後ずさる。するとまた一步、虹子が鋭い切先を見せ付けて、理愛に近づいて来る。逃げればいい。今すぐにでも走ればよかったのに、それなのに背中を向けることだけはできなかった。そんなこととしてしまえば、本当にあの銀の刃が理愛の背中に突き刺さりそうな気がした。背を見せれば、殺される気がしたから。

「ああ……」

背中に衝撃。振り向けば大きな一本の樹が理愛の退路を塞いでいた。どうして右に左に移動しない。一方通行じゃないはずなのに。どうして動けない。背中に伝わる樹の堅さ。空いた両手が震え上がり、震える身体と一緒に歯と歯が当たる。さっきの殺意はどこへい

った。理愛が見せ付けた殺意は意味を成さなかった。そしてもう目と鼻の先に虹子はいた。兇器が振り上げられる。銀の軌道が理愛の頬を掠めた。白い肌を伝う赤い血が顎先にまで滴っていた。

「殺さない、殺さないって。安心してよ理愛、私はね理愛の力が見たいだけなの。すごいんだろうね、すごく綺麗なんだろうねえ」

「や、いやあ……」

「さっきの冷たい目はどこへ行ったの？ 睨んただけで人を殺せそうなおぞましい目はどこへ？ もしかしてこんな小さなナイフをチラっただけで怖いのか？ 萎縮しちゃう？ どうしてえ？ 折角、手に入れたんだよ？ その能力を使って、状況を変えようよ。そうしないと死んじゃうかもね」

刀身は頬に宛がわれ、虹子の鼻先が理愛の首元に触れる。舌を這わせ、垂れた血を舐め取られた。

「ひゃ……！」

「理愛、可愛い」

扇情的な表情を浮かべ、そして虹子の刃が制服の胸元を切り開いた。布は裂け、理愛の黒の下着が露出した。裂けた衣類に手をかけて、曝け出された柔肌に刃物が向けられた。

「私ね、理愛のが欲しいわけなんだけど、どう？」

「わたし……を、殺す、の？」

理愛の身体には種晶は目には映らない。だって身体の中にあるのだから。

「解剖しないと、ダメだから……そうするしかないのかな？ 悪いけどさっき殺さないって言ったのナシで」

麻酔をして、医者がメスを刺せばいいのではないか。なんて言葉は浮かばなかった。そんな問題ではないのかもしれないけれど、とにかく今はただ向けられた畏怖の象徴を前に恐れを成して、かすれた声を出すことしかできない。

「とりあえず、痛いのは一瞬だけど、失敗したらごめんね」

「なんで、なんで、こんなこと……」

「ちょっといろいろワケあってね、諦めてよ」

そんな都合で殺されるわけにはいかない。けれど反撃もできない。助けて。

その言葉を発することができない。誰に助けを求めるというのだ。こんな人気のない場所に、一体誰が助けに来てくれるのだ。でも、そんな時にふと浮かんだ顔があった。

兄さん。

理愛はそんな絶望の淵で兄の名を呼んだ。

けれど、そんなの卑怯じゃないか。自分が選択し、逃亡を続け、兄の接近を拒絶していた。そんな自分自身の行為は自業自得だ。その罪は死をもつて償われるのならば受け止めるしかない。

「どしたの？ 泣いてるの？」

「泣いて、なんか」

言われるまで気づかなかった。目蓋にいつぱいの涙を浮かべ、今にも決壊しそうなぐらい溢れていた。慙愧の念に押し潰されそうになって、もう我慢できなくなっていた。

「いいんじゃない、そうやって後悔しても」

理愛はもう何も言わなかった。潔く罰を受ける為、目を閉じ、凶刃にその身を裂かれることから逃げることをやめた。死ぬのは怖いけれど、それが自分の起こった行為から繋がったことなのなら、もう受け入れるしかない。

ごめんなさい、兄さん。

「待て」

その声に閉じられていた目を見開いてしまう。振り下ろされずは、その凶刃もまた理愛の身体に届くことはなかった。理愛も虹子もその声がした方へと視線を移す、そこには――

「俺の妹に何をしている？」

理愛の兄である雪哉が左手で顔を隠しながら立っていた。そんな構えをしたまま突っ立つ雪哉を見て、虹子は刃先を理愛から雪哉に変えた。

「誰、アンタ？」

「その兄だ。その物騒なナイフは仕舞ってもらおうか」

どう見ても武装している虹子の方が、素手の雪哉以上に有利である。そんな戦闘力の差を見せ付けているにも関わらず雪哉は臆すことなく立ち向かってくる。

「理愛、どうして劣情を煽るような格好をしている？　あまり外でそういう格好をするのは止めた方がいいぞ」

「ち、違います！　私がしたんじゃないぞ」

そこで大声を荒げて雪哉に反論した。いつものような軽いノリでもそれがよかった。戻ってこれた。こうやって軽口を叩けることに救われるのだ。何を逃げていたのか、兄はいつものようにそこにいたから。まるで自分がこれまで兄から逃げていたことが馬鹿らしく思えた。

「まあ、いい。ともかく、お前は理愛に危害を加えたということではないのか？」

「うーん、そういうことになるのかな。とりあえず面倒臭いし、アンタにも死んでもらおうかな」

ナイフの切っ先が雪哉に向けられたままゆっくりと雪哉に近付いて来た。雪哉は動かない。それどころか変なポーズをしている。

「兄さん、早く逃げて！」

「理愛、どこへ逃げろと言うんだ。俺はお前を探しにここまで来た。お前を家に連れて帰って初めて、俺の願いは叶う。それ以外はできないな」

「なんだお前。気色悪いヤツだなあ。これわかんない？　ナイフ、刺さると痛いよお」

雪哉のヘンテコなポーズとその口調がおかしくてたまらないのだろう。虹子は笑いながらナイフを振り回した。それでも雪哉は恐れることなく左手で顔を隠し、左肘に右手を添えて立ち尽くした。

「知っている。しかしそんな玩具でこの俺に一撃を加えられるとは到底思えない。その刃で障壁は貫けるのか？　防壁は崩せるのか？」

防護壁は侵せるのか？ 出来るわけがない。人間の作ったモノではどうにもならんぞ？ 少なくとも聖異物は携帯すべきだったな」

「何いつてんだ、こいつ？」

どんな場所であっても、どんな状況であっても、雪哉は変わらない。そんな雪哉の言動を前に虹子は明らかな動揺を見せていた。不可解な言葉、不審な行動、その異様さにこの男が本当に能力を持たないただの人間なのかとさえ思わせる。

「ともかく、俺の妹に何をしていた？」

「わたしは種晶を手に入れて、新しい人類に進化して、素晴らしい能力を手に入れたかもしれない理愛に話をしてただけ。アンタ、理愛のお兄さんなんだっけ？ 悪いんだけど今、大事なところなの。何の才能も持たないただの無能力者は帰ってくれない？」

そうやってナイフをチラつかせながら睨み、脅威を与えてくる。

そんな敵視を向けられて尚、雪哉は構えを解くこと無く、怪しく微笑む。

「種晶か、人間が決めた才能がいつしか一つだけに括られた、だなんて悲しいな。それだけが能力だと、異能だと？ 笑わせるなよ……」

…小娘」

「もう理愛とアンタにはどれだけでも届かないところまで来ちゃってるんだよ。とつくに違いが生じていることに、どうして気がつかないの？」

頑なにポーズを解かなかった雪哉が、その言葉で初めて解除した。そして地面を踏み抜くほどに強く踏み締めた。土埃が舞い、そして左手を水平に薙いだ。

「何が、違いだ。それはお前が決めることじゃ、ない！」

それは明らかな怒りだった。雪哉にはどうでもいいことだったのだ。理愛の身体に種晶が見つかるのが、常識を超越する能力に芽生えようが、どんなことがあっても変わらない。変化なんてものは無縁なままでいい。この世界がどれだけ変わってしまったても、時任兄妹はずっと変わらないのだ。それを何も知らない部外者が、さもわ

かったような口振りで間違ったことを、憶測だけで言い放つこの女が許せなかった。

「だから、なんなんだよ。わたし、アンタのこと嫌いだわ。理愛のお兄さんじゃなかったら今すぐ殺してる」

「気が合うな、俺もお前が嫌いだ。この左腕の封印を解けば瞬く間に殺害している」

そう言つて、左腕に巻いた包帯を見せた。

「この包帯を外させるなよ、死にたくなければな」

「なに、それ？」

そんな雪哉の台詞に虹子は少なくとも警戒していた。能力は無いようだが、何を仕出かすかわからない言動に虹子はナイフを構え、殺意に満ちた眼差しを向ける。

「全てを制止させる、腕だ」

「お前の命を停止させてやりたい」

「そうか、だけど残念だったな。お前も、俺も」

「何を言つて——」

遠くから聞こえる警報音。赤く灯された光が少しずつ大きくなってくる。その光を見て、虹子はこれまでにない酷く歪んだ表情になった。憤怒に塗れ、少女とは思えないおぞましい貌をしている。

それでもその音と光は次第に大きさを増す。雪哉は携帯電話を開いた。

「俺の力を使うまでもない、お前は社会的に抹殺される」

雪哉は既にこの場所に到着して、理愛が虹子に襲われていたのを見ていたのだ。そしてすぐにこの国の行政機関に連絡していた。何の準備も無く、無計画のまま突進する気はない。ただ時間を稼いだだけだ。雪哉はそれしかしていない。

「なるほど、ブラフつてわけかあ。やるね……にしても理愛とよく似て冷酷な目をしているね……キミ、こわいこわい」

ナイフを折り畳み、そのまま雪哉に背中を向けた。

「……名前、教えてよ？」

「時任、雪哉だ」

教える必要なんてないのに、雪哉は名前を教えた。妹を襲った敵に名を明かすのはどうかと思うが、それでももう虹子の人生はお終いだ。

「お前は？」

「月下虹子、じゃあねユキヤくん」

そのまま虹子は蜘蛛を散らすように逃亡した。追いかける気はなかった。凶器を所持している危険者を追跡したところで何も得られない。それにもう顔は見たし、そもそも同じ学校の制服を来ている人間なのだ。どこへ逃げても無駄だ。そんなことよりも、だ。

「理愛、帰るぞ」

上着を脱ぎ、それを理愛にかけてやった。服を破られて、下着が見えている。さすがの兄でも目のやり場に困る。そんな理愛は雪哉のブレザーを着込み、下を見たまま動かなかった。

「なんで、ここに……」

「俺は、理愛をいつも見てる」

「変態です、兄さん」

「常態だが」

「……………死ね」

か細い声でそう言った。雪哉の耳には届かなかった。それにしても運がよかった。雪哉はこうなるとわかっていてこの場所に到着してきたわけではなかった。これを理愛に伝えるかどうか迷ったが、やはりここは言わないでおくことにした。

雪哉は、ストーキングしていたのだ。

誰よりも早く校門へ行き、理愛を待ち、正反対へ進む背中を見つければ、それを追いかけて、虹子と一緒に歩く姿も見えて、いきなり走り出したのを確認したら、続いて走行。そしてここに辿り着いた。

「わたし、兄さんから逃げてました」

「そうだろうな」

「わたし、種晶が見つかったって言われて、なんだか変わっちゃっ

た気がして、それが怖くて」

「そうだろうな」

「でも、そんなことなかった、兄さんは助けに来てくれた」

そして理愛は手を取った。小さな手は震えたまま、冷たくなったその手が雪哉の包帯で巻かれた左手に添えられる。だから雪哉はその手を掴む。

「逃げるな、とは言わない。でも、逃げたくても、俺からは逃げるな」

自分を信用してくれなかったことは辛かった。理愛を見る目が変わるなんてことありえないのに。ありえないことが、ありえない。誰かの言葉、それだけは当てはまらない。それが雪哉の信念だ。

「でも、だって、もし、もしも、わたし、おかしな力が、あったら、兄さんが、にい、さんがあ……」

またそうやって泣きそうな顔をする。見たくない顔をする。だから雪哉は、

「阿呆」

理愛を叱咤する。理愛はそんな顔をして悲しそうな顔をする。でも、そんな顔を見て雪哉は首を横に振った。

「兄妹、だろうが」

卑怯な手を使ったものの、ともかくそれ以外の言葉を用いることはなかった。それ以上の言葉なんて雪哉には必要なかった。そしてたったそれだけで、理愛には伝わる。闇夜を伝う星空が駆け抜けた。そんな夜空の下で雪哉の顔を凝視して、理愛は涙を浮かべたまま、笑顔を見せる。

「はい」

だから、今はそれだけでいい。

常識からどれだけ離れても、問題ない。

そんなもので、切り離されては困る。家族だから。

頭と目に銀の光沢を放つ少女。雪哉の妹。たった一人だけの家族。だから、理愛を守るのは雪哉だけだ。こうして、雪哉は一層理愛を

守護すると誓うこととなった。何があっても、何をしてでも守り通すということ。

だからいつだって銀の少女を救うのは、いつも、一人だ――

1 - 6 無能なる者の敗戦

1 - 6 無能なる者の敗戦

「よかつたじゃないか」

朝、学校で切刃と話をした。

切刃からではない、雪哉からだ。あまりに珍しかったのか、切刃はいつもより機嫌良く、雪哉の話を聞いていた。雪哉から声を掛けることは殆どなかったから、切刃は朝一番に開口する雪哉を見て、驚愕しているようにすら見て取れた。

「ああ、今日は理愛と一緒に登校した」

表情こそ変わらないが、いつもよりずっとその声は弾んでいた。

「能力だつて使えないままのようだ」

種晶こそ身体の奥底に眠っていても、異能の力が発動することはなく、そもそもどうやってたらそんなものが使えるのかわからないとまで言っていた。

種晶の所持を明かすのは義務だが、能力開発や能力習得は個人の自由だ。誰もが能力を手にしたわけではないのだ。人を超えるということは人を止めると思う人もいる。人であり続けたいという想いから、種晶をその身に宿しても、異能はいらないと決断する。それは自由だ。もちろん、願いや想いだけで得られる力ではない。そう安々と道端に落ちた塵を拾うことで手にする代物ではないのだ。

そんな中で理愛は種晶を身につけてもどうすればいいのか、どうやれば使えるのかわからないのである。

それがどうしたのだ。わからないならそれでいい。理愛がいつものように笑ってくれる。それだけでいい。もう何も恐れることはない。

「でも、気をつけなよ」

そんな幸福な気分にな水を注すように、切刃はそんなとんでもない

ことを言う。けれど切刃の表情は曇っていた。でもそれは本当に雪哉や理愛を心配してした顔ということだけは鈍い雪哉でも読み取れる。

「能力を手にする権利を持っているのに、能力持たない……能力を持った人間らがそれを見れば、ただ無差別に侮蔑するってことをね」
「……そう、だな。でも、」

才能を開花し、能力を覚醒させる者は圧倒的に有能者として称え、その逆として能力を持たない者は無能者として蔑まれる。これが『有^{コダー}能力者』と『無^{ヌーブ}能力者』との差だ。ましてや最初から種晶を持たない為に能力が使えないと、種晶を持っているのに能力が使えないとは雲泥の差が生まれる。この世界にそんな蔑称が生まれ、差別される社会が生まれたのもまた事実だ。種晶を持たない無能力者の雪哉、種晶を持つ無能力者の理愛。この時点で分別され、受ける侮辱の大きささえも変わる。

「その時は、俺も一緒だ」

「ふふつ、そうだったね。雪哉はおもしろいなあ」

「失礼なヤツだな」

「悪い意味じゃないよ。羨ましいと、思ってたね」

そう言っ^て切刃は雪哉を見ず、その後ろの窓に視線を向ける。

桜の花はもう殆ど散って緑色の花が生えていた。経過は変化。何もかも同じままなんて、ないのかもしれない。必衰の理を司るこの世界に、雪哉の思い描く理想は成就されることはないのかもしれない。それでも夢を見てもいいんじゃないだろうか。これからずっと、理愛と一緒に……なんて、そんな考えを持つことは愚かなことなのだろうか。切刃の過去に興味はない。切刃もまた何かあって、ここにいる。雪哉は知っていたのだ。男の切刃が、女性のように髪を長く伸ばすその意味を。だって切刃の首に種晶が埋まっていたことを。それでも切刃は能力を開花していない。

切刃は無能力者なのだ。だからこそ雪哉の妹である理愛が種晶を持っていることを雪哉に教えられた時、我が子のように不安そう

に、悲哀を帯びた目をして、雪哉の話を最後まで聞いてくれたのだろう。

能力を持たないことは恥ずべきことではない。それなのにこの世界はそれを許さない。能力を持たない人間が、まるで人ではないよ
うな、そんな人道から外れたような仕打ちを受けるわけではない。
けれど、この世界はどこか異常だ。果たしてそれは、いつからそう
なったのか……なんて、どうでもいいことが。

放課後、携帯電話を開くと妹が先に帰って欲しいという内容のメ
ールを送ってきた。前回のような逃亡とは違い、ちゃんとした文章
でこうして送ってくれるだけでも十分助かる。気がついたらない
なんて、そんなことされるよりかは遥かにマシだ。雪哉はわかった
とだけ書いて返信した。

一人で帰ることになったものの、別に理愛と帰るか帰らないかの
違いでどこか行く場所があるわけでもなく、どこかへ行こうなんて
気も起きない。まっすぐ帰ることにした、のだが。

「よお、そこのお前、ちょっと待てや」

校門にて、雪哉はガラの悪い不良に絡まれることになった。

しかしそれがただの不良ならば鼻で笑って通り過ぎてやつてもよ
かったのだが、そんなことはできなかった。同じ制服、ボタンを外
し、シャツは外に出し、耳にはピアス。おまけに金髪。なんという
かまさに絵に描いたような悪人みたいな男が雪哉の行く手を遮って
いた。

「……序列七位が、俺みたいなゴミに何の用ですか」

どれだけ風貌が悪党であっても、相手は学年上の先輩なのだ。敬
うことを忘れたりはいしない。そこまで常識知らずではない。自分の
風貌は常識から完全に逸脱してはいるが。

序列。

それは能力の差を数字に表したものだ。

第一位から第四十七位まで存在し、数字が若ければ当然、優秀な能力を持つているということになる。とはいってもこのの中に入れば十分であり、未来を有望視されるのは明らかだ。何故なら数割にしか満たない能力者とはいっても、何千何万はいるのだ。その中の四十七人の内に入れば、その異能は高く評価された証明になる。

その第七位が、雪哉の通うこの学校にいる。それがこの月下雨弓つきしたあゆみである。誰もこの男には逆らえない。この町に君臨する能力者の中でも最強であろう雨弓に誰もが恐れ戦き、逆らうこともできない。そんな男に捕まってしまっではどうしようもできない。雪哉もまた何も言えずに押し黙ることしかできなかった。相手はこの国でも十指に入る精鋭、見た目だけで判断するのは愚か者のすることだ。雨弓の実力は計り知れず、能力を持たぬ雪哉にとっては脅威以外の何者でもない。だけど、

「ちよつと付き合えよ」

「すみません、急いでいるんで」

用事はないが、どう考えても穏やかではない。自分から危険に足を踏み入れるわけにはいかない。この場から早急に脱出することが先決だ。しかし。雪哉が雨弓の横を通り過ぎると、雪哉のいる位置より少し横の地面が小さく抉れてた。

「今のは運がよかったな、オレさノーコンなんだよ。たまたまハズれたからよかったけど、ホントはお前の足狙ってたんだぜ」

雨弓が親指と中指を擦り合わせている。そうすることで何が発生したのかは雪哉には理解できるはずもない。しかし削れた地面を見て、もしそれが自分の足に接触したらどうなっていたのか。そう考えるだけで背筋に悪寒が流れた。歩くのを止め、雪哉は振り向く。

「場所を、変えませんか」

「当たり前だろ、ついて来いよ」

そして雪哉は捕獲された。狩られた獲物は狩人に連れ去られるだけだ。雪哉は黙って、雨弓の後を追うことになった。

あまりの出来事に周りの生徒らは臆病に自分たちは関係ないと無

視を決め込んでいる。それもそうだ、強力な能力を使う存在者の突然の登場に驚かないわけがない。そして何の力も持たない一生徒を連れ去る。はつきりとした上下関係の前に何もできない。そんな生徒らはチラチラと雪哉と雨弓を見ているのだが、雨弓に睨まれると一目散にと消えていく。取り残される雪哉。別に助けて欲しいとは思わないし、そもそも期待していない。どうにでもなれ……雪哉はそう自虐した。

到着した場所は、棧橋の下……これまた人気のないところをチョイスされた。

電車は通り抜けるけれども、真下で胸倉を掴まれている生徒がいるなんて誰にも気づいてはもらえないだろう。雪哉も同じ目に遭うのかと思うと嘆息を漏らすことしかできなかった。

しかし雪哉は雨弓とこうして顔を合わせるのは初めてで、どうしていきなり声をかけられたのかもわかっていない。だから雨弓が怒気を浮かべ、敵意を向けてくる理由がわからないのだ。

もつといえば、こんなところに連れられて……第一声と同時に鼻の上を鈍器でおもいきり殴られたはずなのにいつそんなことをされたのかわからない自分の状態がもつとわからない。

コンクリートの壁にもたれ、流れる鼻血を手で押さえた。何をされた？ 何で血が流れてる？ 痛い。とても痛い。でも痛くて声が出ない。

「お前にハメられたって、虹子が言ってるよ、悪いんだけどお前死刑だわ」

なるほど。

そこで初めて合点がいった。

（やはり、あの小娘、「あの」月下の妹だったわけか）

雪哉は虹子が理愛を襲っていた日、名前を聞いた時から気にはなっていたのだ。月下の姓。雨弓のことは入学した時から知っていた。有名人だったから。それもそうだ。国を代表する能力者の一人がこ

んな辺鄙な地でいればすぐにでも有名になる。勝手に耳にも目にも入ってくるものだ。そんな能力者の妹が虹子だったというわけだ。

「でも、月下さんの妹は……俺の妹に、乱暴したでしょう」
「だけど反撃することは止めない。」

どんなに理不尽な一撃で襲われたとしても、信念を曲げるわけにはいかない。暴力で相手を捻じ伏せるような相手を前に、折れるわけにはいかなかった。たとえ能力がなかったとしても。

「お前、誰に口聞いてんの？ お前は虹子の顔に泥を塗った、それだけで十分殺す理由にだろ？」

「……いい兄だ。妹の為にそこまで出来る、とても、いい兄だ……でもやり方が、おかしい、な」

敬うことはやめた。一つ上なだけでそこまでの義理はない。鼻血まで出されて気を使うなんてそこまで雪哉にマゾヒストの素質はない。付け足すならこんなヤツに自分が劣っているなんて自殺ものである。能力一つで何でもできる、あたかも神にでもなったような立ち振る舞いに心底反吐がでそうな気持ちだった。

「だったら、なんだ？ お前も妹がそんな目に遭ったらどうすんよ？」

「お前とは違う方法を用いる。お前のやっている暴力で、俺の選択肢を狭めるなよ」

そう言い切った後に、雪哉の身体は吹き飛んだ。まただ——見えない何かが雪哉の身体を蹂躪した。コンクリートに激突し、雪哉の身体がへの字に拉げる。そのまま数秒ほど空中に浮いたようで、気がつけば砂利の上に転がっていた。そして雨弓の靴底が雪哉の顔を潰す。

「無能力者のゴミが、なんで意見してんだ？」

雪哉は自分の顔が汚い靴で潰されることよりも、目の前の邪悪が人を別することに憤怒していた。同じ人間が、能力を持っているだけでもこうも驕り高ぶるのかと思うと、余計にそんな狂った力に関心など抱けるはずがないと思った。

「なんだ包帯なんか巻きやがって」

「やめろ、聖骸布には触れるな……死にたく、なかつたらな」

この期に及んでまだそんなことを言う。

ボロ雑巾のように傷ついた雪哉だが、それでも瞳に灯った光は消えていない。そんな強がりを見せ付ける雪哉を見て、雨弓は苛立ちを隠し切れない。

「なんだお前？ 妄言吐きのキチ。いか？ おもしろすぎんだろ」

「うる、さい……」

腹部を連続で蹴られ、顔は踏まれ、意識が朦朧とする。

このまま眠ってしまった方がいいのかもしれない。痛いのは、やっぱりイヤだ。

「こんなのが兄貴だなんてお前の妹は可哀想だな。次はお前の妹を今のお前みたいにくすりそのままのこととしてやろうか？」

ドクン。

雪哉の目が開かれる。

でも、それは幻想の未来でしかない。願えば力を得られたか？

差し出せば全ては叶ったか？

この世界は、思い通りにはいかない世界なんだ。だから自分の大切なモノは独りでに消えて無くなってしまう。どんなに窮地に立たされたとしても、天から声は聞こえない。脳裏に音は響かない。覚醒なんてありえない。これは夢物語ではない。現実なのだ。

そんな現実を、雪哉は思い知らされる。こうして理愛に危害を加えようとしているのに、意識がこんなにもはつきりしているのに、手を握り締めるだけで精一杯じゃないか。震え上がり、怒りの炎はこんなにも燃え上がっているのに、身体は言うことを聞いてくれない。思い通りの未来が構築されることはない。

無力。

力の無い者。能力の無い者。無能力者。それは雪哉だ。

能力を持つ者は思い通りに全てを手にし、全てを奪う。

そんな略奪者を前にしても、何もできない。

切刃と語らいだ力はどこへ。世界を壊し、創ることができはるはずではなかったのか。『図書館』なんてそんな組織、実在するはずもなく、世界はこんなにも異能で溢れてる。そんな溢れる世界の環から外れてしまったままで、一体どうやって能力者と戦うというのだ。初めから、全ては決定していたのだ。能力を持つ者が勝利者で、持たぬ者は敗北者でしかないということが。なら、ここで願えば顕現するか？　ここで吼えれば具現するか？　何もできやしない。だから雪哉はゆつくりと、立ち上がり、そして額が砂利に擦れるまで下げることにしかない。

「妹に、手を出すのは、やめてくれま、せんか」
それは懇願だった。

自分はどうなった方がいい。どれだけ惨めでも無様でも、形などに拘ってはいられない。妹を守る為ならと、決意したはずだ。その誓いを早々に破るわけにはいかない。

「この通り、です」

だから、雪哉は頭を下げる。

雨弓が大声を上げて笑っていた。何か言っている。もう何も聞こえなかった。だけど、こうするしか他に方法がない。何の力も無い自分にできるたった一つの方法はこれしかなかったのだ。

「お前、なんなんだよ、おもしろすぎんだろ。そこまでするかあ？　いや、おもしろいもん見してもらったわ。別にそこまでするかよ、オレだって鬼畜じゃねえし。そこまで頭下げられたら、オレも何も言えねえじゃん」

腹を抱えて笑う雨弓は何度も何度も携帯電話のカメラ機能を使って写真を撮っていた。雪哉のあまりにも無様な格好を保存しているのだろう。フラッシュの逆光が視界に入る。それでも雪哉は何もできなかった。

悔しいとさえ、思わなかった。

理愛に、手を出さない。それがわかっただけで安堵してしまう。

「お前、ホント可哀想なヤツだな。無能ってどんな気持ち？　ねえ、どんな気持ちなんよ？　可哀想すぎて、オレの今の罪悪感半端ないことになってるわ」

頼むから日本語で話してくれとは言えず、機嫌を損なわぬように雪哉はともかく何も言わず、全てを受け入れることにした。

夕焼けの空に笑声が響き渡る。雪哉にとってはそれが不協和音にしか聞こえない。

「じゃあな、お前おもしろかったわ。明日、学校楽しくなんぞ」

そして、雨弓は雪哉の後頭部を蹴り、そのまま棧橋を後にした。頭に響く鈍痛で雪哉の身体がのたうち回る。最悪の気分だ。人としての威厳を全て崩落された。今、雪哉の人間としての株価は地の底にまで墜落していることだろう。

「……よく耐えたな」

そうやって自分の左腕の包帯を庇うように右手で押さえる。その行為は滑稽という言葉そのものだったろう。でも、そうすることで自分を保つしかできなかった。

本当に、無様だ。

全能たる結晶が集う世界に、雪哉は何も持たない弱者でしかない。そう、雪哉という人間そのものがこの結晶世界での無能力者なのだ。

だからこの日、時任雪哉は初めての敗北を喫することとなった。

1 - 7 有能なる者の敗戦

1 - 7 有能なる者の敗戦

兄妹の絆が深まり、数日が経過した。

桜花は枯れ、地面に落ちたはずの花びらは姿を消した。

虹子に襲われたあの日、早々と家に帰ってからというもの雪哉とは話をした。

身体の中に種晶が見つかったということは前に話したが、能力は発現していないことをまだ話していなかった。それは嘘じゃない。本当に何も変わらなかったのだ。誰かが理愛の身体の中に種晶があると云った。機械を使って、調べて、そう結果は出た。けれど、何もわからないのだ。

自分の身体を見ても、何もおかしいところなんてない。おかしいのは銀の髪と瞳だけ。それは生まれたところからずっとおかしいことだ。そんな異常は理愛にとつての正常なのだから、もうそんなことは気にならない。しても意味ない。

だけど、理愛の身体の中にあるその種晶をどうして虹子は欲しいと言った？

そして、そんな疑問よりもわからないことは……月下虹子が飄々と学校にやって来たことだ。

人一人殺そうとしたはずだ。雪哉は警察に一部始終話したはずなのに、顔も身元もはつきりしているのだ。見えない犯人ではないのだ。事件は起こるより早く、決着していたはずなのに、どうしても言わない。教師はそんな虹子を見ていつものように出席を取っている。どうして？ 誰も何も言わないの？ そもそも虹子が理愛に何をしたのかさえ周囲は知らないけれど、別に理愛は虹子は殺人者だったなんて言い触らす気はなかった。終わったことだと思ってい

たから。ただ単純に理愛がそんなことを言える相手がないというのは言ってはならぬことだろうか。

それでも、今、目の前のこの奇怪さに嘔吐感がこみ上げてくる。別の世界にでも迷い込んだ気分だ。

「ひさしぶり理愛、さみしかった？」

理愛の横を通る最中、虹子はそう言った。

理愛は下唇を噛み締め、無視を徹底した。なんだこれは、どうして、こいつも笑っていられるのか。その神経を疑う。

「話があるなら、放課後……聞くよ」

耳元で小さくそう虹子は言った。しかし相手の土俵に入り込む真似はしない。だから理愛は「なら屋上で」とそう返した。

授業のノートを写すものの、教師の声は頭に入らなかった。何の授業をしたか、どんな内容だったか。そんなことを気にかける余裕はない。この学校に、自分の憎む敵がいる。そんなのを前にしてよく平静を保っていたものだと自分を褒めたいぐらいだった。

筆箱からは取り出したのは何に使うかわからぬまま入っていたはずの使わないまままで新品だったカッターナイフ。それを手早くポケットに忍ばせる。護身として、身を守る武器は必要だ。相手はナイフを携帯していた殺人者。それを前に何も持たずに立ち向かうわけにはいかない。

放課後のチャイムが鳴り、授業は終わった。

その音は戦いの鐘を鳴らしたかのようにだった。理愛はそそくさと屋上へ向かう。自分でも思い切ったことを言ったものである。何故なら理愛の通う学校の屋上は漫画のように開放されているわけではないのだから。屋上の侵入は禁じられており、それを破れば処断されるのだからそう近付いていい場所ではなかった。そもそも新入生の分際で、屋上が頑なに施錠されていることを知っているわけでもない。けれどいざ行ってみれば、錠前は両断され、扉は開いていた。この扉を開けば、戦いは始まる。もう逃げられない。準備は万端ではない。即席で装備を整えただけでどうにかできるとは思えない。

しかしやるしかない。逃げるわけにはいかない。兄を呼ぶべきだったか？ それはダメだ。逃げない。一人でも、戦えることを兄に証明したい。理愛は兄にただ心配をかけさせるだけの存在にはなりたくないから。

「やつほお、来たね理愛」

「なんで、ここにいますか？」

「やだなあ、脱獄して来たわけじゃないよ？ ちゃんとポリ公には事情話したし、いろいろしてね、私はこうして釈放されたのでした」
あり得ない。

そんな馬鹿げた話があつて堪るか。あの日、兄は警察に事情を話し、理愛も警察から話を聞かれたから、包み隠さず全部言った。それなのにどうしてこんなところに虹子がいる。

「ムリだよ」

「何が……？」

「私をどうこうしたかったら、力を見せない」と

意味がわからない。理愛は十分、兄の不思議電波を受信させられているわけだから、相当おかしいことを言われても感受することは出来る。それでも、虹子の発言だけは理解しがたい。どうして能力を見せなければいけない。そんなもの使えるわけがないのに。

虹子の瞳は黒から白へ移り変わり、やがて金色に輝いている。そしていつぞやのように胸ポケットから折り畳んだナイフを見せ付ける。

「あなた、馬鹿なんですか？ こんなところでそんなもの見せて……わたしが悲鳴を上げたらおしまいですよ？」

「ふふつ、ホントにそう思う？ いいよ、悲鳴でもなんでも叫びなよ」

虹子は狼狽することなく、むしろ理愛の行為を許可したのだ。おかしいのはどうしてそこまで自信を持って、こんな狂った行為に及ぶことができるのかだ。理愛を襲ったあの日も、突然の出来事だった。この女は、本当に、どこか、壊れているようだ。

「ありや？ 叫んでもいいんだけど、どつたの？」

だから理愛は悲鳴を上げることはやめた。意味がない。あれだけのことをしておいて数日程で帰還されては、何らかの力が働いているとしか思えない。兄の影響だろうか、妹の理愛までここ最近、おかしい思考が働くようになってしまった。

あれだけ兄の発言も行動も卑下していたくせに、なんて、兄妹なんだからこうなってしまうのは当然か。これだけ異常な状況でさえ、兄のことを思い浮かべると笑ってしまう自分がさらにおかしい。

「月下さん、これ以上、わたしに関わるのはやめてください」

だから、これは戦闘だ。兄のよく言う、戦争か、闘争か。

手にはカッターナイフが取り出され、刃先が伸びる。

種晶が見つかったなんて知ってから、こんなにも変わってしまったのだらう。ましてや殺されるかもしれない場面にすら遭遇するなんて、お陰で日常なんてとくに壊れてしまってる。銀の髪と瞳だけを恨むはずの世界に、憎悪がもう一つ、いや二つ加わるだけで、理愛の世界がおかしくなる。もう十分だらう。そんなに憎いのなら、壊し返してしまえ。わたしの世界から、消えてしまえと……理愛は刃を力チリと引き伸ばす。

「え？ 何？ いきなり？ そんな突然？ 話は？ 何もないの？ 聞きたくないの？」

「興味、ありません。アナタの、ことなんか。だから、消えてくれますか？ わたしの前から消えてくれますか？ お願いです、わたしをこれ以上苦しめないでください。アナタを見ていると疲れるんです。憑かれたみたいに苦しくて、重くて、目障りなんです。死んで、くれますか？」

どうしたんだらう、自分は何を言っているんだらう。おかしくなってるおかしくなってるおかしく——

なんで、身体が勝手に動くの。こうするってわかってた？

リノリウムの床を強く蹴り、跳躍した。まるで自分の身体じゃないみたいに、強く跳ねる。きつとこれはもう決まっていたこと。自

分の前に現れた敵を、やつつけるためにすることだ。

どうして？　なんでそんなことするの？　身体は動く。止まらない。震えが止まり、薙いだ刃が虹子を襲う。

「ひゃあ！　もつと驚くと思ってた！　理愛を殺そうとした女が学校にやって来ただなんて、普通おかしいでしょ？　それなのにさあ、じゃがいも見るみたいに目の色一つ変えないんだもん。やっぱり理愛、理愛、理愛理愛理愛、アナタ、『本物』なんだってえ、だからさあ、教えてよ。私に見せてよ。魅せてよぉ！」

何を持って本物と言うのか。それならば贋物は何なのか。

理愛にはわからない。わからなくていい。虹子を倒せばそれでいい。こいつが理愛にとっての障碍ならば、それを押し留めるのは理愛でしかない。兄に頼るわけにはいかない。妹の問題は妹が解決する。攻撃されたのなら、迎撃するだけの話だ。なんでそれに気づかなかった。

そう気づいただけで、身体はこんなに軽い。どうして？　どうして今から人一人殺すかもしれないのに、気持ちはこんなに晴々しいのか。その理由はすぐに気づいた。そうだ、兄を心配させることがなくなるからだ。不安を根底から断つことができる。素晴らしい。なんて素晴らしいのか、また元通りだ。こいつを終わらせれば。「すごい、速い、はやあい！」

「死ね」

縦横無尽に突出する刃がぶつかり合い、火花を散らす。工作用のカッターナイフが携帯武器のバタフライナイフと互角に刃を重ねている。当たり所が悪ければ間違いなく致命傷だ。薄いカッターナイフの刃だつてきつと容易にへし折れるはずだ。それなのに理愛は銀の瞳でそんな紙一重の世界を直視する。

「なに、なにになになに？　隠してたの？　そんなの隠してたの？　なんであの時そうしなかったの？　もつと早く楽しめたのにい、びつくりしたよ、びつくりしいしたぁ！」

刃と刃が重なる度に、虹子の狂った顔が見え隠れする。そんな顔

を冷酷な瞳で見つめる理愛。命を奪う銀の刃と同じ瞳の色で、虹子を一瞥し、再び跳躍。

「なっ……、速いい？」

そこで初めて興奮し続けた虹子の顔の色が変わった。瞳も赤から青へと変色している。だって、理愛の小さな身体が半月を描き、宙を舞っていたから。そのまま墜落する理愛は逆手に持ち直したカッターナイフで虹子に切りかかる。

だが、間一髪か虹子はそれを前転し、回避する。それでも背中 of 制服の布がバツサリと切り裂かれていた。明確な殺意を持って、その刃は振り下ろされたのだ。もし何もせずにその場でいたのなら、脳髓と血液で屋上が水溜りを作り描いていたことだろう。

「殺す、殺すつもりだった……私を、殺す、つもりだったの？」

「ええ」

掠れた声で呟く虹子に理愛は素っ気無くそう言った。

「そう、そうだよ、ここまでしてるんだ……覚悟、してるってわけだあ！」

理愛の身体を穿たんと尖鋭な刃が襲い掛かる。けれど、その刃はまるでバターでもくり貫いたみたいに綺麗に無くなっていった。肝心の刃先は地面に転がり、ナイフとしての意味を失わされた。

「は、はは……すごいや、こりや勝てないかも」

「勝ち負けはいいです。だってアナタが消えればもう終わりなんですし」

「ふふ、おかしくなったね理愛。もう認めたの？ 私たちと同類ってこと」

「一緒にしないで。兄さんがわたしを認めてくれるから、だから怖くないだけです」

こんなに早く、こんなに速く、これまでこんなにも素早く理愛は動けなかった。

どうしてこんなことができたのかもわからない。

それはきつと常識を超越したのだけははっきりとわかる。

だから、おかしくなったというのは正しいのかもしれない。それが嫌だった。そうはなりたくなかった。けれど、もう怖くない。逃げない。兄は逃げない。そして理愛に逃げるなど言った。その言葉だけで救われているのだ。力が無い無能と呼ばれるそれに兄も分類されてしまっても、理愛にとっては有能以外の何者でもない。言葉一つで心を救うことができるそんな兄を、理愛は決して裏切らない。裏切れるわけがないのだ。だから、自分も戦う。兄のように。

「ふふ、ふふ……」

そんな理愛を他所に虹子は笑っていた。武器を失った虹子にそんな余裕はないはずなのに、馬鹿にしたように笑う虹子が許せない。理愛はカッターナイフの刃先を向ける。

「何がおかしいの？ もう、アナタは何もできない」

「そうかもね、でも、理愛のお兄さんはどうなのかな？ あのいけ好かないクソ野郎。理愛はこうやって私をやつつける術がある。でもお兄さんはどうなるかな？」

「……死ね」

カッターナイフを持つ手に力が籠る。このま力を矛先を前に向ければ、虹子の人中を突き破ることぐらい容易く出来る。だが、それよりも兄の状況が気になってしまっただけのように刃の位置を固定できない、理愛の手が震えていたから。

「私にもさ兄貴がいてね、今頃、ボッコボコにされてんじゃないかなあ。ホント、あのチキン野郎。勝てないってわかって先にサツ呼んでるとかつまんねえことしやがってさ」

理愛はその言葉に反応し、虹子に覆い被さっていた。

背中から思いっきり転がされたっていうのに、虹子は平気な顔のまま勝ち誇る。おかしい、確かにさっきまで勝っていたはずなのに。だからこの女に少しでも勝利の余韻を味合わせる気なんてない。そのまま押し掛かり、刃に殺意を乗せる理愛は虹子に密着したままこう言うのだ。

「次、兄さんのことを口にしてみなさい……わたしは躊躇いもなく

アナタを殺すわ」

「ひいーこわいこわい、なんだ、そっちの目の方がずっと綺麗。ずっとずっと死んだ魚みたいな目で怖かったんだよ。感情が欠落してるのかなって。でもそうでもなかったみたい」

押し付けられたカッターナイフの刃が虹子の頸動脈に当てられていた。それなのに虹子は汗一つ掻かずに煽りを止めない。

「その減らず口、引き裂きます」

「エラく強気だね理愛、どうしたの？ 何を焦ってるの？」

「何を言って——」

パン。

そんな腑抜け音が屋上で鳴った。虹子はやはり終始笑いを止めることはなかった。青色だった瞳が黄色から緑色に変わり、また赤に戻り、そして銀色にと止まらぬ変色の瞳で理愛を見つめる。ほんの一瞬の出来事だった。理愛の手に行っていたはずのカッターナイフの刃先が粉微塵に砕けていた。

何が起こったのかわからず、そのまま後退。その後退は無意識の内にした防衛本能から行ったものだった。今、この女、何をした？ 「すぐくよかった。初めてにしては、上手く動けてたんじゃないかな？」

その変わり続ける瞳が不気味に虹色を形成する。一色ではなく、複数の色を宿すその瞳で見透かされるだけで理愛の脳内に警鐘が鳴り響いていた。

「わからない？ 何をされたか？ 何が起こったか？ わかるよ。理愛ならわかる。始まったばかりの理愛の力じゃ、まだ経験不足でムリかもしれないけど、でも大丈夫。理愛の『特別製』なんだよ？ 問題ないって」

「何を言って……」

虹子は笑う。不気味に、不吉に、道化師のように。そしてくるり

と一回転し、子供がはしゃぐようにステップを繰り返し、肩で小さく理愛に触れるか触れまいか微妙な力で接触する。

たったそれだけの行為で、理愛の身体は途端に吹き飛び、屋上からの落下を防ぐフェンスに叩きつけられたのだった。脳味噌を限りなくシェイクされたようだ。視界が揺らぎ、意識が途絶えそう。それでも必死になって立ち上がる。そんな姿を見て、虹子は驚きを隠しきれない様子だった。

「手え抜いたから、そりやそうなんだろうけど、立ち上がられると結構キツいね。私のだってそりやもう『特別製』だからさ、そんなよそこのカス能力とは違うんだけど、まあ、さすが理愛なのかな」
「はあ、はあ……はあ……」

荒く息を吐くことしかできない。けれど片手にはまだカッターナイフがしっかりと握られている。まだ戦える。武器があれば、戦える。さつきみたいにすごい勢いで近付いて、すごい勢いで攻撃すれば……なんて、すごい勢い？ それだけしかできないのか？ そのそれだけでも、今はどうすれば出来たのかも覚えていない。

それでも立ち止まるわけにはいかない。屈服してはいけない。敵の前でうつ伏せで倒れていてどうする。自分の身体を叱咤して、無理矢理に立ち上がる。もう足がおぼつかないのか古時計の振り子のように左右に揺れ動いていた。

「でも、ちょっと熱すぎるのはおもしろくないかな。むしろ寒いっつーか、そのなんだ、そろそろ終わりにする？」

再び虹子の瞳が七色に染まる。

そして最大の暴力が今まさに理愛に襲いかかろうとしている。

「ずっと、変わらないままなんて、ないんだから。だからさ、諦めなよ」

何を、どう諦めろというのだ。そんなことできるはずがない。

「理愛、キミの未来は、もうずっと前から決まっていたんだよ」

だから、自分の物語に他人が触れるなんてもってのほかだ。これからの未来までも、自分以外の何者かに線を引かれるだなんて、そんな

な未来を誰が欲するというのだ。

だから――

「わたしの未来を、勝手に決めるな！」

だから、どれだけ力量に埋められぬ差があるとしても、曲げられない信念一つで、立ち向かう。

何の考えも持たず、何の技術も見せず、理愛は突きを繰り出す。

それでも力の無いその刃では、敵の牙城は崩せない。見えない壁に遮られるように、コマ送りのようにスローで再生されるように、小さく碎け散る理愛の武器をただ啞然と見つめることしかできなくて、そして、破壊し尽くされると同時に理愛もまたその場でペタンと座り込むことしかできなかった。

「決まるさ、アナタの未来は私が決めた。だからもう理愛、おしまいなんだよ。一つ勘違いしてるかもしれないから言っとくね」

小さな虹子の身体が理愛の前では巨大に見えた。あまりに圧倒的なその力が理愛の信念を崩壊させていく。

これが能力者としての能力を使用した姿だとするのなら、自分とはとてもなく矮小であるということをお願い知らされた。

「理愛の力が目覚めるまでの余興だよ、だから私はここにいるんだよ」

「アナタは、何者なの？」

「Ark」

「……え？」

聞き覚えの無い単語。

理愛は首を傾げる。

虹子はまた不敵に笑い、口元は三日月を描く。

何も知らぬ、解らぬ、そのまま、一体誰に勝つというのだろう。立ち向かうことで変化から逃れようとした。けれどそれは叶わなかった。

だからこの日、時任理愛は初めての敗北を喫することとなった。

1―8 希望だけは、忘れたくないから

1―8 希望だけは、忘れたくないから

月下虹子に完膚なくまでに敗北した理愛ではあったがどうやら命だけは奪われずに済んだようで、こうして今日も学校へ行くことができる。

どうして生かされたのか？

こうして五体満足でいられたのか？

何の気紛れで虹子は理愛に止めを刺さずに消えたのか。

それは虹子にしかわからない。どれだけ考えたところで答えに行き着くことなどできないのだから、考えることはすぐに止めた。

正直、学校へ行くような気分ではないし、当分行きたくないという気持ちが強くなる一方だったが、ここで逃げてしまえば負けたような気がしてどうしてもその選択を選ぶことだけはできなかった。

逃げれば、虹子の全てを肯定してしまうような気がしたから、だからそれは嫌だ。

なんて昨日、人間を少し止めてしまったわけだが、その代償として右手に裂傷を負ってしまった。絆創膏一つでは足りなくなるほどの傷が理愛の手を穢していた。持っていたカッターナイフが何かの力でいきなり木っ端微塵になり、その破片で怪我をしたのだが、あの時はとにかく死に物狂いだったせいも感覚も鈍くなってしまうていたのだろう。痛みを全く感じなかった。

それでもさすがにそのままにしておくわけにもいかないので、こうして右手に包帯を巻いているわけなのだが、これではまるで兄の真似をしているようだ。別にそんなつもりはないのに、それなのに雪哉はさっきから横目でチラチラと理愛の右手に視線を送っている。何か言いたげだったが、それを言わせてはいけない。きつと少しでもこの右手のことを話題に上げれば、雪哉はきつとわけのわからない

い謎電波を発信し続ける有害電波塔に変貌するだろう。

だから、理愛は自分からこの右手とは別のことを話せば大丈夫だろうと思っただけなのだが、

「兄さん、その頬にへばりついてる大きなガーゼはなんですか？」

「これは闇黒竜グレイヌエルダに受けた傷だ」

と、ごらんの有様である。

理愛はもう何千回何万回と過言ではないほどに雪哉のこんな台詞を今日まで聞き続けてきた。それがもうこの兄のいつもの口調と思うと、本当に心配になってくる。どこにそんな龍がいた。そもそもそんなのがこの町にいたら普通に歩かただけで大事件だ。

それでも、そんな架空の幻想種が世界を飛んでいると思っているこの頭の中が万年妄想の兄のことでも理愛が知っていることがあった。

「あの龍の吐息には呪詛の属性が付加しているからな、さすがの俺

でもよく耐えられたと思う。状態異常として、生命の再生力を停止させる力が宿っている。負った傷が治らないとは厄介だ。早くこの呪いと解かねば俺の身体は忽ち壊死することだろう」

「なら、学校に行く場合じゃないでしょ。さつさとその謎ドラゴンを討伐しにいつてくださいよ。でないとこの町どころか世界もピンチですし」

「ふむ、そうしたいところなのだが……残念なことに俺はまだ『
グルヌギニアス
顎喰』を手に入れていない。あれが無ければヤツの纏った呪詛が破

れない——」

「兄さん」

「なんだ？」

「何か誤魔化したい時ほど、そうやって謎言語、話すのやめませんか？」

理愛の言葉に雪哉は一蹴された。完全に思考を読まれている。

理愛は知っている。雪哉が何かを隠している時ほどにこうやって造語を並び立てることを。それを捲くし立てるように聞いてもいな

いのにしつこく言う時こそ兄の癖がよく見える。

バレている。だから雪哉もそれ以上は謎電波の送信は止め、ゴホンと一つ咳をして理愛に話しかける。

「昨日はすまなかった」

「やめてください、すまないなんていう高校生いますか普通」

ともかく堅いというかどこかズレているというか、そんな雪哉の言動に理愛は苛立ちを覚えていた。それもそうだ、昨日いざ虹子にズタボロにされた理愛はなんとか家に帰ることが出来たが、いざ家に帰ってみれば雪哉の姿は見え、そんな雪哉は自分の部屋の中から「今日は疲れたからもう寝る」なんて、まだ夜にもなっていないのにそんなことを言っただけで部屋から出てこなかった。

そして今日の朝、いつもより少し遅れて部屋から出てきた雪哉は頬に大きめのガーゼと小さな絆創膏を貼って出てきたというわけだ。理愛も右手に包帯だが、怪我の大きさは雪哉の方が大きそうだ。

もしかしたら服の下も酷いことになっているのかもしれない。それなのに雪哉は何も言わずにいつものように学校へ行こうと理愛と一緒に家を後にしたというわけだ。

まるで数日前の理愛のような立ち回りに理愛自身立腹だった。

理愛を助けに来てくれた時のあの勇敢な姿はどこへいった。今はとても小さくなってしまったように、あの時の兄はどこかへ行ってしまったようだ。

「昨日、いろいろあったな」

「そうですか、わたしもです」

兄妹のそろって敗北した昨日。

傷を手当てしたというのがはつきりわかる包帯やガーゼはまさに証明のようなものだ。だから二人は言及しない。互いに傷を負ってしまったのだが、その傷を互いに舐め合うような愚かなことはできない。何故なら、徹底的に敗戦したものの心底負けを認めたくないのだ。兄妹揃って負けず嫌い。命のやり取りが行われていても、負けを認めることだけはしたくない。

「もしかして……理愛、その包帯は右手に巻かれているな？」

「いや、そんなの見ればわかるでしょ」

「俺とは対なる方、左ではなく右……神の力とは相反するのは一つ。理愛よ、まさかとは思うが俺の力に嫉妬し、神とは真逆となる魔の力に手を出したのではあるまいな？」

「あの、ホント度々お願いしてますけど日本語で喋ってくださいませんか？」

「だから、俺の左腕とは真逆に包帯を巻いているだろう？ それは神の左腕ではない……悪魔の、右腕なんだ——」

「よくそんなこと真面目な顔で言えますね、兄さん」

ふざけるのではなく、それがいつもの兄の姿であることを理愛は知っている。

しかしいつまでたってもその言葉の意味は何一つ理解できていないまだ。いや、理解する必要などないのだからうけれども。

「あれ、あれあれあれ？ そこにいるのは出来損ないの時任くんじやないか？」

校門を抜け、校内に入った途端にそんな声が聞こえた。

雪哉と理愛が立ち止まると、玄関前には月下雨弓が立っていた。

しかし一人ではなく取り巻き連中を引き連れての登場だ。理愛は無意識の内に目先の威圧感に圧倒され、雪哉の後ろに。背の高い雪哉の後ろに隠れるだけで、理愛の姿は殆ど見えなくなる。元々、人との接触が苦行な理愛にとって異性はさらに苦手意識を強くする。

「マジで来やがった。お前、頭大丈夫か？」

「別に異常は」

いたって平常だと、雪哉は言う。

それを聞いて雨弓とその取り巻きは大声を上げて笑う。不快な声だと雪哉は思った。朝からこんな不協和音を聞かされるこちらの身にもなっただけ欲しい。

「な？ こいつおかしいだろ。昨日、あんなことがあったのに平気な顔してやがる。オレなら自殺もんだぜ」

雨弓は自分の携帯電話を取り出し、それを開くとディスプレイが光る。そこには雪哉が土下座した姿が映し出されている。昨日、何度もフラッシュがたかっていたのは知っている。やはり写真を撮られていたようだ。そんなことはわかっている。どうせそうやって晒し者にして嘲笑することも知っているそれがどうした。雪哉にはどうでもいいことだった。

「兄さん……」

理愛にもそんな不細工な体勢をする雪哉の写真を見て、悲哀の目を浮かべていた。

「理愛、こんな俺を軽蔑するか？」

それだけは雪哉にとっての不安だった。

だが、理愛は力強く首を横に振り、それを否定する。それだけは本当に救いだった。では、もうこの刹那的な苦悩は瞬滅したわけだ。まさしく、どうでもいいことになった。

「ここまで来て、遅刻したくないんで」

だから、雪哉はそのまま理愛の手を取り雨弓の集団を横切ろうとした。

折角、校門まで抜けたというのにこんなところでこんなつまらない連中に付き合って遅刻するだなんて愚かすぎる。何を言われようが、何を思われようが雪哉にとって瑣末なことにすぎない。

「ったく、つまんねえヤツだな……お前は頭パニくってて妹は気持ち悪い髪してるしな、変態兄妹め」

「……ちっ」

雪哉の頭の中で何かが切れたような音がした。

玄関に入ることを止め、理愛の手を離し、振り向いて猪突の如き勢いで取り巻きの合間を潜り抜け雨弓に接近した。そして逡巡することなく暴力に走った。しかしそれは右拳によるただの正拳突きだった。なんの力も無い、ただの拳は雨弓の手の平に包まれていた。

「まあ、そう怒るなよシスコンちゃんよお」

「撤回しろ、でないと殺す」

「うつせ、お前を殺すぞマゾ野郎」

どれだけ力を籠めても、雪哉の拳は雨弓に握られたまま。

周囲の空気が一気に下がる。嫌な予感がする。この感じ昨日と同じ。それでも雪哉は逃げようとしなない。この拳を顔面に叩き込むまでは、妹を侮辱した罪を償わせる為にも。能力を使いたければ使えばいい。むしろ使ってしまえ。

「お前、有能力者に勝てると思ってんの？」

「思っていない。なんなんだ？ 能力を使うか？ 使えばいい。それでお前は社会の屑の仲間入りだ。とくに法律も改正してるだろう？ 能力者は、能力を使って一般人を傷つけてはいけない、知ってるだろう？」

能力を使用した犯罪や暴力行為はとても重い罪だと、前に言った。雪哉にとって最大の防御とは、自分が能力を使えないことを利用することだ。

有能力者による能力行使での無能力者への攻撃は重罪だ。立派な犯罪で確実に法で裁かれる。

昨日も散々能力で痛めつけられたのだろうが何分それを証明する手立てがない。だから黙殺を決め込んでいたが、今は違う。今は立派な程に人が集まっている。しかも学校だ。能力で危害を加えればその時点で雪哉の勝利だ。

そんな雪哉はただ殴っただけだ。それでも十分過激な行為だ。だが、能力者ほどじゃない。

どうなったっていい、ただ今だけは理愛を卑下したこいつが許せなかった。勝てないことは重々理解しているつもりだ。そもそも、もし戦うとしてもそんなわかりきった戦力差の前で何ができるというのだ。戦闘が開始されて、ものの数秒でケリが着く。そんな世界だ。それでも、能力が無いから、戦うことができないから、それで自分の世界を、理想を穢されるのに耐えろというのか？ そんな地獄、雪哉はいらない。この世界はとくに獄中だ。ならこの檻の中で出来ることは何か？ 逃げぬ、ことだ。

ここで逃げたら、諦めたら、それこそ能力を持つ者の世界が大きなものに構築されていくだけだ。いつかもう無能力者は人間としての威厳そのものも奪われてしまいそうな気がして、同じ人間だろうに、たかだか空が飛べて火を噴けばそれで満足な人類がそもその気狂いだ。雪哉にとつて本当にこの世界はおかしいものでしかないのだ。だからこそ妹がいてくれるだけでいい。二人でただ生きていければ、それを邪魔立てする輩を前に黙止を続けることなんて出来やしない。報復しろ、反撃しろ。そうでなければ、兄妹の世界は明らかに変化する。それを止める為に、雪哉は戦うのだ。だから――

「お前はいつか裁かれる、いつかきつと、足掻く俺たちに負かされる」

「はいはい、気色悪い病氣患ってるヤツはとつと去ねや」

だからこの宣戦布告は、覚悟だ。

希望だけは、忘れたくないから。

それを願うことさえも失えば、きつと終わってしまうから。

まだ諦めるわけにはいかない。好機はきつとある。だからそう信じて――

「はいはい、やめやめー喧嘩はやめてー」

そんな決意と意思だけを武器に、強大な敵に立ち向かおうとした雪哉を制止するように割り込む男が一人。

白装束、無精髭、眼鏡、なんともまあ、胡散臭いという言葉がよく似合う男が現れる。一触即発、むしろもう爆発していたはずのそんな空気が消散し、雪哉と雨弓はその男を睨み付けることしか出来なくなかった。

「おーこわっ、視線で人が殺せるならあなんて言葉聞いたことあるけどさ、それと今、同じかもお。でもでもお、死因が視線なんて、親不孝すぎ！」

どれだけ怪しい風貌であつたとしても、雪哉も雨弓も手は出せない。だってこの男は雪哉たちが通う学校の教員の一人なのだから。

「そこを、どけてくださいたきのようじ瀧乃曜嗣先生」

「雪哉くん、人をフルネームで呼ばないでくれないかな。先生、かね、とおおつても怒っているわけだ」

そこで気色の悪い声を上げて、一回転。そのまま一指し。

「はい、雪哉くん指導おー。今から図書館清掃してきなさい」

「なんで……俺は……」

「行けよ」

それまで腑抜けたような声を上げていたくせに、いきなり声のトーンが変わり、眼鏡の奥底に見える眼光。雪哉は無意識の内に図書館の方へ向かう。理愛は玄関の前で立ち尽くしたままだったが、理愛には何の罪もない。雪哉は理愛に何も言わずにそのまま玄関とは逆を歩く。

そしてその場から消えた時任兄妹をジッと見つめる雨弓は獲物を逃げられたことへの苛立ちを曜嗣に向けた。それでも曜嗣はヘラヘラと笑ったまま他人の神経を逆撫するような口調で、

「月下くん、お願いだからこんな人気のある場所で堂々と力見せ付けないでくださいねえ。すごいパワーを持ってるんだからあんまり見せ付けられても怖がるだけですぜえ」

「……わかってるよ」

「それに、あまり表立って動くと、やり難いでしょ？」

「何が言いたい」

曜嗣の言葉に雨弓は反応し、つい言葉を返してしまった。

「なああんにもつ、なああんにもつ、ないですよ？ ないですともお。ああ、雪哉くんがちゃんとお掃除してるか見に行かないと」

曜嗣はグルグルと腕を回しながら玄関から消えた。

こうして騒動は収まり、誰もがいつものように登校する学校の姿に戻るのだった。

曜嗣は図書館へ向かう。眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、
「おもしろくない。なあんにも、おもしろくない。雪哉くん、さつさと行動しないと、手遅れになるよお？」

その言葉が何を意味しているのか。それは曜嗣にしかわからない

ことだった。

1―9 嗤う白衣

1―9 嗤う白衣

不満を抱きつつも雪哉は図書館の整理整頓、及び清掃に励んでいた。

今更こんな古い建物。本などという紙媒体は今や過去のモノだ。全てデータ化され、書籍も全て今や機械を用いて閲覧することが可能となっている。今や片手で持ち運ぶ情報端末でいくらでも落とすことができる。図書館はとっくの昔にその役目を終えてしまった。今ではまるでお化け屋敷だ。埃を被り、陰気な人の近付かぬ場所になつてしまった。雪哉もまた学校へ入学してから一度も足を踏み込んだことがなかった。

一冊一冊、本を取り出し、正しい順番に並べていく。読まれることのなくなった書物らの埃を取り落とし、再び直す。それでもこの町でも一番大きかった図書館だったこの場所を一人で全てどうにかできるとは思えない。一日では明らかに無理だった。最初の一時間ほどは真面目に取り組んでいた雪哉も気がつけば机の埃を綺麗にし、そこに座りこんで携帯電話のディスプレイを眺めていた。

「こんなの一人で出来るわけがないだろう」

本の量や、部屋の広さから一人で綺麗に出来るわけがない雪哉は椅子に座り込んで恨み言を呟いた。しかし自分のした行為の大きさを考えればこれで済んだのなら安いものなのかもしれない。自分から暴力を振るつたことに変わりない。自分のした行為に後悔はないけれども。

「はあ……」

どれだけ嘆息を撒き散らしても、状況が一変するわけがない。

さっさと掃除を始めることにした。ここで腐つていても何も始まらないのだから。

「雪哉くん、なにやってるんですかあ？　こんな一人でやって終わるわけじゃないですかあ。そんなのはやめてさ、一緒にお喋りしませんかい？」

「――！」

いつ、そこにいた？

椅子から立つと、それはそこにいた。

「先生、まるで次元跳躍したみたいに現れるのはやめてくれないか？」

「そんなおもしろいことしてないですよ、オラチンはちゃんと入口から、階段を上がって、雪哉くんの前に座っただけだよあ？」

そんなわけがあるか。

老朽化した玄関の入口は錆付いて金属が擦れるような厭な音がするはずだ。そんな音もせずによって来た。しかも自分の前に立っているのなら視界に入って当然のはずなのに、瞬きした後に現象のように唐突に出現した。それが普通なら、相当この世界はファンタジーだ。

そんな普通ではない現れ方をした男は、たきのようじ瀧乃曜嗣だった。

カードのような束を何度もシャッフルし、かき混ぜた後に古びた机の上に並べている。雪哉はそれを黙って見ていることしか出来なかった。曜嗣はタロットカードを机の上に並べ、一枚だけその中の伏せられたカードを捲る。そこには足を縛られ逆さに吊るされた男が記された絵柄のカードが雪哉の目に映った。

「雪哉くんは今の試練の時なのですよ、耐えなさい。ずっと耐えなさい。いつか良い方向に変わるためにも」

「はあ……」

雪哉はタロットカードの絵柄が複数あることは知っているが、一枚一枚に込められた意味まではさすがに知らない。試練だの耐えろだの言われてもピンと来ない。相手にするのも面倒なので雪哉は瀧乃を放置して本棚に向かう。

「いいんですか？　もう一時間目始まってますけど」

「なにそれ皮肉う？ オラチンただの校務員。先生って呼ばれてるけど授業とかしないから、そこんと勘違いしないでよね」

皮肉だ。雪哉は心の中で吐き捨てるように言った。

瀧乃曜嗣。雪哉の通う学校の校務員を務めている。先生と呼ばれる所以は単純に白衣を常を羽織っているだけの理由で、生徒らが勝手につけたあだ名でしかない。それでも担当教師が突然休んだ場合の穴埋めとして曜嗣が教壇に立つことがある。しかも全科目可能。どの授業でも教えることが出来る辺りは博学多才であるといえよう。しかしそんな博識な曜嗣に雪哉が頭が上がらない理由があった。「今年であいつが死んで六年目かあ、お空の向こうでもいろいろ難しいこと言ってるさうだ」

「……そうですかね」

雪哉の父と曜嗣は古い友人だったさうだ。

あの六年前の事故で両親を失った時任兄妹を引き取ってくれたのは、この胡散臭い白衣の男だったのである。とはいっても放任され、それ以上のことはしてくれなかった。それでも雪哉は恩人である曜嗣にいつか恩を返そうと思っている。この人がいなければ、今頃どうなっていたかなんて考えるだけでもおぞましい。そんなこともあってか感謝するだけでは返しきれない借りを作った雪哉は曜嗣の前ではいつもそのような調子で話をすることもできないというわけだ。

「随分、変わっちゃったね」

「はい？」

「雪哉ちゃんと理愛ちゃん、理愛ちゃんは不思議結晶が見つかったって色々あったんじゃない？」

「それは――」

無いと、言い切れなかった。

理愛の身体の中に種晶があると知ったその日から、まだ一ヶ月も経っていないはずなのに、これまで変わらずに一定を保っていた日常が、いとも簡単に崩れてしまったから。本当に、一瞬の出来事のように、たった一つ違いがあるだけで現実が離れてしまう。

「まあ、それはそうと理愛ちゃん盗み聞きは感心しないぞー。つてか授業サボってこんなとこに来るのはもーっと感心しませんあ」

「きゃー！」

図書館を支える柱の一つに向かって曜嗣が声を上げた。

するとそんな柱の向こうから小さな影が見え、理愛が転がり込んできた。雪哉は顔に手を当てて、肩を落とした。何をやっているんだ。曜嗣の言った通り、今は授業中だ。学生としての仕事である学業を疎かにして、図書館に潜入している妹を見て雪哉は呆れてしまった。

「理愛……」

「ご、ごめんなさい、兄さん……心配だったもので――」

「それは嬉しいが授業はどうした？」

「そ、その、えーっと、お、おなかが痛くなっただって……」

どう見ても頭を押さえている。それだと腹痛ではなく頭痛だ。寧ろそんなジェスチャーをしている理愛を見て、雪哉の頭が痛くなった。

「もう、ダメだなあ理愛ちゃん。お兄ちゃんのことになったらイケないことも平然としちゃうんだね」

「ご、ごめんなさい瀧乃さん、でも兄さんわたしのせいで……こんなことになったから」

「気にするな理愛、俺はあいつの言葉が許せないからそうしただけで何も後悔はしてない。だから授業を受けて来い」

「え、えーっと……イヤ、です」

言葉こそ弱々しいが、はつきりとそれは拒否された。

曜嗣はいつものようにいやらしい笑みを浮かべて椅子を引く。そこに座れという意味だろう。理愛はそのままその椅子に座る。雪哉も本棚の整理と清掃は止めて、席に着く。

「このダメダメ兄妹。仕方ない、理愛ちゃんは後でオラチンが誤魔化しとくか。まっ、いっかな。これの方が話しがしやすいだろうし」

そうして曜嗣は一人納得し、ポケットから小さな封筒を一つ取り出す。

そのまま投げ捨てるようにして、机の上に滑らせた。それを無言のまま指差し、理愛と雪哉はその封筒まじまじと見つめる。開けるということなのだろうか。雪哉はその封筒を手に取り、ゆっくりと封を切る。

「なんだこれは？」

封筒の中には『Ark^{アーク}』と記されており、そこに理愛の種晶を研究したいという文章を長々と小難しい言い回しで書かれている内容の手紙が入っていた。

「保護者はオラチンだしね、オラチン宛てで来たんだあ。なんでも理愛ちゃんの種晶とやらは他とは違うらしいんだよね。それを『Ark』が直々に研究の為に招待してくれたってわけだ」

Ark——六年前のあの日、結晶が降り注いだ夜、人が異能という新たな才能に目覚めるという世界が構築された日、突然、その名前を翳し現れた。種晶を研究し、様々な能力を発掘し、種晶というものをたった六年で世界の一部に組み込んだ巨大な組織である。そんな常識を遥かに超越した叡智を人間の科学で調査できたのは奇跡だが、この組織はそれをやつてのけた。

もはやこの世界のブランドの一つといつてもいいだろう。種晶に関してはシェア100%。種晶を検査する為の装置もこの『Ark』が開発したものだ。犯罪に手を染める有能力者たちを捕らえる為の戦闘に特化した軍隊のような集団も『Ark』内部には存在する。能力による暴力が世界を跋扈しない理由は『Ark』の活動の賜物だそうだ。確かに、能力を行使すれば過去の警察や自衛隊など無力だろう。

そんな有能力者が能力を使い、世界を支えることのできる万能の力を開発する為に日夜動きを見せているのだが、組織自体は公にされておらず、どういった研究をしているのかは一般の人間が知ることはない。

そんな謎の組織が、理愛の種晶に注目している。当然、研究に協力すればそれ相応の報酬が用意されているそうなのだが、そこまで雪哉は読んでいなかった。ただ理愛を自分らの研究の為に利用しようとするその考えが気に入らなかった。

「ふざけてるのか？ 理愛はなんだ？ こいつからすれば理愛はモルモットだと言っているようなものだろう？」

雪哉の口調が荒々しいものに変わっていた。今にも便箋を引き裂いてしまいそうな剣幕だった。それでも曜嗣はふざけたような顔をして、

「でも、選ぶのは理愛ちゃんだ。ってことで理愛ちゃん、どうする？」

「嫌に決まってるでしょ」
即答だった。

全くの他人に身体を調べられるなんてどうかしてる。きっぱりと拒否した理愛を見て曜嗣は笑う。

そしてその封筒を丸ごと掻っ攫って、ぐちゃぐちゃに丸めてゴミ箱に捨てる。

「この話はおしまい」
そして指差し、

「行きなよ」

「いや、何言ってるんですか……まだ授業終わってな——」

雪哉はどうでもいいが、理愛はまだ授業がある。だが曜嗣は首を横に振る。

「理愛ちゃんも授業サボってこんなとこ来たから同罪。帰って大人しくしててね」

理愛は反論せずに素直に頷いた。

「同罪って……」

「雪哉くん、罪に大きいも小さいもないのだあ。悪いことをした人は平等に裁く。それがオラチンのポリシー、おっけえですか？」

雪哉も何も言わなくなった。

曜嗣には何を言っても無駄なのだ。この男は自分の世界を中心に事を進めるから、雪哉がどれだけ奔走したところで何も変えられないのだ。

「でも、俺は図書館の掃除をしろつて——」

「意味ないよ。ないない。なああんにも、ないよ。ないんちい。ちよつとしたオラチンからの罰だねこりゃ」

久々だろう、あんぐりとしたまま目も口も開けっぴろげて馬鹿っぽい表情をしたのは。だがそうなるのも無理はない。罰として掃除をしると言われたから言われた通りしてみれば、一時間も経たない内に終了した。

「さっきも言つたでしょ？ 一人でこんなの終わるわけないっしょあ？」

「そりゃそうかもしれないが……」

「はい、じゃあさつさと早退。雪哉くんは暴力沙汰起こしたことは変わらないから一週間ほど謹慎の方向で」

「謀ったな」

図書館の掃除なんて、最初からさせる気がなかったのだ。

それでも、理愛に宛てられた手紙を見せる為の口実だと良い方に考えたから、まだそれほど怒りが沸かなかつたのかもしれない。

「その通り！ 今更気づいても遅すぎ、遅すぎすぎ！ 残念でしたあまた来週う！」

「……酷い人だ、仕方ない理愛……帰るぞ」

「え、ええ……すぐ帰ることになるとは思いませんでしたけど」

「仕方がない、俺もお前も規則を破つたのだ。罪は償わねばな」

「そう、ですね」

登校して一時間で下校だなんてふざけてる。

しかし、悪いことをしたことに変わりはない。

雪哉はこれ以上文句を言うことはなく、曜嗣に挨拶し帰ろうとした。

「雪哉くん、ごめん。さっきのタロットカードの占いなんだけどさ」

「はい？」

出て行こうとした時、いきなり呼び止められてつい気の抜けた返事を曜嗣にしてみました。すると曜嗣はカードを見せながら、

「逆位置だわ、ごめんねえ」

吊るされていた男の絵柄を逆に持てば、まるで重力に逆らっているように宙に浮いているように見えた。だが正位置であるうが逆位置であろうがどのような違いがあるのかわかっていない雪哉にとつては曜嗣に謝られたとしてもどう反応していいのか困るだけだ。

「あの、帰っていいですか？」

「ああ、そうだね。帰れって言って呼び止めるのも悪いよね、オラチン失態い！　じゃあね、ばいばーい、一生ばいばーい」

「……そうなたらどれだけ楽か」

と、出ると同時に雪哉は憎まれ口を叩き、図書館を出た。

雪哉らが図書館を後にすると、図書館全体に静寂が漂い、曜嗣は一人になる。そして錆付いたパイプ椅子にどつしりと腰掛けて机に足を乗せて座る。胸ポケットから煙草を取り出したが中身は空だった。残念そうに溜息を吐き、その空箱を握り潰し胸ポケットに戻す。眼鏡の位置を正し、天井を見上げた。

「全く、家族揃って戦いたがるかね……『時任^{ときとう}』の姓が付くヤツは本当に救いようがない」

椅子にもたれ天井を見つめる曜嗣は呆れているように見えた。だが、その口元は歪み、悦に浸るように妖しく微笑んでいた。

「まっ、見守りますか。どうなるかね、無能力者が全能結晶にどう立ち向かうか、おもしろいじゃない。これ異能バトルモンだと熱いとこだろうし、もうすぐなんだろうなあ。もうすぐ始まるんだろうなあ」

そして、曜嗣は誰もいない図書館で一人子供のようにはしゃいでいた。

「なあ、時任。お前の息子なら、お前の願いを叶えるかもな？」

誰もいないはずの空間の中で一人、曜嗣は呟く。

もちろん返事が返ってくることはなかった。

1 - 10 全能結晶の無能力者（1）

1 - 10 全能結晶の無能力者（1）

「本当に瀧乃さんは酷い人です」

午前の通学路、制服を着た生徒が歩いているわけがなく、たった二人。そんな道を時任兄妹が歩いている。

雪哉の横で理愛は不満げに曜嗣を非難していた。だが曜嗣のしたことは当然のことであると雪哉は自分の良心を咎め、曜嗣の言う通りに家に帰るのだけだった。

「先生は俺らのことと思ってしてくれたんだ。それ以上、誹るのはやめろ」

「先生、先生つて、家にも殆ど帰って来ないあの放任さんのことを先生つて言うことをやめてください兄さん」

雪哉は曜嗣のことを先生と呼んでいる。

これは引き取られてからずっと曜嗣が雪哉にそう呼べと強要していたせいか、もう癖のようになっていた。だから雪哉は学校以外でも曜嗣のことを先生と呼んでしまう。治したいのだが、六年もそう呼ばれ続けたのだ。今更、この癖を治療することは不可能に近いだろう。

「先生は俺たちの恩人だろう？ そんな言い方はないだろう」

「それは、そうですけど……」

雪哉の説得に理愛は不満はあるが、一応は納得してくれた。

確かに曜嗣は両親を喪ったあの日から保護者として二人を迎えてくれたが、何かしてくれたといえはそれだけだ。兄妹を常に放任しただだ生活の支援をしてくれただけに過ぎない。でもそれが普通だろう。全くの赤の他人であつた曜嗣と邂逅を果たすなんて、両親が生きていればきつとなかったはずだ。

だからこそそんな雪哉や理愛にとつては何の接点もなかった曜嗣

が嫌な顔一つせず、二人を引き取ってくれたことだけは本当に感謝しているのだ。

「なんで来たんだ」

それはともかく雪哉には問い質さなくてはいけないことがある。立ち止まり雪哉は静かなに怒りの火を灯し、理愛を見詰めた。

「お陰でお前まで俺と同じになっちゃった」

「そんなの、兄さんがわたしのためにしてくれたことで兄さんだけ裁かれるわけにはいかないでしょう」

確かに雪哉の暴力行為は理愛のために行ったことだが、それで理愛まで同じように一週間の自宅謹慎になっちゃっては意味がない。しかし事実こうなっちゃった。

雪哉も考えが甘かった。たとえ肉親であつても他人は他人。自分以外の心の中など見えるはずもなく、読めるわけもなく、それでも雪哉は理愛のことがわかる。自分と同じように動くのだ。まるで合わせ鏡の対なる方。自分が動けば、理愛も動く。そんなことずっと前からわかっていたのに。

「はあ、入学して早々に裁かれてどうする。周りも気になるだろう？」

「なるなら勝手にしてればいいです。わたしには関係ないですし」
そして周囲の目を気にせず、独りで行動しようとするのも相変わらず。

どうにかして少しでも周りに溶け込めるようにして欲しいのだが、どうしてもそれだけは叶わないようだ。どうすればいいのかもわからず、改善策も見つからないままここまで来てしまったのは兄の責任だろうか。

「そんなことより、なんなんですかあの男……わたしならいざ知らず、兄さんのことまで……なんて、下品な男——」

理愛の目が鋭く、その瞳には憎悪にも近い黒い感情が籠められていた。

そんな顔はしないで欲しいと雪哉は思ったが、それを口にするこ

とはできなかった。何故なら雪哉もまた同じような顔で月下雨弓を睨んでいたのだから。

「能力者って、そんなに偉いんですか？」

「世界がそうさせたんだ、仕方がないことだろう」

そう――

仕方がないことだ。

それは誰が決めた理か。もし神がそうしたのなら、横っ面を全身全霊を籠めて殴ってやりたい程だ。そんな世界になったせいで、誰もが異常を受け入れている。それでもこの世界では能力を持つ者とが特別で、偉い。

そんな世界を雪哉は受け入れていない。

能力が無いことを悲しんでいるわけではない。ただ、どうしてそんな差別的な世界が生まれたのかを考察し続ける内に、いつしかこの世界自体が間違っているのだと思ってしまったからだ。

「何がおかしいのかわかりません。能力が有っても無くても、いいじゃないですか」

そしてそんな雪哉の横で理愛は不満を並べ、世界を蔑んでいた。

何も無い兄を侮辱する世界に対して怒りを抱いてくれるのは兄としてはありがたい。

でも、雪哉だけが能力を持たない低脳なのかといえばそうじゃない。

「理愛、この世界は二つに分けられているのは知ってるな？」

「え、ええ……有能と無能ですよ」

「そうだ。俺は無能だ。それを笑うのは有能だけだ。無能は一緒に笑えない。なぜだ？」

「……笑うことは、自分を笑うことと同じ、だから」

「さすが俺の妹だ。なら、納得できるな？」

「……………できません」

「どうして？」

「兄が笑われてるのを我慢できる妹なんていません」

刹那、時間が止まったような――

「ありがとう」

でも、すぐにその停止は再生され、雪哉はすかさず感謝した。

理愛は怒りを露わにし、そんな憤りを見せる理愛を見て雪哉は思った。

幸せだと。

自分が笑い者になっっているというのに、そんな兄が無様に妹の前で恥辱を受けているのに、それに怒りを抱き、ギョッと手を握ってくれる理愛。兄としての株価は窮極的なまでに暴落しているというのに、捨て置けばいいのに、それをしようとしなない。

だから雪哉は思った、主人公にもなることなどあり得ない分際でありながら、もし自分が主人公ならばなんて絵空事を描いた上で呟く言葉――「負けるものか」そう、小さく、強く――

それでも終わりが始まるうとしている。

それは日常が終わる道標。

いや、それはもしかしたら狼煙だったか。

歩行者用の信号が赤になり、二人は歩くことを止め、ジッと前を見つめていた。

何台もの車が通り過ぎる中、雪哉はどうしてそんなことをしたのかもわからなかった。自分がどうして理愛を突き飛ばしたのか。

雪哉の強襲に理愛は転ぶ。

しかし、理愛は無事だった。理愛は、無事だった。

「ごふっ……」

喉奥から真っ赤な血流が逆流し、地面を鮮血で染める。

雪哉の右腹から決るに不可視が貫く。

膝が地に着き、前のめりでゆっくりと倒れる。

何か、そう何かが腹部を貫通したのだけはわかった。痛みは無か

った。しかしそれと同時に雪哉の身体は容易く蹂躪され、生の権利を剥奪されたかのように、そのまま一切の行動を停止させた。

それでも残りわずかな余力を振り絞り顔を見上げた。

理愛が泣いている。

やめる、泣くな、泣かないでいい、どうして、そんな顔が見たくないから――

小さな手と制服は血で滲んでいる。

それでも、それでも雪哉はそれ以上理愛の顔を見ることはできなかった。

小さな理愛の身体の間から見えた、敵影。

「悪いな、時任。お前さ、邪魔なんだわ。だからよ、そこで死んでるや」

口元が動いていた。

遠くで小さく呟いているのはわかるが雪哉の耳に届くはずがない。そして小さな道路の向こう側、信号は赤から青へ。その影は消えていく。だが、はつきりとわかった。完全に雪哉と理愛を狙っていた。理愛は無事だった。涙を流して雪哉の身体に触れる様子を見ると大丈夫そうだ。それがわかったただけでも僥倖だ。

「月下、雨、弓い……！」

だが、それでも怨嗟は消えない。

呪詛を込めたように、振り絞りその名を呼んだ。道路の向こう側に、雨弓が消えていく後ろ姿が見える。だが理愛は気づかない。主犯が前方にいることよりも、兄が凶弾で倒れたということで頭の中が真っ白にされてしまったのだ。

声が出ない。

逃げる。俺を置いてさっさと逃げる。

けれどその言葉は届かない。

声が出ないのなら、届くわけがない。

意識が朦朧とする。死ぬ？ 死ぬのは怖い。死にたくない。雪哉は懇願する。それでもやはりそこで何かが覚醒するわけもなく、都

合よく傷が癒えるわけもなく、いつものように設定で塗り固めた自分はどこへ行った。ただ出来たことは理愛の腕を強く握るだけだった。

死ぬのは、怖い。

でも、でも、理愛を一人にしてしまうことが、もつと怖い。そんな切望する雪哉を無視し、視界は闇黒に塗り潰される。

そして雪哉の意識が途絶えたと同時に、終にこの無駄に長いだけだった序章の終極が始まるのである。

1 - 1 1 全能結晶の無能力者（2）

1 - 1 1 全能結晶の無能力者（2）

それは奇跡と呼ぶことだけは、了承するだろう。

雪哉の眠る病室に備え付けられた椅子に座り理愛はそう思った。
あれから丁度、一週間が経過したことになる。

曜嗣に言われた謹慎の期限の最終日だ。

だが、そんなことよりも肝心の雪哉が目を覚まさないのでは意味がない。

雪哉が倒れた日、何があった？

理愛は雪哉に押し倒され何をするのだと文句を言おうとしたら、
血を吐いて倒れた。

最初、吐血したものだから何事かと思ったが、腹部からも出血していた。原因はその腹部の傷であり、鋭利な何かを突き刺したような痕があったそう。それが何かはわからなかった。

凶器は見つからず、雪哉が倒れたあの時、信号の前で立ち止まっていたとき車が通り過ぎただけで、そもそも朝の十時以降、平日で人気は疎らだった。雪哉に近付いて襲い掛かった人影などどこにもなかった。

だから、そんな雪哉にいきなり致命的な一撃を与える方法はない。
しかない。

それは「能力」でしか不可能だ。
理愛は思った。あの時、いきなり自分を押したのは底づきのものだった。

そして雪哉は倒れた。

意識はあるが目を覚まさないだけだ。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。そう思うと悔しくて堪らなかった。

ふと、考えが過ぎる。

理愛の身体に「種晶^{シード}」なんていう不可思議が発見されてからだ。わけのわからない輩に襲われ、拳句には自分も壊れたように戦い出し、やがて兄が負傷し、倒れた。

もしも自分の身体の中にこんなものが見つからなかったら、こんなことにはならなかったんじゃないかなかったのかって――

そんなことを考えるだけで、胸を何かが込み上げていく。それは嘔吐感だけではなく、負の感情も一緒だった。

眠りから覚めぬ兄の前で、理愛は涙の粒が落ちる。

それだけは言っではいけないかったのに。

それだけを言わぬために戦ったはずなのに。
なのに、

「兄さん、わたし、いない方が、いいの、かなあ……」

そんな心にも無いことを言ってしまう自分が憎かった。

「わたし、こんなことなら死んだ方が、いいのかも」

そんな出来もしないことを口走ってしまう自分が憎たらしかった。これは事実を知って一番最初に思ったことだった。

兄とは違う。

異能とやらを手にする権利。

兄には無い権利。

そんなものいららないのに、押し付けられた力。
いらない。

そんなものは、いらない。

だから、わたしも、いらない。

理愛はそう思ってしまったのだ。

「だけど、その言葉は――」

「そうか、なら死ね」

「だけど、そんな自分自身を恨む理愛を叱り付けるように、雪哉は閉じたままだったはずの目蓋を開き、そう言ったのだった。」

「死にたいのなら、死ね。止めはしない」

「そんな、兄さん……」

目を覚ました雪哉を見て驚愕し、理愛の震えが更に強くなる。

「死にたいなどと、ふざけたことを」

雪哉は身体を横に向けて、窓の方を見つめる。理愛の顔を見ないようにして、

「死ぬなら勝手に死ねばいい。だが、お前が死んだら俺もすぐに死ぬぞ。どうして独りにされなければいけない。俺は嫌だぞ。孤独を選ばなら死んでもお前を追いかける」

それが、雪哉の願いだ。

孤独が雪哉の死に直結している。

あの日、全て消失した夜。雪哉の側にいたのは理愛だけだった。

だから理愛まで失えば、どうなるか。兄妹という関係を超えているのかもしれない。それでも雪哉にとっては半身に近い。

だから、理愛の消失は雪哉自身の消滅に他ならない。

「ごめんなさい、わたしどうかしてました……ははっ、ちょっと風にも当たってきますね」

目蓋に溜まる涙を拭って、作り笑顔をしたまま理愛は病室を飛び出した。雪哉はそんな小さな理愛の背中を黙って見ていることしかできなかった。それでも、自分のいった言葉に嘘偽りは無い。本当に、理愛が目の前から消えて無くなったら、きっと自分も同じように消えて無くなるはずだろうから。それだけは本当だから。

雪哉の目覚めと言葉に理愛自身の感情が滅茶苦茶に掻き回され、理愛は病室から逃亡するように飛び出した。病室の扉にもたれて、小さく溜息。たった一枚の扉の向こうに兄がいるはずなのに、こん

な扉が今は頑丈で強固な開かずの扉のように感じられて、理愛はその扉をもう一度開いて、雪哉の元へ向かうことができなかった。自分から逃げ出しておいて、卑怯者だと思うだけで余計に辛くなった。あれだけ自分から消えていなくなってしまうなんて馬鹿げたことを抜かしておきながら、雪哉の言葉を聞いて舞い上がってしまった自分が情けない。

だからこの逃亡は自分を戒める為にしたことだ。あのままいればきつと泣き出して感謝し、雪哉に抱きついていたらとさえ思う。それまでに雪哉の言葉が嬉しくて堪らなかったから。

だけど、本当に消えてしまいたいなどと、そんなことを思ってしまったことは最低である。そんな最悪を抱いた自分に対する罰なのだ。これ以上、兄の前にはいけない。

結局は、慰められたかっただけなのかもしれない。

この一週間、家には殆ど帰らずに雪哉の病室にいた。どうして血を吐き倒れたのかその原因などに微塵の興味も持たず、ただこのまま雪哉が永遠と目を覚まさぬままならどうしようだけ思っていた。もしそうならどうすれば……きつと、同じように目覚めることのないように自分を傷つけていたかもしれない。

本当に、兄妹揃って愚か。この兄妹は純粹故にどこか、壊れている。

どれだけの悲しみが待っていたとしても二人ならば、なんて思っている。

だけど、

「ここかあ？ 死に損ないが寝てる病室はよ？」

理愛の目の前に月下雨弓、そして虹子が立っていることに気がついた。

そしてそれまでの悲哀を投げ捨てて、感情を憎悪に切り替える。こんなところに何をしに来たなんて、もっとも見たくない顔を見せ

られればそう思うのも無理はない。

だがそんな怨恨を前に、厭らしく笑う雨弓が理愛の前に立つ。明らかな身長差、理愛は見上げなければその憎たらしい表情を窺うことすら叶わないだろう。雨弓は理愛を見ることなく雪哉のいる病室に入ろうとした。だが理愛は扉を守護するようにその矮躯で立ち塞がり、月下兄妹の侵入を許さない。

「どけよ、今はお前に用はねえ」

「どきません」

雨弓の敵意に動じることなく手を広げて、その場から動こうとしない。

「何しに來たんですか」

「そっちこそ……こつちからの誘い、断つたろ？」

「何のことですか？」

雨弓は封筒を取り出し、理愛に渡す。

理愛はそんな雨弓の手に触れたくもないのか、封筒の端を摘み、まるで汚物にでも触れたような酷い顔をしてその封筒を奪うように取った。

そしてその内容を見れば、それは朝に曜嗣が見せてくれた「Ark」からのものと一言一句同じ内容のものだった。

「どうして……」

「そりゃオレらがその一員だから。『査定局』^{イクザミナ}って言ってもわからんだろうけどな、オレらはお前のいつか開花する能力に期待している。だから、その手紙を送ったんだけどな」

査定局——「Ark」の中にある組織の一つであり、主に戦闘に特化した集団である。いつかいったこの世界に能力を持った人間の犯罪を取り締まっている組織と言っていていいだろう。そしてそれはただ暴力から人々を守るだけでなく、高い能力を持った、または新しい能力を手に入れる可能性のある人間を選定し、協力を要請することとしている。協力などと、人間を研究する時点でそれはきつと間違っているのだけれど。

そんな名前を出されても理愛は知らない。雪哉と同じように世界を真っ直ぐに見ていない理愛にとって「Ark」も「査定局」も気に掛けず生きてきたのだから。

「わたしはアナタたちに協力する気は、ないです。だから……とつとと帰ってください。わたしにも、兄にも近付かないでください」
そのまま手紙を雨弓に押し付け、背中を向ける。

そんな理愛を見て雨弓は鼻で笑い、虹子は黙ったままけれど薄気味悪く口元を歪める。

「理愛、そんなに兄が大事？」

理愛の背中に冷笑した虹子が問う。
くだらない。

理愛は舌を打ち、キッと虹子を睨む。

しかしそんな虹子は理愛の前に立ち、凝視していた。黄色の瞳が紫色に変わり滲み出す。多彩なその瞳はまるで虹子の感情そのものだった。気味の悪いその瞳で見つめられる度に重圧を掛けられたかのように理愛の身体は硬直する。

「邪魔だよね、ホント。そいつがいなかったら……理愛だって、すぐに「こつち」にこれたのに」

「ふざけたことを、言わないでください」

続けて挑発する虹子に畏縮していたはずに理愛の瞳に光が灯り、銀の眼差しで反撃する。

刃のような煌きを放つ瞳が虹子を呑み込む。

ああ――

理愛はわかってしまった。

もう、戦闘は開始されている。

やり方こそ違っけれど、戦いはもう始まっていたのだ。兄が、穿たれたあの日から。

「理愛、私はね、理愛にもっと知ってもらいたいんだ。自分のこと。だからさ、」

虹子は手を差し出す。

それは誘うように——そして悪魔は囁く。

「一緒に行こうよ、もつと楽しくなる。世界が輝くはず。兄^{アレ}のことは忘れなよ。再三言うね。理愛、キミはもう兄^{アレ}と同じ未来を進めない」

未来はすでに決定している。

能力を持たぬ兄と能力を持つ妹。

能力こそわからないが、それでも確実に無能な者以上のモノを理愛は手に入れている。

あとはどう考え、どう動くかでだけ更なる能力が解放される。

どうして他人が未来を決めることができるのだろう。

理愛にはどうしてもそれだけが理解できなかった。

「私は理愛に来て欲しいな。これ以上、理愛のお兄さんが傷つくな見たくないならそうした方がいい。傷つくなまだいいけどさ、でも傷だけじゃ済まなくなったら？」

少しだけ屈んで、虹子は見上げるように理愛を見つめる。理愛は声を出すことができなかった。

「兄さんが、倒れたのは……」

「おお、オレがやった。ノーコンなんだわオレ。でも、まあ、運よかったな。もし頭にでも当たってたらそれこそお釈迦だったろうに運いいなアイツ」

事実を知り、理愛はただ下唇を噛み締めることしかできなかった。赤く染まり、唇が切れてしまっ程に噛み締めることしか。敵。

この兄妹は敵だ。

それでも、

「アナタたちについて行けば——」

理愛は選択をする。

ゆっくりと頭の中で考えをまとめ、一つ一つ言葉を選んでいく。

「兄さんにはもう、手を、出しませんか？」

その言葉を聞いて、

「もちろん」

二人は声を揃えてそう言った。

「わかり、ました」

理愛は深々と頭を下げる。

「それじゃあ理愛、早速だけど場所を変えたいんだけどいいかな？」

「え、ええ……その前に、兄さんに声を掛けてからでも、いいですか？」

そんな理愛の切実な願いを前に、虹子と雨弓は顔を見合わせて、

「いいよ、お別れしてきなよ」

虹子がそう言った。

「おい、オレら先に行くからよ……番号教えろや」

雨弓が携帯電話を開き、そこに電話番号が表示される。

他人に番号を教えるのは気が引けたが、理愛は渋々自分の番号を表示して雨弓に教えた。雨弓もまた自分の携帯電話の画面に表示された電話番号を理愛に見せてくる。それをさっさと登録して、ポケットに直した。

今はそんなことより兄の元へ戻りたい。

雨弓が理愛の番号を登録したことがわかった、理愛は再び頭を下げ、すぐに兄のいる病室に戻る。

後ろから二人の声が聞こえたが無視した。あれほどもう兄の病室に戻ることは出来ないなんて言っておきながら、もう兄の元へ戻るなんて腑抜けもいいところだ。

やっぱり、雪哉がいないと駄目だ。

理愛はそう思った。そう思ったからこそ、理愛は決意していた。

「兄さん、わたし帰りますね」

「そうか、気をつけてな」

突然帰るといふ妹を前にそこは少しでも寂しそうな仕草なりなんなり見せて欲しかったが、雪哉にそんなことを求めるのは酷なことだろうと理愛は納得し、病室を出ようとする。長くいればそれだけで迷うから。きつと助けを求めてしまいそうだから。今から単身で敵地に赴くなんてとてもじゃないが言えなかった。

「じゃ、じゃあね兄さん」

「理愛」

その場から逃げようとした理愛に雪哉は声をかける。

立ち止まるな、早く立ち去れ。それが出来ない。

「さつき病室の前で誰と話してた？」

「だ、誰と？ わたしが？ わたし、風に当たってくるって言いましたよね？ ははっ、兄さんおもしろいと言いますね。わたしは外にいましたよ」

嘘を吐いた。

「そうか？ …… そうなのか？ 扉越しの影は理愛に似ていたのだが」

「それならドツペルさんか何かですね、はははっ」

言葉だけでなく表情まで嘘で塗り固め、自分を偽り続ける。自分に嘘を吐くことはとてもいい気分ではない。心に棘が刺さるような、ただ胸が痛い。大切な兄に嘘を吐く自分を前に、ただ今はとても辛い気持ちでいっぱいだった。

「ドツペル？ ああ、ドツペルゲンガー（自己像幻視体）のことか

…… ふふっ、理愛よ。お前もまさかそういうことを言うとはな」

雪哉がそうやって笑う度に理愛は自分の中に必死に押し留めている気持ちを止めることができなかった。

「わ、わたしだって兄さんの横で変なことばっか言われてたから伝染^{うつ}っちゃったんですよ、バカ…… わたしもう行きますね！」

「そうだな、そうだったな…… すまない」

「だから高校生の謝る言葉がすまないってなんですか、ふざけてるんですか……」

最後はやけに自分でも言葉に力が無かった。

いつもの朝のような会話。そんな会話をしながら学校へ。

いつものように夜は一緒に。でも、もうそれもできないなんて。

辛い。

「ははっ」

理愛は笑った。それはとても自虐的な笑みだった。

自分を隠し、殺し、やるべき事を見つければそれはとても過酷だった。

理愛は自分の親指の爪を噛んだ。

塞き止めた感情が溢れる前に雪哉を見ることがなく飛び出す。

「兄さん……さよなら……」

きつと聞こえていないだろう。本当に自分の口から出たのかと疑う程に小さな、小さな声でそう言ったから。そして、理愛は自宅を目指す。場所が変わる。なら、その場所で、全て――

だから、これで最期だ。

全て終わらせる為の。

漆黒が世界に宵を落とす。

一人、街路樹を歩く理愛の瞳には銀ではない鈍い色で溢れていた。光が消え、糸の切れた人形のように揺れる。

自宅に到着し、携帯電話を取り出す。そこには雨弓の電話番号が記されている。名前を記入せずに登録したので、未登録リストに登録されているが二度と使うことはないのだ。だから修正する必要はない。

集合場所を聞き、「はい」とだけ返し、通話は終了する。受話器のボタンを押した途端、まるで電源を入れたように理愛の瞳に光が灯る。この間、本当に感情の無い機械のように動いていた。そして全てを変える為に、覚悟してやっと理愛は人間味を帯び、目的の為に行動する。

（クロス）

理愛は自分の部屋の鏡を見つめたまま、そんなおぞましい一言を心の内で念じる。

もう兄の前で散々、自分を偽ったのだ。自分自身の全て、心までも偽って、全て台無しにする為に理愛は笑う。

（クロス、クロスクロスクロスクロス）

外に飛び出す。

獵人の如く、ただ獲物を見つける為だけに生きるように、それ以外を全て忘れて。

もうそこにはいつものように可憐で華奢な妹の姿は無く、ただの復讐者に成り下がった別物が歩いていた。

（兄さん、あいつらクロスね。さっさとクロスよ。兄さんに酷いこととしたアイツらクロスから。そしたらまた前みたいに、いつものように、一緒に、一緒にいられるね。だから、クロスよ。コロシテヤル）

理愛が最初から敵に身を捧げることなど毛頭無かった。

いや、それでもここまで歪んだ感情を抱くことは無かったはずだ。それがここまで理愛の感情を捻じ曲げたのは、月下兄妹が雪哉を傷つけたという事実を知ってしまったからだろう。

許せない。

許すわけにはいかない。

世界が変わり出した中でこれ程まで理愛を憤怒させたことは無い。そんな怒りを鎮めるには、殺すしかないのだ。そんな結論に行き着いてしまう時点で充分理愛はおかしくなっている。

力が、理愛を変えたとするならばきつとそうなのだろう。

そうでなければこんなことするはずがない。異能とやらを手にするかもしれないなんて、そんな権利を得た時から理愛は変わってしまったのだ。

変わらないことなんてない、なんて……それこそがあり得ないのだろう。

だから、理愛は敵を抹殺する。罪悪なんてものはそこにはなかった。
そして――

1 - 1 2 全能結晶の無能力者（3）

1 - 1 2 全能結晶の無能力者（3）

到着した。

敵が待つ場所に、辿り着いた。

理愛と雪哉が通う学校の裏山。

どうしてこんなところに、なんてことは思わなかった。滾る。感情が強く、湧き上がる。

終わりの刻だ。^{とき}

樹木が密集し、よく目を凝らさなければ月下兄妹を見つけることはできない。二人は樹木の間に立ち、理愛を待っていた。

「待ってたよ、理愛」

虹子がゆつくりと理愛の元に近づいてくる。

その後ろには雨弓の姿が見える。まだだ、まだ動くな。殺意を隠し、平静を装い理愛は二人が攻撃が有効な範囲に近づくまで静止を決め込む。

「突然、電話して来たのは驚いたよ。まさかいきなり能力について調べて欲しいなんて、本当に協力してくれるんだね」

理愛は頷く。

それは嘘。月下兄妹を誘き寄せる為の嘘。

研究とやらがどのようなに行うものかわからないが、とにかく協力するがその場合は月下兄妹でなければ協力しないと付け足した。確実に月下兄妹を誘う為に。

ここまでは計画通り、ここからが本番だ――

「さて、理愛」

まだ遠い。

理愛は目を細め、眉を深めた。

虹子は中々理愛の射程圏内に入ってこない。焦らされているようだ……だがこちらから動いてはいけない。相手は完全な能力者だ。少しでもおかしい行為を見せてしまえば、兄のように倒れるだけだ。そんな焦燥を必死に包み隠す理愛を前に、虹子は今から始まる遊戯を待ち望んでいた子供のように楽しそうに笑みを浮かべ、腹部に手を当てて理愛を見つめた。

「研究を、始めようか。理愛の異能は世界にとつてどう左右するかを調べよう」

射程圏内に、入った。

「――！」

同時、

「ほら、始まったよ。どうする？　どうやって切り抜ける？」

理愛の描いた攻撃有効範囲圏内に入り込んだ途端、影だけが放置され、理愛の鼻に触れる程に近く虹子の顔が見えた。

銀光。

横一直線に薙いだそれが、理愛に襲い掛かる。そんな急襲はなんとか屈み込むことで回避することができた。しかし、それと同時に理愛の視界には雨弓の全身が映り込んだ。

危険。

動け、跳べ、離れろ。

ともかく脳が行動しろと駆り立てた。すかさず地面を蹴り上げ跳躍。理愛がいた地面が大きく穿たれる。削れる地面。不可視が理愛を襲い、理愛は動くことを止めない。立ち止まれば、待っているのは確実な死。

「ひよお！　すっげえ、躲かわしたぞ！　虹子お、こいつすげえな！」
「言ったでしょ。理愛は私と「同じ」なんだから、舐めてかかったら痛い目見るよ」

「そうか、そうか、OKわかった。あんな忍者みてえに動かれちゃさすがにノーコンのまんまじゃ上手く当てねえな、仕方ねえな、

アレ使うか！」

嘲るように身体を大きく震わせたまま笑い続ける雨弓が、上着を捲り、そこから何かを取り出した。理愛は逃げ続け、樹の裏に身を隠す。

「明らか殺そうとしてきた……」

何が研究に協力しろ、だ。

理愛が「殺す」よりも早く虹子が「殺し」に来た。

理愛はもたれる樹を小さく小突き、包丁を取り出す。

前回はカッターナイフだった。威力を向上する為に家にあつたものを流用した。魚を解体する為の出刃包丁をまさか人間を解体する為に使用するなんて雪哉に知られたら何と言われるか、なんてそんなこと兄に知られるわけにはいかないから……、

轟音が響いた。

暴風が通り過ぎ、土に根を張る樹木が吹き飛んだ。そして理愛が隠れていた大木までも、まるで砲弾でも直撃したように木っ端微塵に砕け散る。

「何が……？」

明らかな危機が理愛に襲い掛かっている。

停滞は死だ。逃げなければいけない。でも、どうして？ どうやってこんな破壊を――

「避けるよ、時任妹お！ 当たると痛いじゃ済まねえぜえ！」

銀と黒の色に染まる銃器を持った雨弓が、舌を出して笑いながら引鉄を引く。

その銃口は理愛に向けられていた。理愛はすぐに照準から逃れるように草むらに逃げ込む。通り過ぎた不可視が、生え並ぶ樹木を再び挟り飛ばしていく。

「原型はよお、『S & W M500』って言うんだけどよお！」
引鉄を引く度に周囲がその火力の前に吹き飛ばされていく。

しかし銃口からは硝煙は上がらず、ましてや爆発音すら出さず、無音のまま。だが撃鉄が落ちる音は聞こえる。そして雨弓の腕は射撃する度にその反動で腕が揺れている。

「見てくれよ、これ。こんな口径の銃なんてよ、漫画みてえに片手で水平に構えちゃってよ！ そんなカツコつけて撃ってみるよ！ 肩外れて使いもんにならなくなっちまうんだよなあ！ だからこれはよ、人類が手を出すにはまだ早い代物だよなあ！」

理愛には銃の知識は無い。

だから、それがどれだけの代物なのかはわからない。

やけに長く伸びた銃身も、装弾数も何も理愛が知ることはない。

それでも自分と変わらない高校生がまるで大砲のような歪な形をした銃を片腕で撃ち出すという光景だけは異景であるということにはわかった。

「なんなの、アレ……」

忌々しく暴力的なフォルムを見せ付ける兵器を見つめる。

引鉄が引かれれば破壊は繰り返される。

おかしい。

さすがの理愛でもそれはわかった。

銃というのは弾があって初めて武器として使用できる。しかしどうだろうか、雨弓は数発撃ち出した後、シリンダーを見せるだけでそこには薬莢も何も無い。空っぽだけが見えた。そんな筒を回すだけの行為。それだけで再び暴力が開始される。

「あれが兄貴の能力だよ」

身を隠す理愛の背中に立つ虹子。

気がつき、振り向けば瞳には虹子の持つナイフの刃が見えた。間一髪、避けるが左頬を刃が掠め血が迸る。

「すごおい、今のも躲す？」

「能力、なの？」

「兄貴の？ そうねえ、そうだよ」

「虹子お！ ネタ晴らしすんじゃないよ！」

耳を劈く破碎音が理愛と虹子の距離を離す。雨弓は虹子がいたにも関わらず、射撃したのだ。だが虹子は恐れることなく理愛から離れていく。それどころか虹子は雨弓の向ける銃口を背に理愛だけを見詰めている。当たれば間違いなく死ぬ。怖くないのか。そんなこと聞く気もないけれども。

「時任妹、お前も虹子と同じなら……そろそろ本気出さねえと死ぬぞ？」

「わたしは、そんな——」

戦う為の能力が無い。あつたとしても使い方がわからないままでは、どうしようもない。

使えないのならば、無いのと同じだ。それでも本当に、能力とやらを使わなければ間違いなくこの二人に殺される。殺してやると誓ったはずだ。それなのに何も出来ぬままに無惨に殺されるなんて、それこそ嫌だ。理愛は二人を睨みつけ、隠し持った包丁を取り出す。逆手に持たれたそれで、敵こそ無惨な肉片に変えてやるのだと。

「あの出来損ないのお兄ちゃんと一緒にしてやるからよ、そこ動くなよ」

「ふざけたことを」

気持ち悪いことを言うな、吐き気がする。だから疾駆する。その口で二度とふざけたことを言えぬように舌を斬り裂いてやる為に。

「私を無視して、兄貴の相手？ 余裕だね、理愛」

「どいてください」

逆手のまま振り払った刃が虹子の刃で受け止められる。

二体一。しかも相手は能力を自由に操れる。その時点で十分、差があるがそれを理由に逃げるわけにはいかない。それに、これだけ隣接していれば雨弓も理愛だけを狙い撃つことは難しいだろう。

「へえ、鏢競り合って私を盾代わりにするわけだ。エライね」

「アナタの兄の凶弾はこれで届かない」

しかしそんな理愛の言葉を嘲笑うように、虹子の持つ刃に力が籠められていく。離れようとはせず凶刃が理愛の刃と重なっている。

「兄貴、撃つて」

「わかつてる」

躊躇無く、虹子の言葉が撃鉄を落とす。大口径から放たれる不可視が虹子と理愛を襲った。

妹諸共に平然と撃ち出すなんてどうかしている。だが、鳩尾に虹子の蹴りを受け転ぶことでそれは回避された。

「びつくりした？」

巨大な大木さえも木っ端微塵にする威力だ。その見えぬ力が直撃すれば理愛の身体など粉微塵になることなんて目に見えてる。

しかしそんなことよりも今は転がり、そのまま鳩尾に受けた衝撃と痛覚の前に意識が消えてしまいそうだった。何度も咳き込み、呼吸を整える。それでも、そんな余裕があるわけもなく。

地面の上を転がる理愛が空を見上げれば、見下ろす虹子が刃を墜落させて来たのだ。

「この……！」

反射した神経が無意識のままに首を振り、それは理愛の額に刃が刺さることはなく地面を突き刺していた。そしてそのままささず立ち上がり、朦朧としながらも真横に刃を薙ぐ。

「へえ、その状態でここまで出来るのにな……どうして上を目指せないの？」

限界というものが、理愛にわからなかった。

人より早くは動ける。人より高く飛べる。人より強く戦える。

それでも、常人を相手にした場合でしかない。

目の前にいるのは何だ？ 有能者^{コダー}だ。目に見えぬ何かを頭の中で作り、まるでプログラムでも構築し、その開発が完了すれば、能力として扱うことができる。それをどうすれば、どのように考えれば組み立てることが出来るのか？ 出来る出来ないが才能の分かれ道だ。

理愛にはそれが出来ない。しかしわかっていることがある。何を持って難しいというのかはわからない。頭の中で能力を構築し、発

動させるなどといわれてもわかるわけがない。だけど、理愛が常人を超える瞬間はいつだって、殺意や覚悟、信念。感情一つでスイッチを入れ替えることが出来るのだけははっきりしている。

「おかしいなあ、第一界層^{かいそう}は確実に踏んでる。だけどそれ以上を目指せない。何がいけないのかなあ、わからないなあ……」

虹子の言葉の意味は理愛にわかるはずがない。

雪哉のような変な言葉を使うなと理愛は苛立たしく虹子を憎む。

「なあ、虹子あ……もうつまんねえわ」

倒れたままの理愛を見下ろすのは虹子だけではない。

そう、敵はもう一人いる。雨弓が銃口を理愛の眉間に押し当てる。「これがお前の言ってた「同じ」なら、どうしてお前みてえにデタラメ見せてくれねえんだ？　こんなならまだ普通の有能な者と殺り合ってる方がよっぽどいいだろ」

「ダメだよ、兄貴。もうちょっとだけ待って」

「もういいだろって——」

「待って」

虹子の瞳はいつまでも変色を遂げる。そんな色の中でもっとも冷たい氷のような色で雨弓を見据える。兄妹に向ける視線では、なかった。そんな視線を向けられた雨弓はゆっくり銃口を上げ、理愛から離れていく。

そして虹子はいつものようなふざけたような顔をして、瞳の色が今度は灰色になっていた。

「理愛が選ばれた理由、わかる？」

わからない。

もうずっと、わからないままだ。

何一つわかったことなんてない。

能力を持つ人間なんて溢れる程に存在する世界で、厳選された理由などわかるはずもない。そもそも自分自身が如何なる能力を所持しているのかさえわからないというのに。だから理愛は無言のまま、首を横に振ることしか出来なかった。

「理愛のその結晶が欲しいの。異能を超えた異能。種^{シート}晶を超越した、
紛い物ではない本当の結晶」

「そんなの……」

「知らないだけ。理愛が、人々が、世界が、知らないだけ。無知は
罪だよ。とてつもない力を秘めた結晶を保有しているのに、何も知
らないなんて、何もしようとしていないなんて」

そんなの勝手じゃないか。理愛は不満げな眼差しを虹子に向ける。
たとえ自分の中に秘めた結晶が種晶よりずっと強大な力を持つて
いたとしても、力を手に入れたとしても、その力を振り翳さなけれ
ばいけないと誰が決めた。能力があれば、その能力を使わなければ
いけないのだろうか。否定しろ、しなければいけない。そうしなけ
れば虹子の価値観に吞まれるだけだ。

「つと、まだ抵抗するの？」

地面に手を置き、身を屈め、逆手に刃。

戦わなければ。

本物であろうが、贋物であろうが、そんなものに興味はない。

今はただ、それだけの理由で自分の世界を壊そうとしている敵を
倒さなければ。

「いいよ、わかった。わかったよ。来なよ……戦おう。攻撃しなよ。
そうしないと、私はずっと理愛を追い続けるから」

その言葉が起爆剤だった。

そうだ、この追跡者を排除しなければ理愛の世界は守れない。

だから、全速で駆け抜ける。全力で突き破る。

虹子を殺さなければ、日常は帰って来ない。

「あああああああああっ！」

躊躇いも、恐怖も誤魔化すように理愛は咆哮し、全ての力を刃に
内包した。

その刃は確かに虹子の心臓を狙っていた。

けど、

「言っただけでしょう、上を目指さない限り……理愛の世界は変えられ

ないよ？」

刃の先端は、虹子の心臓に届かない。

刃先が見えない膜に刺さっているようだった。そんな障壁が虹子を守護している。そして、やはり理愛の武器は粉々に砕け散る。

まだ――

あの初めての敗北の日。あの時だって、理愛の刃は無常にも微塵になつた。

そして無防備となつた理愛に虹子の裏拳が左肩に直撃した。それと同時に、理愛の身体はまるで車にでも轢かれたみたいに大きく浮いた。錐揉み回転しながら素っ飛び、樹に背中を強く叩き付けられる。同じだ。既視感^{デジャヴ}を見た。何もできず、抵抗は意味を成さず、ただ圧倒的な力の前に寂滅という結末だけを押し付けられる。

そして物理的にも押し付けられた圧迫の力。吹き飛ばされ、踏み潰され、樹木に理愛の身体が埋もれている。頭から血を流し、左肩は上がらない。折れたか、それとも砕けたか。満身創痍もいいところだ。明らかに力の前に支配されている。何もできない。何もやり遂げられない。

「おいおい……虹子お、さすがに死んだだろ、それ」

瞳には光が抜け、ピクピクと血を流し痙攣する理愛を見て、さすがの雨弓も同情しているよう銃口を下ろし、理愛の頭を銃のグリップで小突いている。理愛は、もう動けない。

「はぁ……こんなに終わりの？ そうなの？」

だが雨弓の声を聞くことなく、虹子は失望したように、さっきまで楽しんでいたはずの玩具で遊ぶのに飽きた子供のように興味を示すことを止めて理愛の骸と変わり果てた身体を見下した。

「理愛、そんなに力が要らないなら頂戴よ。私に頂戴。それでいいの」

理愛はもう声を出すことすら出来なかった。

動くことも、喋ることも出来ない程に衰弱していた。それでも、虹子の言葉は止まらない。

「欲しいの、私達はね。その理愛の内に秘めた「花晶」^{レムリア}をさ」

「……ね、花晶？」

「そう、その結晶が選ばれた者の証。でもそれは理愛が選ばれたんじゃない、理愛が、選んだだけだね」

そこでやつと瞳に光が灯り出し、理愛は再起動する。

ここでこのまま落ちてはいけない。

自分のことがわからない。それなのに他人が知っているなんてふざける。

新しい言葉を聞き、その意味を知るまではまだ終われない。

そう、終われない。

理愛は立ち上がる。まだ何も知っていない。まだ何も果たせていない。

だから、理愛は、

「おいおい、ゾンビかこいつは？」

ダラリと腕を垂らし、口元からは涎と血を滴り落とし、弱い銀の光を灯した瞳で月下兄妹を一瞥する。

「お前にわたしの何がワカル」

「おっ？ なになに？」

原理なんてわからない。どうすればいいのかなんて知っているわけもない。

それでも、戦うのだけは止めてはいけない。

胸が痛い。心臓に棘が刺さっているように、胸が苦しい。

肩が痛い。砕けた肩はもう使えない。だから、どうした。まだ右

腕がある。腕一本あれば、いや、生きていれば何度だって、幾度と

なく、終わりなく戦い続けることが出来る。

「わたしの中の結晶、そんなの知らない。知りたくない」

血を流しながら。猛禽類のような獰猛な瞳で虹子を一見し、胸を押さえる。頭の中で何かが浮かび上がる。輪郭は浮かび上がっているのに形が不確定で、それが何かはわからない。

でも、はつきりと理愛の頭の中で構成されている。これが能力な

のか、と理愛は笑う。

銀の瞳が発光し、銀の髪もまた光を放ち、大気が揺れたような気がした。異常を孕み続ける理愛を前に虹子は高揚し、はしゃぎ出す。この時を待ち侘びていたように、大きく手を広げて笑っている。

「やつとかあ、やつとなのお、理愛！ はやく、はやくはやくはやく、はやくう！ その異能^{ちから}を見せてよお！」

銀の光を纏う理愛に狂喜する虹子。

そして理愛はただ手を翳し、力を放出する。

「……え、？」

だが、力が顕現することはなかった。光が具現することはなかった。

情けない声を上げて、理愛は棒立ちのまま手を下ろした。力強く溢れていた光は電池切れを起こした懐中電灯のように、もう二度と光り輝くことはなかった。

「ははっ、虹子よ、やつぱこいつも無能力者^{ヌーブ}なんだってよ、あの出来損ないで土下座しかできねえ口だけ時任の妹だぜ？ 所詮、力を使う権利を得られても、肝心の力は使いきれない。わかりやすくていいじゃねえか、こういうのはクズって言うんだぜ」

能力が、発動しない。

理愛の手が震える。どうして？ もうあと一歩だったのに、きつとその銀の光が外出すれば目先の敵を屠ることなど容易なはずだったのに、それなの光を出すことしかできなかった。これではどんな能力なのか把握することもできない。辺りを照らす光でも、闇が大きければ呑み込まれる。理愛の光は闇に喰い潰された。

「理愛、つまんないよ。やつぱり理愛の持つそれ、私が貰うよ」

理愛に向けられていた関心は皆無となり、虹子はつまらなさそうに失望し、そんな能力を発動できない理愛に絶望し、手に持つ小さな刃を輝かせ、振り下ろした。

1 - 13 全能結晶の無能力者（4）

1 - 13 全能結晶の無能力者（4）

病室で雪哉は黙って空を見ていた。

数え切れぬ星が空を瞬く。小さな箱庭に閉じ込められてしまった雪哉は何も出来ず、この白い箱の中で身動きが取れないでいた。

一週間。

そう、それだけの間、雪哉は眠り続けていた。

目を覚ませば、理愛がふざけたことを言っていたことを思い出す。どうして理愛がそんなことを言う。死ねばいいのかなんて――

ドスン。

雪哉は無言のまま、ベットを叩く。

物に当たっても、何も変わらないのだけれど、今はそうすることしか出来なかった。そしてそんなことしか出来ない自分を呪った。

「そんなイライラしてたら嫌われちゃいますよ」

誰もいなかった病室の中でいきなり声が聞こえた。

すぐ声をした方を見ると、そこには瀧乃曜嗣の姿があった。

病室の扉が開く音はしなかった。

それなのに、その男はそこにいた。それどころか余裕綽々にリングの皮を果物ナイフで丁寧に剥いているのだ。

「ほい」

綺麗に剥かれたリングが皿に並べられ雪哉に渡された。

ウサギの形に切り剥かれたリング。器用に切られたそれを雪哉は受け取って、そのまま机の上に置いた。いきなりこんなものを渡さ

れてもとてもじゃないが食べられない。食べる気分ではなかった。
折角、剥いてもらったのは悪いが雪哉は一口もつけることなく放置する。それを見て曜嗣は自分の剥いたリンゴを一つ口の中に放り込んだ。

「いやいや、リンゴ食べてくださいよお！ 食べ物で粗末にしたら殺されるよ。一斉にお百姓さんにボコされてもオラチン知らないよお！ オラチンはちゃんんと、ちゃんとお食べますんで、雪哉くんもさっさと食べるでありんす」

そう言って一つリンゴを摘んでは雪哉の口に無理やり押し当ててきた。あまりにも鬱陶しかったので仕方なしに口を開けた。可愛い女の子にされるならまだしも、眼鏡をかけた白衣の胡散臭い男にこんなことされてもちっとも嬉しくなかった。

「驚かせないでくださいよ」

さっさとリンゴを咀嚼し、胃の中へ運び終えた雪哉は恨めしそうにそう言った。

潜むようにやって来て、気がついたら目の前にいるなんて心臓に悪い。

入ってきたことにも気づかなかった。本当に不気味な男である。

「なんで普通に入って来ただけだったのに、そんな言われ方しないといけないわけ！ ぶんぶん！」

気色悪い、しかしそんなことは言えるはずもなく、

「もう面会の時間だって終わってるんですけど」

「堅いねえ、ホント雪哉くんはお堅いです。堅すぎて肩凝らない？」

「凝るかよ……」

曜嗣の減らず口に付き合っている方が肩が凝りそうだ。だから雪哉は挑発にも似た曜嗣の言葉に出来るだけ反応せず、だんまりを決め込むことにした。

皿の上にあつたリンゴが全て無くなり、雪哉はベットの上で静かにしていた。曜嗣もまたいつものようにふざけることなくジッとさつきリンゴを剥いた果物ナイフの刀身を見つめているだけだった。

理愛の様子がおかしかった。

はつきりとわかる。

病室を抜け、突然戻ってきたと思えば何か焦っているように見えた。

病室の向こうで誰かと喋っていたのもわかる。だって理愛は風に当たるなどといいながら、そこから一步も動いていなかったから。そこまではわかっていた。しかし何をしていたかまではわからない。それでも、嫌な予感しかなかった。

何故なら理愛は親指を「噛んで」いたから。

いつだってそれは悪いことが起こる予兆だった。

理愛の親指を噛むという癖は幼い頃から知っているものだった。

しかし、それはただ噛んでいるわけではない。思い詰めている時こそよくする行為だ。そして決

まってよくないことが後から起こる。理愛自身は気がついていないかもしれないが、雪哉に別れを切り出した時、思いつき親指を噛んでいたのが見えた。出て行くときも、何かを呟いていた。「どうして、こんなところで腐ってるんだい？」

考え込む雪哉に、曜嗣の声が聞こえる。

動かないのは何故か？

何も、出来ないからだ。

理愛がそうやって何か思い詰めていたのがわかっていながら、雪哉は何もしてやれなかった。何も出来ず傷つき、倒れ、こうして病室のベットの上で眠っていた。

「理愛ちゃんは今ホントいい子だね、雪哉くん倒れた時なんてずっと泣いてたんだあー、可哀想に、可哀想に」

そんなこと思ってもいなくせに、曜嗣は笑いながらそんなことを言う。

曜嗣は雪哉や理愛にとって保護者でしかない。保護者であって家

族ではない。雪哉が倒れた日だって曜嗣は病院の病室を一つ借りる手配をしただけにすぎない。それでもいい。何もしてくれないよりは余程いい。

例え感情が箆められていなくても、嘘は吐かない人だった。

理愛が泣いていたのはきつと本当だったろう。そこから聞いてもいないのに曜嗣は語りだす。理愛が泣いていたことを。後悔を、懺悔を。

能力を手にしてしまうという種晶とやらが見つかったあの日からずっと悩んでいたことを。あれだけ曜嗣のことを批判していた割に、そんな悩みの数々は兄ではなく曜嗣に相談していたのだ。

悔しかった。

頼りにならないのだろうか。それは能力がないから？　それだけの理由なら、本当に悔しくて堪らない。

ギュッと潰れるぐらいに左腕を握り締める。

包帯を巻いたその腕を。

包帯を巻くというのは、傷を隠すという行為。雪哉のその腕は何を隠しているのか。

ただ作り描いた設定。言葉も、身体も嘘だらけ。

聞き慣れぬ単語も、そう使うことの無い言葉も、全部、雪哉の嘘でしかない。

「その左腕でさっさと理愛ちゃん守ってあげなよ」

「何を……これは……」

ただ巻かれた包帯を指差し、曜嗣は笑う。

これは幼き頃に自分がした、愚かな行為。

力を持たず、無能のまま、雪哉が全て失ったあの日から行い続ける終わらぬ行為。

「キミが倒れて、理愛ちゃん泣いて、外飛び出して、さて……今は何をしているやら」

「どう……意味ですか？」

聞き捨てならない台詞だった。

何を？

もう夜だ。真っ暗な闇が広がっているこの世界で、外を、飛び出す？

「理愛ちゃん、「Ark」に協力するってさ。電話あってね、そう言ってたよ」

眼窩から眼球が零れ落ちてしまふんじゃないかってぐらいに、大きく見開かれた瞳。

わけが、わからなかった。

協力は拒絶していた筈だ。図書館で、曜嗣が見せた手紙を前にきっぱりと、はつきりと断っていたはずなのに。それなのにどうしてその選択が覆されているのか、雪哉にはわからなかった。

「え？ えっ？ ええっ！ 何なの、その何もわかってなさそうな感じのアホ面は？」

曜嗣のその呆れた顔と声は雪哉のあまりの無知さに嘆いているようにうだった。

それでも雪哉にはわからない。理愛がどうして一人で行ってしまったのか。

「雪哉くんさ、理愛ちゃんと二人っきりになってからもう六年になるよね」

「まあ……」

六年。

全てを壊され失ったあの日から、雪哉と理愛は二人になってしまった。

「オラチンはさ、キミの両親にいろいろ世話になったからね、まあ、恩返しの意味も込めて保護者してるけど、それでも他人は他人だ。それはきつとキミがよく知ってる」

それは既知だ。

どれだけ近くにいたとしても、曜嗣は他人でしかない。

生活する場所も、環境も何もかもを用意してくれたとしても、それに対して感謝は出来ても、家族にはなれない。それは絶対だ。雪

哉の家族はとつくに崩壊してる。落ちた飛行機と一緒に、全壊した。
「キミはあの六年前、オラチンに何を言った？」

「理愛は、理愛だけは……最期まで、守り抜く」

喪失し、曜嗣との邂逅を果たしたあの日、幼きあの日から左腕に誓った。

包帯は誓約。虚栄は利剣。作られた設定は自分を偽るため。妹を守るため。敵の視点を自分に移すためにしたことにすぎない。

銀の髪と瞳を侮辱する者の前に立ち、自らが正義と語りいつだつて立ち向かって来た。幼い頃、そうやって自分は異世界から来たものの、世界を守る為に選ばれたのだ、そんな虚像を作り出したのは妹を守る為だった。幼く、どうすればわからなかった雪哉が取った行為がそれだった。お陰で誰もが時任雪哉はおかしな奴と認識し、敵意は雪哉へと向けられることとなる。しかし雪哉の思惑通りに理愛が蔑視する数が極端に減少した。それでも零になることは無く、雪哉は目的を果たすことはできなかった。力は無かった。弾圧することでもできず、少なくとも理愛を軽侮する者を全て止めることは未だに叶っていない。

「雪哉くん、キミさ、ホントに理愛ちゃん守ってるつもり？」

その言葉は雪哉にとっては侮辱でしかない。

喻え相手が恩人であっても、許すことはできない。

だから、ありったけの憎悪を込めた視線を曜嗣に向けても彼は動じない。

そして尚、言葉は続く。

「逆だよ、ぎゃ、く。全くの逆。反対。逆転してることにさっさと気づけよ」

前のめりになって、雪哉の顔に近づきながら鋭い眼光で雪哉を射抜く。それだけで増大していた憎悪は萎縮し、曜嗣を直視することができなくなる。

「今は雪哉くんが理愛ちゃんに守られてる。格好悪いねえ、ダサすぎて鳥肌モンだよお！ 吐き気で窒息死しそう！ なんか頑張っ

臭い台詞言って、誓ってたあの頃のキミはとくに死んでしまったのかなあ？　どうなのかなあ？　どうなんだ？」

そんな辛辣が雪哉を際限なく襲う。

そして振り返れば、雪哉は理愛を悲しませていた。大切な妹に悲哀を抱かせている時点で守り通せていない。

わからされた。たった数分で、雪哉の価値観は破滅的なものとなる。

そんな頭を垂れる雪哉に曜嗣は指を差す。

「行きなよ、理愛ちゃんは学校の裏山だよ」

「本当に理愛は——」

「そこで何もせずに結末を見届けるならそうするといいよ、でもそんなのオラチン許さないよ」

「どうして、アナタは……」

曜嗣は鼻で笑った。どうしてそんなことを聞くと馬鹿にしたように。

「つまらないじゃん」

「は？」

「いや、その、つまないし。最初っから勝敗わかってる話見せられて喜ぶヤツとかいんの？　そんなクソシナリオみたい？　クソゲーすぎ！　おもんねえつまんねえくだらねえ、だからオラチンはキミらに節介を焼くよ。そうしないと浮かばれないヤツもいるしね」

曜嗣の真意がわからない。

両親を喪ったあの日だって、まるで狙い済ましたように現れた。

ただ、生きる為の支援をしてくれたそれだけで救われた。だから、曜嗣が何者かだなんて気にも留めていなかったはずなのに、今はとても恐ろしく感じた。

それでも、今はやるべきことがある。

自分の誓いが嘘のまま終わってしまう前に、理愛を守る。

雪哉は往く。

「往きます、敵を討ちます」

「いいねえ、いつもの気持ち悪い雪哉くんだ。いつてきな、オラチンは節介しか出来ない。でも、キミらの側にはいてやれる」

会釈し、牢獄のような白箱から飛び出す。

それでも腹部に風穴を空けられ重症を負ったまま。

ズキリと痛みが走るが唇を噛み締めてただ耐える。

種晶は人々だけでなく世界も進化させている。医療科学も遥かに進み、種晶の力によって傷口を塞ぐことも可能になった。それでも治癒を早めるだけで、完治には至っていない。それが雪哉の傷。

だが、そんな傷ぐらいで雪哉の歩が止まるわけがない。

理愛が戦っている。雪哉を守る為に。

きつと有能力者と戦えるのは自分だけだと、そう思ったからこそ何も言わずに行ってしまった。

歯痒い。

何もできないのは力が無いからではない。

何かを成し遂げようと、その覚悟が足らなかっただけに過ぎない。きつと何処かで諦めていただけだ。

理愛を取り巻く脅威を全て排除できない力不足から生まれた苦悩。自分一人では何も出来ない。

違う。

自分一人だから何も出来ない。

だから、

それは――

雪哉は走り出す。

たった一人、大切な家族を守る為に。

1 - 1 4 全能結晶の無能力者（5）

1 - 1 4 全能結晶の無能力者（5）

力は発動されることはなかった。

絶望する理愛に失望した虹子の凶刃が振り下ろされた。
肩口から腹部に掛けて切り裂かれ、血が溢れた。

「あ、ああ……」

切先で裂かれたのは皮膚だけだった。

それでも十分理愛な恐怖を与えることができた。

理愛は逃げる。殺される。このままだと間違いなく殺される。

（どうして……っ）

逃げる。逃げる。逃げる。

生きる。生きる。生きる。

たった二つ。それだけ念じ続ける。

光が生まれ、輝きを放ち、力が生まれるはずだった。

もう、そこまでできていた筈なのに、それなのに、力は形を描くことはなかった。

裂けて見えた下着を隠すことなく走り続けた。

痛い。でも立ち止まればもつと痛いことになる。

勇ましかった姿はそこにはなく、今はただ映画のように殺人犯から怯え逃げ惑う被害者のよう。

そしてそんな加害者が後方から追いかけて来る。

死にたく、ない。

自分は有能力者ではなかったのか？ 身体の中にその権利があるはずなのに、力は理愛を助けてはくれない。

「理愛あ！ 逃げちゃダメだよ、もう終わりなんだから諦めて殺されてよお！」

耳に響く、おぞましい言葉。

きつと捕まれば殺される。

両手をギュッと握り締めた。ただ走る。力は応えてくれない。

漫画のように、小説のように、都合よく覚醒を見せてはくれない。

涙が、毀れる。

何も出来てない。

何も、何も――

兄である雪哉を傷つけた悪い奴を倒すつもりで、その覚悟でここに来たのに、自分で選択して歩んだはずだ。

それなのに、今は、とても怖い。

死ぬのが怖い。

どうして？

兄と、離れ離れになる。

「いやあ！ そんなの、ヤダあ！」
走る。

死から遠ざかる為にひたすらに。

疲労する身体と精神を無理矢理動かせる為に叫ぶ。

まだ走れる。止まるな。走れ。

「はあ、はあ、はあ、わたし、わたしい……」

どれだけの覚悟も信念も敵に通用しなかった。敵わなかった。初めての敗北でさえ、心が折れることはなく、何度でも立ち向かえた。雪哉が凶弾で倒れ、その弾を撃った敵を見つけた時は胸が高鳴った程だ。戦えた。何度だって戦うことだけは止めなかった。

それでも、自分の刃は届かない。

どれだけ、願っても力は出ない。

理愛の心を壊すには十分な理由だ。

何をやっても敵わない相手を前にどうすればいい。そんな相手を倒すことが可能なのか？

見えない弾で理愛を暴行した雨弓の力。
見えない壁で理愛を蹂躪した虹子の力。

そんな不可視の前ではやはり何も出来ない。それでも、そんな力の前でもあれだけ勇敢に立ち向かえたはずなのに。今はもう、それも出来ない。

「きゃっ！」

躓き転び、泥だらけになってしまう。

そして、もう逃げ切れることは叶わなくなった。仰向けのまま真上を見れば、そこには虹子が立ち尽くし、睥睨したまま理愛を威圧している。動けない。少しでもここで抵抗の素振りを見せてしまえば手に持つ刃が喉奥に突き刺さる光景しか見えない。

「本当に、理愛って面白いよね。コロコロ表情も感情も変わって、なんだか私のこの眼みたい」

樹の陰影の下に立たれてしまっただけは虹子の顔を見たとしても表情まではわからない。けれど、樹と樹の合間から漏れる月光が暗がりをおぼろしく照らし、虹子の瞳が赤く染まるのが見えた。色を変える虹子の瞳。そんなすぐに色を変える虹子の瞳のように、理愛もまた憤怒や悲哀といった様々な感情を表現する。

殺してやりたかった。でもそれが出来ないのなら諦めるしかない。だから苦しくて悲しんでいるのに、そんなことを言われても嬉しくない。

理愛は何も言わずに虹子から視線を逸らす。虹子はそれを許さない。理愛に押し掛かり、持っていたナイフを捨てて両腕を押さえ拘束する。

「や、やめて！」

「やめるわけ、ないでしょ」

どれだけもがいても虹子の拘束を解くことは出来なかった。虹子はただ愉しげに理愛の身体の上で踊る。

涙を浮かべ、悔しげに顔を歪める理愛を見て虹子の嗜虐心が刺激されたのか理愛の両手を片手で掴み、荒い息を吐きながら口元を吊り上げたまま理愛の胸元を擦り始める。

「な、にをつ……」

「何ってえ、理愛が自分の身体の中にある花晶レムリアが、見えないままなんて可哀想だなんて思ってたさ」

そして丁度、胸の間に手は置かれ、ゆっくりと虹色の光を放ちながら理愛は自分の身体から何かが込み上げて来るのを感じた。胸が焼けそうに熱い。息も苦しい。声が出ない。そして、光が消え、理愛の胸元には銀色に輝く大きな玉の形をした結晶が姿を現した。

「そ、そんな……」

自分の胸元に埋まったその結晶を見て、理愛の身体にその異能を与える結晶が本当に存在していたことを理解してしまった。こんなものがあるせいで、自分も雪哉も、この世界も、何もかもが変わってしまったただなんて、そう思うだけで悲しみに押し潰されそうになる。

「泣いてるの？ 理愛……ふふつ、でも、大丈夫。理愛だけがそんな大きな結晶を身体に埋め込んでいるわけじゃないんだから」

そう言って、服を捲り上げれば、

「私もなんだから」

白い腹部が露わになる。それは前。理愛に見せた虹色の結晶。

腹部に埋め込まれたその結晶が幾つもの輝きを放ち、煌き続ける。しかし前見せた時、その結晶は小さいものだった。だが今は理愛の胸に埋没する自分の拳ほどに肥大したモノへと変わり果てていた。

「理愛の見てたら、興奮しちゃった……」

「ひっ……!!」

身体が竦む。一層大きくなる震え。止まらない。

それでも、声は出た。

「わたしは、何な、の……」

どうしてそこまでして追い詰める。

特別な力なんてあるわけがない。だって、力が使えないのに何の意味があるんだ。

だから、そんな疑問を投げかける。虹子の身体はピクリと止まり、そしてゆっくりと顔を近付けてこう言うのだ。

「種晶^{シート}はね、視野の狭い愚か者が手に入れて悦ぶただの嗜好品。力？　そうかもしれないね、人より優れていればそれだけでいいのかもしれないね」

種晶は人に能力を与え、異能という才能を開花させる。

火を放つことも出来れば、空を翔ることだって出来る。

たった一つ、それは人間を超越させるには十分な力を与えてくれる。そんな常識を逸脱する代物が、嗜好品などとそんな呼び方で虹子は括る。

「花晶^{レムリア}は違う。これは「本物」なの。世界をどうこうするなんて簡単なぐらい、おぞましい力を秘めている。わからないの？」

わからない。

わからないからこうして怯えているんだ。

どれだけ嘆いても叫んでも何も変わらないから恐れているのだ。

「だから、さつさと黙ってテメエの能力^{ちから}を見せろって言うてんのに、お前はクズだな時任妹」

そしてはだけた服から白い肌を晒す理愛に向けられた銃口。

雨弓の持つ銀黒の銃身が不気味に輝き、銃口からは黒い底の見えぬ深淵が理愛を見つめている。

「わたしに、力なんて無いって……言うてるでしょう。わたしの身体に埋まったこんな結晶、要らないって、何度も——」

身体の奥底に存在していた結晶が、自分の世界を狂わせているのならさつさと消えて無くなって欲しかった。もうしつこいほどにそう言っていた。

けれど、そうはならなかった。

ただ理愛の身体に佇み、時間をかけて理愛を壊していった。

「埋まってる？　ハハッ、虹子、ホントにこいつ何もわかってない

んだな。こりや傑作だわ。自分が化物だつてことに気づかずに人間ごっこを楽しんでたつてか？」

「ば、け、もの？」

雨弓の言葉を反芻しても、その言葉の意味はなんだったろう。

おかしい、その言葉は聞いたことがある。けど、自分に向けられて言われたとなれば話は別だ。ばけもの？ 誰が？ 理愛はそこ言葉を脳内で調べる。どこに化物がいるんだ。この腕も脚も、身体だって、正真正銘の人の子だ。どこも化かしてはいない。人を恐れさせようと、悪巧みも考えていない。恐ろしい姿も形もしていないというのに、雨弓は理愛を化物だと決め付ける。

「そうだよ、バケモノ」

「わたしは普通の、人間です！」
我慢ならない。

いきなり人をバケモノ呼ばわりするこの男が許せない。

どれだけ辛く、苦しくとも、逃げたいはずなのに、その言葉だけは撤回させなければいけない。

けれど理愛の叫びは届かない。雨弓は笑いながら地団駄を踏み、言う事を聞かない子供に苛立つ大人のように腹を立てていた。

「聞き分けるよ、お前は人間じゃねえの！ 普通？ お前が言うなよ、お前みてえな人間知るかよ」

音が爆ぜ、理愛の近くにあった樹を撃ち抜く。

コルク栓のように綺麗に切り抜かれた円形の弾痕。

その威力の前に理愛は強制的に口を閉ざされる。

理愛の意見は全て否定され、雨弓の価値ばかりが前に押し出される。

「普通の人間が髪の毛が銀色なわけねえだろバカが！ どの外国から来たんだよウケるわ！」

銀の髪と瞳。

それは確かに東洋人とは言い難い変色。

そしてその二つの要素はこれまでも理愛を苦しめてきたものだった。

た。

だから、普通ではないと言われても強い意志を込めて否定することができない。

普通じゃない。

そう、普通ではないのだ。

人間の髪、瞳の色ではない。

刃のような、氷のような、結晶のような白銀。

その色は例え美しい輝きを放っていたとしても、人と異なった色ならば異常と見なされても仕方がない。

「理愛、花晶が種晶を遥かに超えた力があるのは何故だと思う？」

消沈する理愛に掛けられた虹子の言葉。

理愛はもう何も答えることができない。

「結晶そのものだからさ、髪も色も血も肉も、全部、全部で一つの」

その言葉が決定打だった。

種晶は結晶の断片でしかない。小さな結晶を身に埋めることで得られる異能。

けれど、花晶は違う。

それは種ではなく、花。

花開くそれは異能を超えた窮極。

出鱈目もいい所である。種をその身に植え、花を咲かせることで能力を得るような、だから種晶なんて名前だと、そう理愛は思っていた。

でも、別に「花」の名を冠した結晶が存在しているのならば種の結晶は所詮、「花」には勝てない。

そしてその結晶は生きているのだ。人一人、そのままが結晶。身体に埋まっているそれは一部でしかない。血肉から髪の毛一本全てが結晶なのだ。そんなもの種晶の比ではなく巨大。

「そんな、そんな……そんな、それじゃ、それじゃ、わたしは……」
「化物、化け物、ばけもの、バケモノオ！ お前は人間なんかじゃ

ねえ、ただのお化けだ。」

お化け。一番しつくり来ることだろう。

人の形に化けた結晶。

そう、花晶は「人」を形成した結晶だった。

小さな、本当に小さな結晶で、人に異能を与えるとすれば、理愛のような矮躯であつたとしても種晶のように小さなモノと比べれば何十倍、何百倍の質量となる。

種晶もサイズによって得られる能力が強大なものになるとされている。では理愛そのものが結晶だとするのなら、得られる能力は如何なものか？

「わたし、にんげんじゃ、ない？」

それでも能力の大小だと、今の理愛が知りたいことではない。

人間ではない。

結晶。

人間の形をした——結晶——

「じゃあ、わたし、わたしはあ……」

壊れる。自壊する。崩れてしまう。

理愛を繋ぐ心の最後の一本の糸も、纏れたまま、たつたもう一度衝撃を与えればプツリと切れて落ちてしまいそう。

「時任雪哉はお前の本当のお兄さんではありません、残念だったなあ時任妹お。ギャハハハハッ、今までずっと勘違いして生きてたわけだあ！」

それでもまだ認めるわけにはいかない。

泣くな、ここで泣いたら、兄との関係にまで終止符を打つことになる。

理愛は耐える。あと一撃受けければ壊れてしまうギリギリまで耐え抜く。

「結晶が落ちてきたのは六年前……わたしは、六年以上前からここににいる！ だから——」

「理愛、それは公になっただけ。結晶はね、ずっと前からあつたん

だ。二千年前から、もうこの世界にあったんだよ。それを気づかずに生きてきた人類が馬鹿なだけ、アナタはずっと前からもう結晶の形をしたままだとか暗い穴の底で動けずに停止してただけ」

「そ、んな……」

六年前、この世界に結晶が降り注ぎ、人々は「ちから異能」を手に入れた。

それは違った。

結晶そのものは既にこの世界に現存していたのだ。それに気づかなかったただけに過ぎない。

「私達、「Ark」はずっと前から存在してる。ずっとずっと昔、遙か過去、結晶が超常を与えてくれたことなんてとくに気づいてる。隠すさ、隠すに決まってる。大きな力は隠すに限る。でもそれが出来なくなっただけ」

六年前、公になつた結晶落下。

あの事件を境に結晶を隠蔽する意味はなくなった。

そして世界に組み込むことで、異能の異常性を限りなく正常に近付けた。

そんな中で、

「種晶なら構わない。どんな力だって、才能だって、問題ないの。でもね「花晶」は別。あれはもう何かわからないの。私だってわからない。だって——」

理愛の首を掴み、力を込める。

片腕一本で理愛の身体を持ち上げる。虹子の短軀からは想像も付かない力だった。息が出来ない。酸素が頭に回らない。

人間じゃないなら、どうして人間らしいの。

理愛は自分が殺されそうになる中、そんなことを思ってしまった。心臓の鼓動が聞こえる。生きていると実感できる。

目は見通す。声は伝達する。耳は聴取する。心は感情を、描き、理愛はまだ、自分を「人間」だと信じている。

ここで認めては、「兄妹」はどうなってしまう。

人間ではないモノが「妹」を名乗れるのか。
そんなの、嫌だ。

虹子の手にも更に力が籠る。

無意識に涙を流し、呼吸することだけしか考えられないせいか口元から涎が漏れ続けていることにも気がつかない。目がゆっくりと上を向いていく。このまま白目を剥いてしまえば、それは生命活動の停止を意味する。死ぬ？ 死にたく、ない。

「理愛、安心して、私が理愛を救済^{すく}って上げる。何もできない理愛、可哀想な理愛、だから理愛の結晶は私の中に入るだけだよ」

「だが、ら、アナタ、も……」

ただひたすらに精一杯に声を出した。

理愛を執拗に追跡し、追い詰めてきたのは、虹子も「同じ」だったからだ。

ただの人間が、七色をも超える無限色の瞳を持つわけが無い。

数多の色を保有する虹子の瞳。それは名前通り。虹の子だった。

そして虹子もまた理愛と同じ「花晶」の子。

ヒトガタ
人形の結晶者。虹子もまた人間ではないのだ。

赤から水へ、黄から緑へ、黒から白へ、やがて金から銀へ。虹子は理愛を見つめる。理愛のように純粋な銀ではなく、不純物でも混じったような鈍い銀の瞳で理愛を見つめる。頬を赤く染めて、興奮し、紅潮したまま理愛の首を絞める、絞める、絞める。

世界が閉まる。ゆっくりと閉鎖されていく理愛の感覚。それでも、まだ、

「力を上手くコントロールできねえヤツは化物以下だよな、でもまあ、もうすぐ終わるわけだ。虹子、さつさと終わらせてくれよ。こんなクソ、自分の力を使うこともできやしねえ木偶だ。木偶が力を得る権利なんて手に入れてんじゃねえよ」

「ふざ、けるな……」

だから、理愛は声を上げる。

最期の最期まで抵抗し続ける。やっぱりおかしいんだろう。

虹子の言うように、彼女の瞳の色のようにコロコロと変わる感情。あれだけ怖かった、逃げ出したくて堪らなかったのに、絞殺される手前でまだ反感の意思を見せるなんて、どうかしてる。

「あれだけ、バケモノ呼ばわりして、おいて、この子、も、そんなでしよう、それなら、どうして、酷い、兄ね……アナタ——」

兄妹の定義、それは家族であること。

血など関係はなく、想いだけでどうとでもなる。

理愛は自分をずっと雪哉の妹であると思い続けてきた。それだけで兄妹なのだ。

だから、構わない。人間でなくとも、このことを雪哉が知って距離を置かれたとしても、家族が崩壊したとしても、理愛はこれからも永遠に雪哉の妹であると、言い切れる。

短い時間だったとしても、それでも理愛をあの大きな背中で虚栄と虚像だけで守護してくれた兄の為に理愛は妹であり続けたいのだ。だからこそ、雨弓のこれまで理愛に向けられた言葉がまるで虹子に向けられているように感じてならなかった。妹をバケモノ呼ばわりする兄。雪哉にそんなことを言われたと思うと、想像もしたくなかった。

「はあ？ 虹子もバケモノだぜ？ 人間じゃねえんだからな、結晶の塊とか怖すぎんだろ」

「そ、れで、も……この、子は、アナタの妹、なんでしょう？ わたしを侮辱、することは、アナタは、アナタの妹まで、侮辱してる、ことに、なる……のに——」

まるでそれは触れてはいけない雨弓の逆鱗に触れてしまったようだった。

銃口がいきなり理愛の額に押し当てられる。

そして雨弓はこれまでに無い怒りの形相を浮かべて

「お前に何がわかんよ？ 知ってもらおうとも思っちゃいねえ、けどよ、減らねえ口なら黙らせるぞ、ああ？」

そして理愛は何も言えなくなった。

引鉄が今にも引かれそうだった。だが無言のまま制止する虹子のお陰で、事無きを得た。いや、今まさに絞殺しようとしている相手を前にそんなこと、間違っているのかもしれないけれど。

「ともかくだ……虹子は別だ、本当の化物はな、テメエみてえなことを言うんだよ。能力が使えない、ド低脳のことを言うんだよ。理解してくれなんていわねえ、だから一つだけ知つとけ、虹子が一番なんだよ」

妹を鼻肩した姿だけは雪哉に似ているようにも思えた。

「だから化物は二人もいらねえんだよ。例えどれだけ種晶を超越た「本物」でもテメエは虹子の「偽物」でしかねえ。及ばねえの前に立つな、歩くな、ここから消えろ」

水平に構えられた銃口が理愛の眉間を狙っている。

この至近距離、理愛の首には虹子の手。

逃げることは出来ない。待っているのは確実な死。

死にたく、なかった。

「虹子、さつさとその胸の「核」でもぶっこ抜いて殺してしまえよ、見ててイライラするわ。後はオレが脳天ヘッドショットって消し炭にしてやる

「そういうわけで、理愛、短い間だったけど楽しかったよ」

そつと胸元に添えられた虹子の手は冷たかった。

そして理愛の意識は風前の灯にも等しい、消失の手前。

虹子と雨弓の会話も聞こえなかった。

音が、死んだ。

ああ、もう終わりだ。

終わってしまう。

それでも、最期に、最期に、

「た、」

消え入りそうな声で、理愛は言葉を紡ぐ。

頭の中はもう空っぽのようで、自分が何をしているのかさえわからない。

「た、す……」

どれだけ辛く、悲しい時でも、そう呟くだけで救われる……あの言葉だけを、口にしようとした。もうそれに縋ることしか理愛には出来ない。死に直面して尚、浮かぶのはたった一つ。

「なんだこいつ？ まだ生きてんのか？ マジでゾンビみてえなヤツだな。おい、虹子どけ、死骸にしてからゆっくり調べろや」

もう何も聞こえない。

もう何も感じないのに、

それなのに、今はただ、あの顔が見たい。声が、聞きたい。

「た、す……け、」

だから、もうその言葉だけが今の理愛を生かしていた。

雨弓は巨大な銃器を理愛に向けて構える。虹子は手を離す。全ての力を失った理愛はぐったりとなったまま、涙を流しながら、グチャグチャのまま、倒れていく。倒れる、倒れる、ゆっくり、そのまま地面に落ちて、

「た、す……け、て——」

消えていく感覚。失われる意識。

それでも最期まで、あの顔を、声を、忘れようとしなかった。

それが忘却するということは、本当の化物になってしまふような、そんな気がしたから。

「終わりだ、死ねよバケモノ……さっさとオレらの力になっちまいな」

引鉄が引かれ、撃鉄が落ち、凶弾が、

「何を、やっている？」

凶弾が射出される。だが、それは逸れる。理愛に直撃することなく、通り過ぎる。

「——がつ！」

雨弓は引鉄を引くと同時に声のした方へ。

そして声がした方を覗けば、雨弓に視界はブラックアウトした。いきなりの衝撃に、吹き飛んだ樹木と同じように雨弓は苦悶の声を上げながら回転しながら飛び跳ねた。

「あ、ああ……」

凶弾は理愛に当たることではなく、真横の樹木をまとめて吹き飛ばしただけだった。倒れこむ理愛は五体満足のまま存在している。

そして薄れゆく意識の中、大きな影が理愛を呑む。

でもその影はとても優しい。

枯れる程に流し尽くした筈の涙が再び生成される。どうして、この人は——と、理愛は驚愕し、そして感謝する。そこには強大な敵を前にして、震えることなく、臆すことなく立ち向かう正義がいた。そんなたった一人の正義は手を払い、怒号を放つ。

そうだ、この人を、待っていたのだ。

どれだけ勇気を抱いても、どこかに見え隠れする不安の塊がたった一人の存在で一瞬で消散する。

そして、その人はやはり立ち向かうのだ。

怨敵を、討ち滅ぼさんと誓いを立て、巻かれた左腕の包帯。そんな腕を前へ、翳し——

「お前たち、俺の妹に何してる——」

向けるは敵意の眼差し。

大切なものを傷つけた者に対する殺意。

だから、増大に膨れ上がるその想いは真っ直ぐ敵に向けられる。

「――殺すぞ」

その肥大する憎悪の中心に、時任雪哉の姿が見えた。

1 - 15 全能結晶の無能力者（6）

1 - 15 全能結晶の無能力者（6）

月下、闇黒の淵に顕現あらわれたのは、理愛のたった一人の正義の味方だった。

しかしその正義が抱くのは憎悪と敵意。

憎しみを胸に、理愛に背中を向け、雨弓と虹子を睨む。

そんな憎悪の塊は雪哉自身。

一切の能力ちからも持たず、異能も知らぬまま生きてきた男が、そんな能力者を前に卒倒することなく胸を張り、ただ立ち向かう。

「ふざけやがつてえ！ オレの、オレのお、オレのおお、ふざけやがつて、殺す殺すクロスウウウウウウウ！」

起き上がる雨弓は顔を押しえたまま、目を見開き、怒りに奮えていた。額からは血管が浮き上がり、口から煙でも出る程に荒れた息を吐き散らす。

そんな人の形をした獰猛な獣の顔面に雪哉は膝蹴りを浴びせてしまったのだ。

しかし雪哉にとってはそれがどれほど危険な存在であっても、強く跳び、顔面を破砕してやろうと思ひ膝蹴りした。

だって、それは理愛に殺しの武器を突き立てて、今にも撃ち抜かんとしていたから。大きな脅威が理愛に襲い掛かる前に早く、速く排除しようと思っただけに過ぎない。

だから、雪哉は戦うのだ。一度の敗北で、何が失われるというのだ。

威信がどれだけ損なわれたとて、そんな自尊心、今はいらない。

雨弓に苦汁を舐めさせられたことが何だ、どれだけ侮られ、罵られたとしても、それで何が失われるのだ。だから雪哉は大丈夫だった。理愛がいるのなら。

「来い、貴様の能力が如何なる存在であつたとしても、その力で、俺を止められるものか」

力は弱くとも、心は強く、虚栄を張れ、自分を偽れ。大きな嘘で心を強化しろ。

絶対なる力の前で、刹那的な終焉を迎えぬ為にも、今はただ生きる選択を。

「ふざけやがってえ、時任お……テメエ、死んだぞ」

黒き銀の銃身が不気味に煌き、真つ暗な銃口が向けられる。

まだだ、まだ早い。

内心は焦慮し、恐怖していた。

吊り上っているこの目蓋さえ憂慎していることを認めてしまえば、情けないモノへと変わり果ててしまうことだろう。だからこそ虚像を描く、言葉を用い、嘘を構築しろ。それしかできないのなら、それだけをすればいい。

「いいのか？ もうすぐ、俺の呼びつけた精鋭が駆け付けて来るぞ」

「アナタ、また同じ手を使ったの？」

雪哉が携帯電話をチラ付かせてみれば、虹子が忌々しげな顔をしては鋭い眼光を雪哉に放つ。だが、雪哉は答えを返すことはしない。前に一度、理愛を襲った虹子を警察に突き出したわけだが、どんな手を使ったのか咎めは無く、飄々と姿を見せていた。それを雪哉は知らない。それでも、こうして目の前にいるのなら、その時点でおかしいと気づくことは容易だ。

だから同じ手は通用しないのはわかっている。だって敵は未知なのだから。背後には「Ark」という見えない敵が聳え立つ。無尽蔵たる未知を前に法的な手段が有効とは思えない。

だから今はただ虹子でも雨弓でもどちらでもいい。とにかく挑発を繰り返し、標的を自分に向け、照準を変えさせればそれでいい。それだけで解決する。

「言っておくけど、ムリよ。来ないよ。私たちがどういう存在か、わかっていないの？」

「知っているさ暴行者、俺の妹に穢れを与える悪しき敵……俺の世界を狂わせる憎き敵。お前は敵だ。お前も敵だ」

虹子に人差し指を、雨弓にも人差し指を向け、そして指は突き立てたまま動じない。

「私が？ 暴行？ 違う、違うよ、何いってんの？ わけわかんない言葉並べ立てて、まるで病人。おもしろくない、理愛と違ってやつぱ全然おもしろくないよ、アンタ」

虹子は呆れ返るように、雪哉を見るだけで倦怠感でも生まれるのかだるそうに首を傾け、そのまま頭を掻いている。理愛から雪哉に対象が変われば一番いい。それが無理でも、時間が稼げるのならそれでもいい。だから、雪哉は不快感を露わにする虹子を見て、口撃を再開する。

「お前たち有能力者が、複数で能力を持たぬ者を蔑ろにする——ただの暴力じゃないか。傑作だ、これは傑作だよ。お前たちが能力を開発し、未来を開拓している「あの」素晴らしい「Ark」だとはな、いや、俺はまた事実に近い心底幸福なんだ。やっぱりお前たち力があるものは、おぞましいなって、再確認できたのだからな」

大袈裟に両手を広げ、高らかに笑う。

小馬鹿にしたようなそんな笑い声は月下兄妹の神経を逆撫でするには十分すぎた。

だが雪哉の言葉は本心だった。

表舞台では「能力」を開発し、それを世界の為だと……振興させている。

しかし今まさに裏を垣間見ている雪哉にとっては、「Ark」が世界を歪ませる闇そのものにしか思えない。たった一人、妹を殺そうとしたそんな連中が、未来を明るいう方へと導くとは信じられないけれどその行く末に興味は無かった。何が待っていても、世界が滅んでも、そんなことは重要ではない。大事なものは理愛の存在。雪哉は理愛が蔑まれていたところを見ていた。バケモノだと罵られているのも見ていた。それを見て、走り出し、そして武力を行使した。

人を怪物呼ばわりしただけでは飽き足らず、殺害しようとしたなんて、そんなこと許されるわけがない。それを平然と、躊躇うことも無く遂行しようとしたことが許せない。

協力はそこにはなく、一方的な虐殺を試みようとした。

月下兄妹は「Ark」の一員。

だからやはり戦うしかないのだ。世界をいくら大きく変えたとしても、能力が世界を新しいものに作り変えることができたとしても、それで誰かが死ぬのなら世界に挑まなくてはいけない。だから雪哉は逃げることを選ばない。

大きすぎる敵の前に、雪哉の存在はちっぽけだ。

足掻いても、届かない。

しかし結論が見えているから、それで諦めてしまえと——だれが決めた。

目先の暴力はまさにそう言っているようだった。

銃口から放たれる不可視は、雪哉の側らを簡単に吹き飛ばし、その力が雪哉に触れれば瞬く間に消えて無くなりそう……だからもう止める、諦めるだなんて、そんなことだから雪哉は前を見てしまうのだ。

「俺は、負けない——理愛だけ守る、それだけでいい！ お前に、俺が、殺せるか！」

「ふざけんなよ、生かしてやってんのわかんねえのか？ お前みてえなクソが吠えてんじゃねえよ。負け犬すぎて、笑えてくるわ」

「やめろ、俺のこの左腕の聖骸布を解けば……それはお前たちを敵と認識したことになるぞ」

「はあ？ 気色悪いんだよ！ 日本語喋れやゴラァ！」

顔を摩り、鼻血を拭い、銃口が水平にしたまま雪哉を狙う。

そうなのかもしれない。生かされているだけなのかもしれない。

力が有る者の同情か？ そんな情けはいらない。おぞましい力の前に、雪哉の成す術など齒が立たないのかもしれない。

それでも、

「させない。理愛だつて、殺させない……」

理愛の肩を、足に手を。

胸元に抱え、走り出す。

それは逃亡なのかもしれない。

あれだけ啖呵を切っておきながら、最後に選ばれたのは早々たる逃走。

覚悟が、その想いだけで戦えるのなら、最初からやっている。

否、やっていた。

それでも敵わない。

だから、生きる為の戦いだ。

敵に打ち勝つことが勝利ではない。敵の脅威を振り切るこそが本当の勝利。

無能力者らしい、勝利と言えよう。

「誰が逃がすかよ！」

射撃。

雪哉は右へ跳ぶ。手の中で理愛が震えている。一撃でも受けてしまえば兄妹諸共に肉塊に成り下がる。それでも、もう、今は何も考えず走ることしかできない。

戦いの知識が、生きる為の術が雪哉にはない。臆病であろうとも逃げるという選択肢を迷い無く選び抜くことしか今の雪哉には出来ない。

その迷いの無い動きが功を成したのか螺旋を描く目に見えぬ死の弾が雪哉がいた場所を呑み込んで決り砕いていた。すかさず走行し、後ろは絶対に見ない。無心で走る。背中がから空きになっても、的にしか見えなくても雪哉は走る。迷いだけ捨てて、疾走する。

「おいおい、運良過ぎんだろお！ 時任ちゃんよお！」

狙いを絞らずに射撃したことが命中しなかった理由だったのだらう。

雪哉が立っていた場所を夢中になって撃っただけだ。だから、雪哉の身体を呑み込むことなく弾が地面と樹木を食い潰しただけだ。

だから驚きながらも三連続と雨弓は暴力を放出する。水平に構えたままの大口径の巨大な銃から噴出した爆音。それでもマズルフラッシュさえ見せず、反動など一切無い不可思議な銃器。そんな幻想を銃の形に模した武器から放たれた見えぬ弾丸が雪哉の背中目掛けて撃ち出される。

「兄さん！」

けたたましい音が耳に響き、脅威が迫っていることを嫌でも判らされる。

「勝てない戦は、好きじゃないんだ——」

「そんなこと、言ってる場合じゃ！」

逃げることを非難しているわけではない。

ただ自分を置いて逃げると言いたいのに、それなのに言葉が続かない。

そして放たれた三発の弾丸が雪哉に襲い掛かる。

「こっちだ……」

雪哉が小さくそう呟く。

左へ曲がる。それと同時に大木が死角になり、雪哉を呑み込むことはなく巻き込まれるのは樹木だけだった。あまりの強運の前にさすがの雨弓も首を傾げることにしか出来なかった。

「なんだ、アイツ？ ふざけすぎだろ……後ろも見ずにバカの一つ覚えみてえに走り出したくせに、なんだかちつとも当たらねえ」

空のままの回転弾倉シリンダーを回しながら、撃ち放った弾丸が雪哉に直撃しないことに違和感を感じていた。そしてその横で虹子が眉を顰めながら考え込んでいた。

「虹子お、何してんだ？　　ったく、妹の方まで取り逃がしまったぜ」

「いや……もう、いいの」

「はあ？」

あれだけ固執していた虹子がやけに冷静にそんな物言いをするも

のだから雨弓は怪訝そうな顔で虹子を横目で見てしまった。そんな異質な視線を向けられているというのに、ただ考察を繰り返す虹子はそんな視線に気づかない。手を開いたり、閉じたりを繰り返し、雨弓の耳に届かないほどに小さな消え入る声で何かを呟いている。

「まさか、ね……」

なんて思い詰めたように、虹子の中で出たその答えは否定される。だから何を考えていたのなんて口にすることもなく、押し黙ることにした。

「兄貴、さつさと殺しにいくよ」

「わかってるって、逃がすかよ、オレの顔面に膝蹴りかましやがったアイツはぜってえコロス」

「それは単純に兄貴が悪い、油断しすぎ」

「うっせえ、お前はいいよな……チートだしな、羨ましいぜ」

「それでも、不便は不便よ。「触れれば壊れる」なんて、何がいいのさ……」

そんなやり取りをしながら、暴れ続けたせいで廃れ死んでいく山の中を月下兄妹は歩く。標的を発見し、逃亡を阻止する為にも。

1 - 16 全能結晶の無能力者（7）

1 - 16 全能結晶の無能力者（7）

なんとか追撃から逃れた雪哉と理愛だったが――

「あほ」

「すまない」

理愛の機嫌悪く雪哉に悪口を言う。

「なんで登っちゃったんですか、これじゃあ家に帰れないです」

「無我夢中だった、許せ」

理愛を担ぎ、走り出したのはいいが山を降るのではなく登ってしまっただ。

しかしそれも仕方がないことだ。敵の追撃を振り切るには登るしかなかった。ましてや破壊の弾丸が飛んでくる。まるで砲座のように鎮座する雨弓に接近し、回避しながら下山するなど不可能に近い。距離を離し、敵の命中精度を下げるには山を駆け登るしかなかった。しかしそれを何の考えも無しにした雪哉は本当に運がいいといえよう。とにかく逃げるといふ選択を一切の迷いもなく選び続けた結果が、こうして二人とも生きているということである。

「あほ、あほ……あほ」

「言い過ぎだろう」

こうして助かったんだ。

それなのに理愛の誹謗は止まらない。雪哉の腕の中で小さく丸まったまま、小動物のように震えたままの理愛。どんな罵詈雑言でも今は耐えよう。理愛はずっと耐えていたのだ。戦い続け、耐え抜いた。そんな小さな少女の勇気を評価し、雪哉はただ黙って理愛の言葉を受け止める。

「なんで、来たんですか――」

「妹の危機を兄が救っては、いけないのか？」

今まさに殺されるかもしれないなんて、それだけは阻止しなくては いけなかった。

だから雪哉は雨弓に一撃を与えたのだ。あれほど綺麗に決まってしまったのだけはさすがの雪哉も驚きを隠せなかったのだけれども。
「わたし、なんて……助かって、」
「やめろ」

自虐を紡ぐ唇にそつと人差し指。

そうやって心を自傷しても、何かが失われていくだけに過ぎない。雪哉はそんなことをする理愛を叱り付けるように黙らせる。

それでも助かったとしても、良い事ばかりではない。その先の未来に待ち受けるは試練。そう、雪哉は知っていた――

「だってわたし、わたしは……にんげんじゃ、ない、から……」

理愛は人ではなく、結晶。

人を模った偽者。

だから、なんだと、言うのだ。

雪哉はあまりにくだらなさすぎて、それ以上理愛が喋るのを止めたくて仕方がなかった。

「それがどうした」

「それって……そんな言い方！」

雪哉の冷たい言葉に理愛は憤りを感じていた。

それでも理愛が怒っていても雪哉からすれば瑣末でしかない。その事実は理愛の世界では大事なこともあるかもしれない。しかし雪哉にとっては些々たる問題でしかない。むしろそれが問題とさえ感じなかった。だからそんなことで怒る理愛を見て雪哉は首を傾けてしまふのだ。そしてそんな怒りを払拭する為にも雪哉は口を開く。

「俺はお前を守る、そう誓っている。理愛を守る。それだけだ。人間ではない？ 結晶？ そうか、それはよかったな。だが、お前はこうしてここにいて。それだけで、いいんだ」

「わたしの目も髪だって、全部、全部結晶なんですよ？ 気持ち悪

「いじゃないですか……それなのに、わたし、兄さんに守られたって、
意味がないと、そう思うか？　だが、それはお前の結論だ。俺じやない。俺の結末はお前じゃ決められない。それだけは、俺が決める」

それだけはたとえ妹であろうとも、家族であつたとしても譲れない想いだつた。

守護することが、雪哉の使命。

勝手に決め付けた自分の信念。

何も無い、無能な存在であつたとしても、それだけは忘れてはいけない。それだけを忘れぬように生きてきた。それを遂げたかどうかと尋ねられれば、きつと完遂できず、何度も何度も失敗してきたのかもしれない。だからこそ、今、この瞬間、生きてきた時間の中で最上級の危機を前に雪哉は理愛を守り抜かねばならない。

だからこそこれまでだつて自分を偽つて来たのだ。何も無い分際で身の程を弁えることなく、生きて来たのだ。今だつてしっかりと虚偽を完全武装している。竜を屠る剣を持たず、ふざけた名前の組織など何処にもいない。なのに、雪哉は思い込んでいる。自分は狙われている。自分にはとてつもない力が隠されている。そうやって自分を創造りながら、この状況下ですら、困惑することなく理愛を抱きしめる。

「だから勝手に守られている、お前が嫌でも、お前は諦めていても、俺まで一緒に巻き込むな」

ギュッと抱きしめるその腕が強くなる。

この手を離したら、もう二度と掴めない。そんな気がしたから。山頂を目指しても意味はない。山を降りなければ未来は潰える。

今はただ理愛と口論する気はなかった、生きる為だけに意識はそこに向けられている。

「兄さんは……わたしなんて、何も、ないのに」
何もない。

何もないなら、雪哉はここにはこない。

価値の無いものに意味はないのか？ それを決めるのは誰か？

「黙って、俺の手の中でおっかなびっくり怯えている——帰還^{かえ}るぞ」
今は何を言ってもきつと理愛は納得しない。

だからこれ以上何も言わない。不毛な会話こそ意味がない。恐怖したままだた価値を見出す無様な妹の姿を見たくない。

抱いたまま、山を降りる。

このまま何事も無く——なんてことはきつとないだろう。

敵と遭遇することなく、家に無事帰れたらなんて夢物語もいいところだ。雪哉も理愛も一言も喋らずに降りる。手の中に理愛がいるのに、こんなにも近いのに、今はとてつもなく遠く、届かない。

人ではなく、別物であるという事実。

雪哉にはそれさえも気にはならないというのに、理愛は絶望し、恐怖している。

その感覚が雪哉に理解できるはずもない。人間ではない、化物に近いそんな存在だったという事実は理愛を狂わせるには十分すぎる。それでも発狂せず、押し黙り、雪哉の手の中で震えているだけなんて、理愛の精神力の耐久性は計り知れないモノがある。身体の中ではなく、身体全体が結晶だなんて、もうその時点で人間としては終焉している。

なのに、こんなにも人肌を感じる。温かく、鼓動さえ聞こえてきそうなの、そんな身体を結晶だと雪哉は信じられなかった。小さく震え、怯え、恐怖するというその感情はどこから来た？ 心は、身体は……全てが透明の石ころだとするのなら、雪哉の手の中にあるこれは、何だ？ くだらない、どれだけ自問したところで答えは出ない。今、自分の中にあるこの結晶が生きているからなんだ、声を出し、感情を見せているのが人間ではなく結晶だというのなら、それがどうしたとしか言えない。

雪哉の抱きしめるそれは、雪哉の妹、雪哉の家族、雪哉のたった一つの救いの象徴。それを手放すわけにはいかない。どのような存

在であろうとも、そんなもの知らない。ただ理愛が消えて無くなるのだけは御免だった。

「よお」

雪哉の足が止まり、そこに立つ雨弓が視界に入る。

全身が強張り、嫌な汗が背中を伝う。どれだけ虚偽で塗り固めていても、力有る者を前にすれば自覚の無いまま後退してしまう。雪哉はそつと理愛を下ろす。

「逃げる」

「そんな……！」

「俺も逃げる、必ずな」

「おいおい、この前みたいに妹の前でカッコつけようぜ！ そんなんじゃ、ダセえまんま終わっちゃうぜ？」

これ以上の逃走を阻止するように大砲のような拳銃を見せ付ける。格好の良い悪いの問題ではない。生きるか死ぬかの問題だろう。

「じゃあさつさとオレの「ARK」の前で、終わっちゃうまえよ？」

「……「ARK」だと？」

それは組織の名ではないのか。

雨弓は銃を構えたままそんなことを言う。

「お前、「ARK」知らねえのか？」

雪哉がそれを知るわけがなかった。能力を持つ者が装備することで初めて意味が生まれる装置を無能力の人間が持っているわけがないのだから。

「ARK」——それは「Artifact・Radical・Knows」の頭文字を取った略称である。

結晶が力を与える、そんなことは誰でも知っている。しかし、その能力を更に格段に強化増強を可能とした装置がある。それが「ARK」——雨弓の持つその銃も「ARK」である。

当然、能力開発の研究に携わる「Ark」が開発した代物だ。そ

してそれは同じ聖櫃の名を冠し、その兵器はやがて命を刈り取る。

能力を行使し、暴力や犯罪に手を染める能力者を鎮圧する為に開発したとされている。よって「Ark」のみが携帯を許されている。この装備の有無だけで勝敗が決まるほどである。現に雨弓の力は通常の能力者の力を超越している。マツチ棒から火を出す程度、少し早く走れたり、旋風を巻き起こす程度しか見たことがなかった雪哉にとって、暴風のような狂気の見せ付けられてはその装備がおぞましいものであることを嫌でも理解させられる。

だが、「ARK」の知識など雪哉には必要はないだろう。知っていても知らなくても状況が変わるわけがない。そう、能力を持たぬ者にその装備自体が意味を成さない。

「引鉄を引くだけで行われる暴力……能力者は本当に、恐ろしいな」
「それだけわかってんなら抵抗すんなよ、な？ 利口になりや、もうちよつとだけ長生きできるぞ？」

力は脅威。絶対なる暴力の前で、無力は何も出来ない。

そんなこと、始まる前から理解していた。それでも諦めきれないものがある、だから抵抗はやめない。悪意から逃れ、生き抜くには戦うしかないと再三呟いてきた。

「ムカツクなお前、そこまでわかっててなんで諦めねえ？」

「お前みたいに、力で捻じ伏せるというやり方が気に入らないだけだ」

「正義の味方気取りっすかあ？ カッコいいねえ、カッコよすぎだわ、お前」

そして今度こそ、銃口が雪哉に額へ向けられた。

「種晶^{シード}は確かに花晶^{レムリア}に劣っているのかもしれない。それでも、強けりや問題なえ、何にも怖くねえ、お前の妹がはつきり教えてくれたわ。結局、何の力もないなら、普通にぶつ殺せれるってなあ！」

「理愛は殺させない、俺だって……お前みたいな奴に殺されるわけには、いかない」

「おお、いいぜえ、いいぜその威勢、それだけは認めてやんよ！

テメエみたいなおもしろいのは初めてだわ、何も無いくせに、何もできねえくせに、御託ばっか並べておもしろおかしく格好だけ一丁前、だから最初にテメエをぶっ殺してやんよ！」

雨弓の敵意が全て雪哉に注がれる。これでいい、これがいいのだ。雪哉は真っ直ぐ雨弓に視線を、雨弓は堂々と銃口を雪哉へ。

「だめ、ダメエ！ 兄さん、逃げて！」

「お前が逃げろ、逃げてくれ……理愛、そうじゃないと、俺の誓いは果たされない」

「そんなの、兄さんの価値観の押し付けじゃないですか！ わたしは嫌です、兄さんも——」

「理愛っ！」

その叫びは、まるで全てを失った六年前に似た慟哭だった。聞き分けの無い子供を叱るように、そして懇願するように、大切な人の名を叫ぶ。

「頼む」

「……は、い」

そしてその願いが届き、雪哉は安堵する。そして、

「出て来い……理愛は殺させないと、言っただけだ」

その言葉に、木の影から現れた虹子。

「バレた？」

「バレるも何も、さっきまで雨弓といただろう……急に消えたなんておかしい」

そう指摘すると「そりゃそうだ」と虹子は笑う。そして笑みは消え、雨弓ほどに奮えてはいないが、向けられた敵意は雨弓のものと同等、いやそれ以上のものだった。

「安心して、理愛……こいつ殺したらすぐに行くからね、私の邪魔を、邪魔ばかりする、異物。死んでよ、それで私はやっと落ち着いて理愛の相手が出る」

虹子が卑下た視線を浮かべ、理愛を見る。だが理愛の前に立ち、虹子の視界には理愛が映らなくなる。そうやって邪魔ばかりする雪

哉を生かすことなど虹子は出来ない。確殺することだけを決意し、虹子は笑う。そして雨弓は銃撃を放つ。

理愛は走る。最後まで雪哉を心配し、走る。雪哉も面と向かって勝負する気など毛頭無い。有力と無力では出来ることなど限られている。

「さて、やつとこさネタバレだ。オレの能力教えてやるよ」

教えてくれなくて結構。雪哉は構える。その構えは戦う為ではなく、逃げる為。まずはどれだけ時間が稼げるかだ。理愛を出来るだけ遠くへ、遠くへ逃がし、十分時間を稼げたならば自分も逃げる。どこかで破綻するのは目に見えているがやるしかない。やらないまま終わってしまうのだけは絶対に避けなければならない。

雨弓は銃口を地面へ、そして手を軽く振り払う。無風だった世界に突風が舞い込む。吹き飛ばされそうになりながらも、雪哉は地に足が埋没するほどに強く踏み締める。風が強すぎて前がよく見えな
い。

「しょぼい能力だろう？ オレのは「風」しか起こせない。風を使うことしか出来ないんだ」

かなり離れていたはずの距離が瞬きを一度しただけで埋まっていた。

そして気がついた頃には遅すぎた。

右拳が雪哉の頬に打ち込まれる。衝撃と共に雪哉の身体は地面を転がる。何が、起こった？ 地面の上を転がり、そして止まった時には雨弓は雪哉を見下したまま、

「これがオレの種晶ちからの能力、ゲイルヘイル呼応風塵だ」

人々が手にした異能には名が生まれる。

それは能力を手にした瞬間に、聞かされてもいないのに無自覚のままに理解できるのだ。

そしてその異能が人を更に上の段階へと進化させる。

雨弓の能力、ゲイルヘイル呼応風塵——それはただ風を操る力。風だけなのだ。それでも、その自然現象を思うがままに操ることが出来る雨弓。そ

の力が序列という、数値化された評価の中でも上から七番目の座につく所以。

瞬間的に間合いを詰めたのも、自らの風でその身を飛ばしたからだ。自分自身をまるで弾丸のようにして、跳躍したのだ。そしてその速度のまま拳で殴りつけられれば、意識の一つや二つ根こそぎ刈り取ることも造作無い。

それでも、

「風、などで、俺を、俺を……！」

意識は途絶えず、ただ堪える。

「親切にしてやったんだぜ？ テメエ、オレの顔面蹴り飛ばしたろ？ だから一発ブン殴ってやったんだぜ？」

そして再び腰元のベルトに刺さっていた巨大拳銃を手にする。

「折角、格好つけたんだ一瞬で終わったら可哀想だと思つてよ」

「そりゃありがたい、ことだな……感謝する」

「余裕ぶつこいてんじゃねえよ」

余裕など持ち合わせていない。

顔面を思いっきり鈍器で殴られたようなものだ、今すぐに泣き出してしまいたいぐらいだった。それでもそんなことは出来ない。理愛を守りきるまでは、どんな逆境も耐え切ると覚悟している。ここで終わってしまったては、これまで受けた屈辱に耐えた理愛に申し訳がない。

「兄貴」

「虹子か」

倒れたままの雪哉を今まさに撃たんとする雨弓に虹子の声。

その声が引鉄にかかった指を離れた。雪哉は雨弓から虹子に視線を移す。そこにはまるで人ではない、何か別のモノを見る不快感だけを象った異質な視線を見せる虹子がいた。

「さつさと死になさいよ」

「五月蠅い、理愛を貶めるお前に殺されてたまるか」

そんな強気な雪哉の右手の甲を思いつき踏み潰す。

雪哉は目を見開き、声にならない声で悲鳴を上げた。その顔を見て、声を聞き、虹子は屈託の無い笑みを浮かべる。

「そつ、その顔が見たかった」

「サディストが……」

「アンタが勝手に付ける私の評価なんてどうでもいいわ、でもいいの？ 私はアンタを殺したら理愛の所へ行くわよ。必ず行くわ。いいの？ 私を止めないとダメなんじゃないの？」

焚きつけるような虹子の言葉は明らかに雪哉の怒りを煽っていた。そんな安い挑発に雪哉は即座に乗りかかる。恐怖など消え失せ、雨弓に受けた傷の痛みも感じない。そして、すかさず立ち上がり雨弓がすぐ横にいるのさえも忘れて雪哉は自分よりも遥かに小さな少女に襲い掛かった。

「ふざけ、やがって——！」

「来なよ、無能力者。とつとと私を倒してみなよ」

言われなくとも、と雪哉は右腕に全身全霊を籠めて殴り掛かる。どれだけ無能力の存在であったとしても、そんなことで決めさせてはいけない。何もかもが敵の思い通りに動くのならば、足掻かなくては、戦い続けなくてはいけない。だから、雪哉は拳を突き出す。力も無く、何も感じない、ただの拳で……有能なら結晶の力を持つ怪物に挑む。

「なんだ、これは……？」

それでも、

「ふふつ、威勢がいいのね。そこだけは理愛とそっくり」

雪哉の放った拳は、

「でも、いいのはそれだけ。理愛と同じ。性格は——アンタの方が腐り切ってるけどね」

まるで薄い一枚の膜に守られているように、虹子に届くことはなかった。

見えない壁を打ち付けたように。

衝撃は確かにある。何かに触れている感覚も、ある。

虹子の顔面に拳は触れているようにさえ見える。それでもまるでテレビ画面に映し出される虹子の顔を殴りつけたように変わらない。そして虹子は笑うことを止めず、雪哉を侮り続ける。

「アンタの威勢の良さは認めてあげる。覚悟も、信念も、勇気だって、全部認めてあげる。無能な屑が存外に扱われて尚、諦めず立ち向かうその姿勢だつて評価してあげる——」

虹子が雪哉の左肩に触れ、そして悪魔の微笑みを。

やがて七色の輝きを孕む瞳の光が雪哉を呑み込む。

「だけど——虹壁は全てを遠ざける」

触れれば遠くへ消失する唯一無二の絶対力。

種晶を超える花晶が持つ力。虹子の花晶に宿る力。

それに触れたものは壊れるしかない。身体がバラバラになったようなそんな一撃が雪哉を完全に討ち滅ぼす。数十メートルは吹き飛ばされたろうか。木々をまとめて薙ぎ倒し、砂煙を巻き上げたまま、何もかもが壊れて消える。雪哉の身体は樹の海へと沈んでいく。そして闇の中へと消えて、もう見えなくなる。

「あっちゃあ……虹子お、やりすぎだろ。いくらなんでもただの一般^{シンビ}人だぜ？」

それは種でなく花を司る「本物」の力。

その力が与える威力は計測など出来ない。ましてや何の力を持たない人間が耐え切れるレヴェルの話ではない。あまりの惨状に雨弓も顔を蹴り飛ばした相手であつても同情せざるを得ない。

「触れれば、壊れる……それが私の『花晶』——仕方ないでしょ、ムカツくんだもん。あの喋り方とか、頭の悪さ、殺したくなっちゃう」

ただ望めば破壊を可能とする、そんな単純^{シンプル}で雪哉は消えてしまった。

能力そのものも説明など要らない程に簡単な力。意識すれば触れるだけで壊せる力。「壊す」とは、消えて無くならせることだ。吹き飛ばし、そのまま止まるまで消え続ける。初めて理愛に使用した

際はフェンスまでの短い距離を飛ばしただけで、それは力の殆どを制約し、息を吐くようなその程度の力の分配で使用しただけだから、理愛の身体が浮いただけに過ぎない。だからそうやって虹子の感覚でその「破壊」の度合いを調整することは出来る。しかし虹子の怒りを買った雪哉には慈悲も無く一切の優しさも見せずに能力の全開を使い、雪哉を滅ぼした。

「まあ、成仏したか……さすがに」

遺体を捜すのも億劫になる。完全に能力を行使すれば塵さえ残らない。そんな凄絶さだけを形にした最高の能力。触れればということは触れたとしても発生する危険。触らぬ神に祟りが無いように雨弓は虹子の逆鱗に触れる真似は絶対にしない。しかし執拗なまでに虹子の機嫌を損ね続けた結果だ。自業自得だろう。

だが、

「はあ……はあ……が、ふっ、ごはあ……」

樹に凭れ、血を吐き、額から血を流し、壊れた右腕を庇いながら屍の如き、生気を失った状態で生きていたのだ。神に等しい花晶の力をまともに受けて、生還しているのだ。虹子の表情がまるで鬼神のような酷く恐ろしい形相に変わったのを雨弓は見てしまった。生きていたのなら、どうしてそのまま大人しくしていないのか、命が惜しくないのか、異常すぎる行動を取り続ける雪哉の生き方を雨弓は理解できない。

「り、あ……いかせ」

「黙れよ」

虹子の口調が変わった。

そして思いつきり真横に生えていた大木を殴りつければ触れた部分から真上が綺麗に無くなった。

「黙つてろよ、お願いだからあゝなああああ理愛のとこ
ろへ行かせろってえええええええええええ」

ここまで怒り狂う虹子を見たのは雨弓も初めてだった。

絶望的な力の差を見せ付けられて尚、立ち上がり、致命傷を負つ

たとて同じ行動を狂ったように繰り返す異常者を前に虹子が耐えられなくなったのだろうか。

時任雪哉に能力は無い。

全能なる結晶が舞う世界で、一片の能力も見せず、得ることもなく、覚醒さくせいめることもなく、それでも同じ行動を取り、同じ選択肢せつしだけを掬い取って来た。それだけが気に入らないのだ。何も出来ないくせに、何も達成できない、失敗しかない。わかっているくせに、それを認めようとしないその生き方が。

雪哉は、逃げなかった。

逃げられないと、言うべきだったろう。

身体の外も内も破滅している雪哉自身もどうして生きているのかさえ不思議に思っていた。それでも理愛を守るという一心が雪哉をこの世界に繋ぎ止めている。虹子が狂ったように叫びながら、動きながら、迫って来る迫って来る。迫って――

「死ねえって、死ねって、死ね死ね死ね、私の力見て、諦めればよかったんだよ！ 黙って寝てればよかったんだよお！」

七色の光を纏いながら虹子が走る。瞳から漏れるような七光が落ちる。ああ、終わってしまう。一撃だけで雪哉はわからされた。やはり、能力というのは凄まじい。

人間なんてとうに先へ進んでいたのだと、自分がいかにちっぽけで、矮小な微々たる存在だったなんてわかってたはずだったけれども――

虹子の手が伸びる。その小さな手が、生者を死の深淵に誘う死神の手にしか見えなかった。終わって、しまうのか、

「守りたい……わたしだって――」

ドスンと、雪哉の衰弱した身体に押し出す。

もう立つこともやつとだった雪哉はその斥力を押し返す余力など残っているはずもなく。

そして、その力の根源が、それは、雪哉の、

「理、愛？」

「生きて、兄さん、わたしは兄さんの為だったら……バケモノでもなんでも、いい……だから——」

時間の流れが極端に遅くなったのを感じた。

その時間の中で雪哉と理愛が声を上げた。

逃げたはずの理愛が目の前に。そして雪哉の前に、虹子が走り、手を伸ばし、その腕は、

「やめろ、」

止まらない。

「やめ、ろ、」

その伸ばした手が止まることはなかった。

死神が雪哉ではなく、理愛に触れた。そして、

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

その咆哮が、雪哉の大切なものを奪い去ったことを確信させた。

雪哉を庇い、盾になり、吹き飛び、雪哉の身体に触れて、

「ごめんなさい、兄さん」

理愛は笑う。

破滅の力を受け、消散する身体。それは白銀に煌きながら。

そんな人の死に方では、なかった。

まるで結晶が罫割れ、砕け散り、霧消するような……終わりの瞬間。

「ただ、わたし、わたしね——」

消えてしまうのに、兄が無事だと知ってそれに涙する理愛を見て雪哉は何も言えなかった。消える。消える。消えてしまう。理愛が、雪哉の世界を支える最後の柱が。

「わたし、兄さんの妹で、よかった」

そして、理愛は、消えて無くなってしまった。

雪哉はガクリと膝を落とす。

あつという間だった。秒単位で雪哉の構築し、守り続けていた世界が終焉を迎えてしまった。もう何もできない。何もできるはずがない。終わってしまったのだ。この物語が、終わりを迎えた。

理愛の、妹の喪失が意味するもの、それは死だ。

理愛が死ねば雪哉も死ぬ。

そう病室で涙した理愛に約束した。約束とは絶対。誓いを破ることとは許されない。

だから、死のう。

もう、死のう。死んで楽に、理愛の元へ。独りぼちにさせてはいけない。きつとあの世なんて暗くて寒くて狭くて悲しい場所だと、雪哉は思っているから。だからすぐに追いかけないと、早急に自害して、さっさと理愛の背中を追いかけよう。

「ははっ、なんか理愛勝手に死んじゃった。手間が省けてよかったけどね、花晶これも手に入ったわけだし」

そんな雪哉の前で虹子は大声を上げて笑っていた。

手には巨大な結晶。銀色の結晶を手し、発狂している。その銀の結晶は理愛の身体に見えた花の名の結晶。それは理愛だ。理愛を、下衆が掴んで喚いている。

「すまない、理愛」

すぐに自殺して、すぐに昇天して、すぐに抱擁してやりたかった。でも、少し待ってくれと、雪哉は立つ。

「俺もすぐに逝く、だから少し待て、天国でも地獄でも、お前が待つ場所なら、何処へだって迎えに往ける」

眩く。

それはここにはいない理愛に向けられた言葉。

雪哉が理愛を守りたいように、理愛だって雪哉を守りたい。

同じ行動原理を持ち生きていたのだ。理愛が雪哉を置いて逃げ切るわけがない。わかつていたはずだ。しかし自分の価値観を押し付けすぎたのだろう。理愛は納得していなかったのだ。逃げた振りをしていただけ。雪哉に危機が迫ればすぐにでも盾の代わりになれたのだ。

能力があつたのかもしれない。この状況を打破する屈強な異能があつたはずだ。しかし理愛は使えなかった。光が溢れただけで、その銀の光は何もしてはくれなかった。だから理愛は諦めた。しかし戦うことを諦めたわけではなかった。雪哉を守り抜くと、それだけを諦めなければ戦えるから。だから、死ぬことなど怖くなかった。大切な人に見守られながら、逝くのだから。

しかしこの兄妹、本当に愚かである。どちらか欠ければ酷く脆いことを忘れている。雪哉は死ぬ。すぐに死ぬ。理愛を追って死ぬだろう。だけど、まだ、死ねない。死ねないのだ。

「理愛を、還せ」

理愛の花晶を持つ虹子を前に、ここで終わってしまったては理愛を葬れない。あれは理愛だ。あの結晶も理愛だ。理愛のモノは全て取り返す。全て終わって初めて死ぬ。だから、

右肩は上がらず、身体も動かない。それなのにまだ戦える。

どうして？

奪われたモノを奪い返さなければいけないから。

「妹もだけどメエも十分ゾンビすぎんぞ、この変態兄妹がよお！」

「兄貴い！」

銃口を向ける雨弓に怒号を上げる。

「こいつは私が殺すんだから、そこで見ててよお、ねえ、こんなイカレ野郎、もう一回終わらせてやるよ、大好きな理愛のところにイカせてあげるんだからさあ！」

三日月が唇に架かる。悪魔のようなおぞましい視線を雪哉に浴びせ、命を略奪せんと虹色の終極^{おわり}が世界を色彩^{いろど}る。接触による終結の壁が創造された。

そんな絶望を前に、雪哉はやけに落ち着いていた。

心は冷たく、視界は鮮明に。

左腕を握り締めた。包帯を巻いたままの「設定」の腕。その腕は何が掴める？ 何が掴めた？

「そうか、そうだった……な——」

答えは出た。

もう失うモノがない。失ってしまったのだから。

失って初めて理解してしまった。

目蓋を閉じ、害悪の力を前に焦ることもなく、驚くこともなく、心を落ち着かせていく。

そして、見開けば広がる世界。

もうこの世界に未練もない。未練も恐怖も負そのものはもうこの世界に落ちていない。今あるのは信念を貫けず、覚悟など意味なく、理愛が死んでしまったという失望だけだった。もうとつくに諦めている。生きることとは、もう止めた。

それでも、復讐する。

そう、これは復讐だ。最愛を強奪した、最悪を穿つ為の最期の戦いだ。

「はは、ははあ！ 何、なにに？ 突進しちゃう？ そんなことしちゃう！ 意味ないって、ぜーんぜんっ、意味ないってええええええええええええ！」

雪哉の暴拳に笑いが止まらない。

考え無しに、策も無く、ただ走行する雪哉がおかしくて堪らない。触れれば壊れて、消えて無くなる無敵と知って、立ち向かうなんてただの死にたがり。

そうだろう、そうなんだろう、あれだけ溺愛していた妹が死んだのだ。勝手にぶつかって消えて死んでしまえばいい。だから最期ぐらい付き合ってやろうと、虹子は手を広げる。まるでやって来る子を抱き締めてやろうと期待する母のように、雪哉の憎悪も悔恨も何もかもを受け止めてやろうとする。その抱擁は死しか与えない。触れれば破滅するだけの災厄。

そして、雪哉は素人丸出しの大振りの左拳を振るう。

もう攻撃する為に使える部位はこれしかない。だからその左腕を虹子へ。

その最初で最後の一撃、虹色の光に向けられた雪哉の意思、その意思は、

「えっ？」

虹色の光を突き破る。膜のような光が破れ裂けていく。

虹子の絶対の自信、完璧なまでの弱点などない能力。無敵、最強、それが、たった一人の無能力者の拳に破綻させられる。ただ純粹に左の拳を虹子の顔面に向けて撃っただけだった。

それが、触れれば終わる筈の結末を覆す。そう、結末が一撃で覆されたのだ。

炸裂する雪哉の左拳は虹子の顔面に叩き込まれ、小さな身体が放物線を描き、虚空を舞った。そして何が起こったのかもわからぬまま、地面にその矮躯が埋もれる程に強く叩き付けられる。

「なんだ、なにを、なにを、した……？」

能力は確かに発動していた筈だ。

虹色の光が竜巻を生み出し、その防壁が虹子の全てを守護していた。触れれば消失を与える破滅の盾が消えた。もうボロボロになった壊れた人形に成り下がっていた筈の雪哉がそこにいない。そこにいるのは全て失い、終わりの果てに立つ勇敢なる者。これで最期と決め、ただ理愛の結晶を取り戻そうと最期の職務を全うする兄の姿

しかない。

そして、左腕を伸ばす。破れて汚れきったズタズタの包帯。ずっと縛り続け、虚偽を包み隠していた白き布。それが解かれようというのだ。

そして、終にそれは外される。

虹子の表情が愕然する。雨弓もまた驚愕したまま動けなくなる。

「言った筈だ、この聖骸布を外した時、それはお前を敵と認識したということだと——」

外された包帯。聖なる骸を包む布が解け、封印が解除される。それは「設定」だった筈だ。

これまでもただふざけて複数用意した御伽噺のほんの一部。本の中の世界。幻想でしかなかった。それは妄言の筈だった。これも妄想だった筈だ。

違う。

もしそれならば、雪哉の左腕は肩から指先にかけてどうして白き銀で構成されているのだ。その輝きが嘘ならば、雪哉の手は虹子の壁を越えることなど、出来なかったはずだから。

天に掲げた左腕、そして右腕はその結晶の左腕の肘に置かれ、長い前髪の合間から見えた鋭い視線。今、ここに……全能結晶に挑む、無能力者が生まれた——

「贖罪^{あがな}え、罪を背負い、ただ罰を受けろ」

——最期の戦いが始まる。

1 - 17 全能結晶の無能力者（8）

1 - 17 全能結晶の無能力者（8）

全能たる結晶に、今まさに挑もうとする無能力者がいた。

そんな無能力者の話をしたい。

少し逸れるが話をしたい。

それをしなければ先へは進めない。

それは時任雪哉という無能力者が「失い」、そして「得る」までの出来事だ。

時任理愛は、本当の「妹」ではない。

時任理愛は、雪哉とは血の繋がらない義妹である。

雪哉が九歳の頃だったろうか。

理愛は突然、姿を現した。

雪哉の父と母に連れられてやって来た。新しい家族、妹になる。

雪哉は兄になるなんて――

最初、理愛を見て雪哉が感じたのは違和感だった。

唐突に現れ、家族だといきなりやって来た。どうして理愛が「時任」の姓を手に入れることが出来たのか、それは今となってはわからぬままだ。

事実を知る両親はもう、いないのだから。

そんな雪哉の母の背中に隠れる理愛の姿は酷く怯え、震えたまま、雪哉の顔を見ることなく、俯いたまま恐怖していた。

そうやって畏怖したままの理愛を見て、雪哉が最初に口にした言葉は、理愛を傷つけたことに変わりは無かった。

「へんないろのかみだ」

変質するその銀の髪と瞳の色は、子供の無垢で純粹なままの心には、不気味に思えて仕方がなかったのだ。だから雪哉の第一声は鋭利な刃で切り裂くかの如く、理愛の心を傷つけた。

それはいきなり自分の妹だと、家族だと、いきなり自分の世界が変わってしまったことに対する反抗だったのかもしれない。

そう、雪哉は理愛を妹と、家族だと、認めていなかったのだ。

だが、いつか知るのだろう。

雪哉は理愛の本当の正体を、知るのだろう。

だから、それを知ってしまった雪哉はもう理愛を拒めない。

だから――

その銀の輝きを孕む左腕を、雪哉は知ってしまった。

あの理愛が人で無い、別者ということも知ってしまった。

だから物語が始まった時から、雪哉は知ることとなる。

あの六年前の地獄の日。

全てが書き換えられたあの日。

雪哉の世界を狂わせたあの日。

あの日、夢のような日。悪夢の日。

目を覚ませば雪の上。

炎上し、燃え盛る大地。そして結晶が降り注ぐ。

空を飛ぶ鉄塊が墮落し、雪哉の両親は炎に呑み込まれていた。だ

から雪哉は家族に「さよなら」を言う時間さえなかった。両親は呆気無く焼死し、雪哉は放り出されていた。

気がつけば額から血を流し、顔を押さえていた。

いや、押さえようとした。けれどそれが出来なかった。

雪哉の左腕は肩から根こそぎ持っていかれたのだから。

鋼鉄に挟まれたのか、それとも飛び跳ねた鉄板が刃のように削ぎ落としたのか、原因はいくらでも考えられる。ともかく、雪哉の左腕は切断されていた。十歳になったばかりの幼い少年に与えられた試練は、あまりにも過酷すぎた。

痛みは、無かった。

神経ごと、綺麗に切り落とされたからか、今となってはわからな
いが、ともかく思ったよりも不思議な感覚だった。自分の腕が無く
なった——その程度しか考えられなかった。

けれど自分の腕が無くなっていることよりも、大好きだった父と
母が焼き屑になっていることの方がずっと辛かった。

「ああ、……ああ」

どれだけ叫び続けたことだろう。

その叫びで何か変えられるわけもなく、泣いたところで何も返還
されない。

地を焼き、雪のように白く染める結晶の下で、雪哉は大の字にな
って倒れる。

消えた腕、喪われた家族。壊れた世界。冷たくなっていく身体、
幼いながらももうここで終わってしまうのだという絶望だけが雪哉
に押し掛かる。

手を伸ばしても星に手が届かないように、最初から叶わないこと
だつてある。

死んだ人間は生き返らない。この惨状を無かったことになんてで
きない。もう両親は死んでしまった。左腕は無くなってしまうた。

何もかも、全てが消えて無くなった。

何か——忘れてる——

仰向けのまま、動けない雪哉は消えることのない炎上した世界を見詰める。

確かにその炎は全てを焼き尽くさんと平等に焼き払っていたはずだった。

そんな業火の奥底から溢れ出る銀の輝き。

まるで炎はその銀光に触れぬように避けながら燃え盛る。その火の先に、炎の向こうにそれはいた。そんな幻想的な光景。銀の煌きを晒し、露出した光の中に、

「……おま、え」

時任理愛はいた。

銀の髪、瞳。一方的に雪哉の妹となった少女。

何もかもが気に入らなかった。独りでよかった。家族として現れ。土足で雪哉の領地に踏み込んできたような、そんな理愛が憎くさえ思っていた。

そんな理愛は現世を彷徨う亡者のように歩いていた。瞳には光が抜け落ち、虚ろなまま立ち尽くし、炎の中を歩いていく。銀の髪から放たれる光はまるで理愛を守護するように炎を遠ざける。

雪哉はずっと、理愛を非難し、批判し続けていた。

お前は妹ではない。

お前は家族ではない。

お前は気味が悪い。

お前は家族じゃない。

誹謗し、中傷し尽くしてきた筈だった。

だから、きつと恨まれている。嫌悪を言葉にして並び立ててきたそんな最低。最悪の行為を繰り返してきたのだ。

だから、二人は「兄妹」になんてなれる筈がない。

そうしてきたのは自分自身だった。だからこのまま死ぬのも自業自得だ。距離を置き、突き放し続けたからこそその因果応報。理愛は雪哉を助けない。助けるわけがない。

それなのに、理愛は虚空を見つめたままの光無き瞳で、雪哉を見つめ、身を屈め、そしてそつと雪哉の身体に手を差し伸べる。

差し伸べられたその手はとても小さく、氷のように冷たく、けれど「温かい」のは――

「おれ、おまえに、ひどいことばっか、したのに……」

その手はまるで救済。

酷い言葉を投げ掛け続けて来た筈だった。

恨まれていても憎まれていても当然の仕打ちを与えてきたにも関わらず、それを許すかのように理愛は聖母のように雪哉を抱き締める。

子供の我侭だったろう。

家族の輪にいきなり入り込んで来たことを納得できなかっただけだ。たったそれだけが理愛を傷つけた理由だった。一年もの間、ただ勝手に怨嗟を言葉にしてはぶつけて来ていた。本当に酷いことをしたと思う。だけど、それはもう消えない。その罪は決して消えない。

だから、それが雪哉の未来永劫、忘れることの出来ぬ大罪。

そんな罪悪に押し潰されそうになる雪哉の身体をそつと理愛が触れる。

そして抱き締める理愛の手が失われた雪哉の左腕に――

「わたしは、選びます、選び、ます」

その言葉の意味を雪哉が知るわけがなく、けれど紡がれた言葉が光を形成し、銀の輝きは確かに雪哉を包んだ。

やがて太陽のように眩しい輝きを生み出したその光は雪哉の左腕を象っている。

そして創造されたその腕は、銀の光を内包し、形を成す。雪哉の失われた左腕が、新たに創られ、雪哉の意識でその腕は身体の一部として動き出す。

まるで、それは魔法。まさに奇跡のように、雪哉の左腕が再生する。

そんな奇跡を呼吸するのと同じぐらい簡単にやってのけたというのに、そんな魔法使いはただぐったりと、目を閉じている。そして奇跡の発現者は雪哉の腕の中で眠り、雪哉は身体の上で動かない。雪哉もまた仰向けのまま理愛の身体をギュっと、その新しく手にした左腕で抱き締める。

けれど理愛の体温も感触も感じることは出来なかった。確かにその腕は雪哉の思い通りに動いているのに、それなのにその腕にはまるで神経が通っていないように何も感じない。無痛のまま、無感のままに、けれど動くその腕は、もう「人」としての腕ではないような、そんな気がした。

「……これは？」

しかしそんな変質した腕よりも、目がいったのは理愛の肌蹴た服の向こう、胸元に埋まる銀色の結晶だった。髪と瞳に負けぬ程に煌くその銀が皮膚の上に埋没している。

やがて知らぬ間に雪哉は答えを出してしまったのだ。

理愛は、人間ではないんだ、と。

銀の瞳と髪の間なんて、いない。

失った左腕を生み出し、胸には銀の結晶を、そんな魔法使いのよ

うな少女。

人間ではない違う者。

それでも、もう、雪哉は拒絶することを止めた。

ここまで十分拒み続けた。

だからこれは罪だ。妹を傷つけた罰。

消えた腕をもう元通りにしてくれたことに対しての恩義。

遅すぎるけれど、全部失ってしまったから、一人になるのが嫌だなんて、そんなの傲慢だろうけれど、

「理愛、俺の、妹に、なってくれるか——」

雪のように降り注がれた結晶の下で雪哉は問う。

眠り姫のように目覚めることなく眠る理愛は答えを返してはくれなかった。

この左腕は理愛がくれたモノだ。だからいつかその感謝を形にする為に、それまで、理愛を守ろうと決意したのもこの時からだ。

死んでしまった家族、大事なモノが勝手に手から零れ落ちて消えてしまった。だから、理愛が雪哉と血の繋がりのない偽りだとしても、本当の家族でなくとも、人間でなくとも——

雪哉の妹になると、聞かされていたから。

その事実から一年も逃げ続けてきたけれども、もう逃げられない。逃げることは出来なかった。幼く、責任を全うできる力も無い、生温い世界で生きてきた弱き者だとしても、それでも最後の一人になっってしまった唯一の「家族」を守る為に、掴む。

だからこの手を握る。こうして雪哉と理愛は兄妹になる。

本当の家族は喪われ、新たに生まれた偽りの家族。それでもいい、縋るしかない。孤独は嫌だ。おぞましいそんな闇の中を生きることなど考えられない。この腕がその証になる。この腕があるから、理愛がくれたモノだから。だから、理愛を共に。

自分は選ばれたんだ。

理愛の言葉を思い出す。意図はわからない。意味も知ることはない。

それでも理愛が自分を選んだのならば、生きることになろう。

「選ばれた、俺は……選ばれた？」

ならどうすればいい。

選ばれたのならば、どうすれば、そうだ、自分を偽ろう。

雪哉は願う。自分が選ばれた存在だと。高位なる者だと。雪哉がいつも口にする「設定」の数々、その発端もこの瞬間だったのだろう。

勇者のように、世界を守る存在にでも選出されたとも考えれば、それだけで十分狂える。この異常を自分の一部に出来る。人から逸脱した銀の腕、この腕を認めるには、そうするだけでいい。戦う為の腕だ。何と？ その敵はまだいないけれど。けれどそう考えるだけで救われる。

理愛を選び、与えた、この腕で、いつまでも理愛を守ろう。

そう、誓う。

だから雪哉は理愛から離れられない。

あれだけ憎んでいた筈なのに、今はとても大事で堪らない。

もう理愛しかないのだと、そうわからされれば、おかしくもなる。

両親を喪い、腕を失い、その腕が別の腕に作り変えられ、妹となるその少女は人間ではない。そんな事実が雪哉を執拗に襲うのだ。おかしくならないわけがない。

手の中で眠る理愛を見つめる。

大丈夫、大丈夫だと何度もそう言い聞かせ、ギュッと握る。

離すものかと。

今、受けた絶望を二度と受けぬ為にも、強く生きるのだと。十歳になったばかりの少年が強い信念を抱き、前を向く。涙は止まっていた。もう泣くことさえ許されない。強く、強くと、そう言い聞か

せながら、自分を作り替える。心を改造する。

こうして、雪哉は「失い」——そして「得た」こととなる。
けれど、六年後。

別離と共に、その腕が雪哉に力を与えることなど、知る由もない。
そして「妹」の消失がその左腕に更なる覚醒^{めざ}めを起こし、全能た
る結晶に立ち向かわせるのである。

なんて、最期の戦いの前の、くだらない戯言。

1 - 18 全能結晶の無能力者（9）

1 - 18 全能結晶の無能力者（9）

その銀の左腕を掲げ、雪哉は指差す。

だが、そんな雪哉を嘲笑うように虹子はゆっくりと立ち上がる。

そして顔を庇いながら、指と指の隙間から雪哉を睨む。その視線を浴びるだけで呪われてしまいそうな程に、虹子の発するその虹色の瞳は危なげで、おぞましい。

そんな呪詛を放出させながら虹子は痛みに耐えていた。顔面に受けた傷が痛む。痛覚などつくに忘れていた筈だった。触れれば壊れてしまう。触れるから壊してしまふ。そんな絶対無敵。その無敵を超えられたことが顔の痛みより痛い。心が痛い。心が――

自信を打ち碎かれるということは、耐え難い苦痛そのものだ。築き上げてきたものが瞬間で崩れ去るその様を悲嘆と呼ぶのだろう。

無敵が効かない。最強も利かない。あの左腕が、憎たらしく銀色に輝くあの腕が、虹子の全てを破壊する。壊された。壊すのは自分の役目。同じことをした。同じ真似をされた。

「トキトウ、ユキヤア！ お前はあー！」

たった一撃で終わるわけがない。

怒鳴り、喚き、そして狂う虹子を前に雪哉は構える。何も出来なかった自分とはさつき決別した。そしてもうこの世界から乖離する準備も出来ている。その前に、勝利を手向けに消えることを願う。理愛を奪ったこの敵を許すわけにはいかない。理愛の結晶を手にするこの悪が憎い。だから、戦う。これで最期。全て、終わらせる。

「お前はああああああああああああつ！」

先手、虹子は両手を前に出したまま、走り出す。

叫び狂いながら、虹色の光を帯び、雪哉を破壊しようと疾駆する。触れれば壊れる滅びの光。その絶望を前に雪哉は酷く落ち着いて

いる。どう動き、どうすればいいのか、自覚することなく身体が自動的に動く。ただ純粹に、素直にその左腕に力を籠め、手を開き、雪哉に触れようとする虹子の小さな手の平へ、雪哉は渾身の力でたた殴る。

虹の光を超え、虹子の手に雪哉の拳が触れる。

そのまま雪哉の拳は虹子の両手を押し返す。両手は弾かれ、無防備に。しかも雪哉の振り抜いた拳が既に元の位置に戻っている。だが追撃はしない。構えを解き、無防備のまま尻餅をつく虹子を見下ろす。その情けが虹子を更に発狂させる。

「なんだ、なんだよ、なんで止めたあ！」

「立て」

逆上する虹子に気も留めず、雪哉は人差し指を動かしながらたった一言。

そんな余裕めいた表情も、感情も、何もかもが気に入らない。

「何、それ？ 何よ、それ？ 何なのよ、それ？ それ、それ、それ、殺す、アンタ殺すわ、殺してやる」

「全く気品の欠片も無いな、女はもつと淑やかにだろう？」

「その言葉の次に「理愛みたい」って言いたいんでしょう！ シスコンがあ、この変態があ！ 気持ち悪い、気味悪い、気色悪い、不気味不気味不気味、アンタ気味が悪いのよ！ 理愛、理愛理愛理愛つてえ、ずっとずっとずっと、アホの一つ覚えみたいに妹の名前、そんなに好きかあ！」

「ああ、そうだが？ それが——……」

すました顔で、とぼけることもなく、悩むことなく告白する。

それの何が悪いとさえ顔に出ている。どれだけ中傷したところで雪哉は碎けない。大切な家族に好意を寄せて何が悪い。その「好き」が何の好きかだなんて、どうでもいい。それでも、もうその好意さえ雪哉は寄せることができない。だから、

「——それが、どうした」

雪哉が一步踏み出すだけで、まるで虹子の背後に回る映像を切り

取ったように、瞬間移動している。そんな超常を前に虹子は理解する。この男が常識を超越しているその理由を。

「そうか、「やっぱり」、そうか！」

雪哉の左腕が伸ばされる。その銀の手腕を虹子は躲す。そしてそのまま走り、雪哉と距離を置く。

「同じ土俵に上がられた気分はどうだ？」

攻撃は躲されたが、それが雪哉の強さを輝かす。

攻撃を回避した、ということは虹子は自分の力に不安を抱いたということになる。

躲す必要などない。触れれば壊れるのだから。

だが、それをしないのは雪哉の左腕を脅威と認識したからだ。そうしてしまったことで虹子は自身の価値を下げることとなる。わざとらしく音を立てて舌打ちし、汚らしく唾を吐く。

雪哉は知らない。この銀の左腕がどのように作用して虹子の力を跳ね飛ばしたのか。

しかし、理由など知らない。意味など知る必要は無い。

この腕で怨敵を討つことができる。それだけで十分すぎる。

「ちよつと勝てる可能性が見つかったぐらいで、はしゃいじゃって……ム力つくなあ、私の顔がメチャクチャになっちゃったじゃないふざけやがって、その挙動も台詞も私の神経逆撫ですんだよ」

「勝てる可能性が見つかった——それだけで戦うには十分すぎるだろう？ お前達に勝てるのなら億分でも兆分でも、そんなの幾らでもいい。「零」でないなら縋りもする。だから、戦える」

それがたとえ天文学的数値であろうとも、確立が発生するのなら諦めるわけにはいかない。雪哉はそう考える。そしてその確立は明らかに「零」に近いほどに小さくない。大きすぎる程だ。一撃を与えたのだ。ならば終われない。勝利できる。必ず勝てる。

しかし、そんな雪哉の言葉に呆れ返り、咽び笑う虹子がいた。雪哉の言葉がおかしくて堪らない。雪哉の言動がふざけているようにしか見えないのだろう、しかし雪哉はふざけてなどいない。戯れで

はない、これはただの殺し合いでしかない。大切な妹を殺した殺害者を縊り殺す為の復讐劇。

そんな雪哉を馬鹿にし、虹子は笑う。その笑声は雪哉を否定しているようだった。そしてそんな声がピタリと止み、冷たい風が吹き抜ける。

「アンタが私に勝てない理由があるわ」
「言ってみろ」

即座に言葉を返す。
そして即答される。

「考えてもわかるでしょ？ —— 経験よ」

虹子が屈んだと同時に、雪哉は無意識のまま身を竦めた。雪哉の真上で風刃が飛び抜けた。虹子がいた位置から重なるように雨弓が銃を向けて立っていた。

「オレを無視すんなよ、交ぜろや」

回転弾倉シンダーが廻り、撃鉄が落ちる。火花さえ見えない不可視が音も立てずに雪哉を貪ろうと螺旋を描きながら穿たれる。そんなおぞましき弾を左腕で力いっぱい地面を叩き、その反動で跳躍することで回避する。人間の範疇を超えた跳躍力を垣間見ながら、雪哉は森の海から抜け出し、満月を背に再び落下。

人間ではなくなってしまうている。

やけに遠くがよく見える。夜空の星が一つ一つ重なり合って川のように流れているのが見える。身体も自分のモノではないように、ただ躍動し良く動く。飛べは羽根でも生えているように空が近くなる。更には脅威を前に思考はやけに冷静だった。恐怖という言葉の意味さえ忘れてしまいそう。

銀の左腕が解放されてからというものの雪哉は人間味を失ってしまった。

それでも今の雪哉にとっては何も問題の無いことだ。これからの未来なんてない。将来は潰えた。世界は滅んだ。ただ今は理愛を殺した敵を殺し返すという、その願いを叶えることしか頭に無い。そしてそれが果たされた時、雪哉は本当の終わりを迎えるのだから。だから、見えないモノに恐怖することも、不安がる必要もない。もう何も無い。理愛の消失は全なる消失。とてつもない存在感だ。その存在が消えて無くなってしまっただけでもない。だからもう雪哉は止まらない。止まることなんて出来ない。最期の覚悟だった。これを捨てれば瞬く間に雪哉は朽ちては果てていくことだろう。それでもいい。もうこのまま自ら消えたって構わない。

それでもこの憤怒は人間である証だ。感情が雪哉を生かす。理愛を殺した敵らが憎い。この憎悪を孕んで逝ってしまっただけは理愛に申し訳が立たない。笑顔で迎える為にも、笑顔で見える為にも、今はこの膿のような憎悪を出し切る為に、雪哉は飛翔する。人間を止めてでも、この敵を倒すことだけを――

「勘違いしてもすぐわかるんだよ、アンタが私達に勝てないワケを」
覚悟を糧に墜落する雪哉の真横に虹子がいた。

いつの間に、なんて思った頃には遅すぎる。虹子の手が雪哉に伸ばされる。雪哉はその手を左腕で庇う。そして直下したまま地面に叩き付けられる。何かに乗せられて射出されたみたいだ。虹子に触れた時、雪哉は見えない力で押し出されたのだ。

「どれだけ不可思議がアンタを守っても、こうやって私と戦えたって、そんなの運が良かっただけじゃない。結局、能力を自分の手足のように使える私と、自分でもさっぱりわかってないアンタなんかとじゃ差が開くのなんてわかりきってる」

経験の差、とでも言いたいのだろう。

それが雪哉が覚醒し発現させた能力なのか、それさえも定かではなく、その左腕はただ輝くだけ。豪語し、啖呵を切っても、こうして雪哉は小蠅を叩いたみたいに潰れて死にかけている。何もかもが素人なのだ。どれだけ戦えたとしても、これが初戦なのだ。数え切

れぬ程に戦闘というモノを経験しているであろう虹子と、初戦闘の小物の雪哉ではどうしようもない距離でハンを背負うことになる。

——そして雪哉は背中から地面に打ち付けられた、

「やっぱり、死なないね、おかしいなあ……なんで死なないの、アンタ」

地面には小規模ながらクレーターが出来上がっていた。その中心に雪哉が潰れている。虹子がその上で雪哉に愚痴り、さらに踏み付ける。痛みはないが、動くことはできなかった。しかし苦しい。呼吸もままならない。まるで重力が倍加しているようだ。

「私に触れたら飛んで、壊れて消えて滅びるまでぶっ飛ぶんだよね、それなのにアンタ、飛んでいくだけ。こうやって地面に叩きつけられて蛙みたいなお声上げて悶えてるだけ。もういいでしょ？ さつさと死んでよ、お願いだから」

そんな懇願、引き受けるわけにはいかない。

けれど虹子はどうしても死なない雪哉が恨めしいのだ。確殺の異能で、殺せないとなると苛立ちもする。傷らだけになりながらも五体満足のままというのが余計に腹正しいのだ。これまでだつてずつとずつとこの異能は瞬間で終わりを与えてくれた。それがこうも時間が掛かり、しつこく耐え抜いていることに吐き気がするのだ。さつさと死んで、消えてくれないと、でないと意味がない。

「俺から大事なモノを奪つておいて、死ねだの諦めるだのまだ言うか」

身体の痛覚が麻痺しているのか、身体は思うように動かないくせに、まだ十分戦える。その気持ちだけは決して失うことなく、雪哉は声を上げる。

「言うさ、黙って死んでりゃいいだけなのにそうやって立ち向かって来るから悪いんだよ、アンタ元々おかしいくせに、その腕見せてからもっとおかしくなってるんだよ」

「そうなんだろうな、俺も吃驚^{びっくり}している。まるで俺の身体じゃないみたいだ」

「そりやそうでしょう、アンタの動きがいきなり「人間のモノ」じゃなくなつたもの。すぐわかつたよ。アンタのその左腕は……花晶^{レムリア}でしょう？ そりやそうよ、そんなの当たり前じゃない！ それの副産物で上手く動けるだけ！ 上手く進めるだけえ！」

この左腕は、理愛が与えてくれたものだ。

ここまで来れば繋がっていくのも無理はない。六年前の地獄によつて雪哉の左腕は失われた。だから今、こうして雪哉の目に映る左腕は別のモノである。そんな左肩から下は人間の腕ではない別腕。その銀の腕は理愛の輝きから創造された神秘。そして人ではない結晶だつた理愛がくれたのは、結晶の腕。その結晶は種晶ではなく、上位とされる花晶だつた。

「第一界層^{かいそう}よ。それは花晶そのものの能力を発動するよりも最初に付与するもの。だから所詮、現象程度^{ちから}よ。そんな超越^{ちから}をくれるの。人より早く、人より遠くへ、人より高く高みへと進ませてくれるの」
花晶には決められた段階というものが内包されている。

その一つが第一界層である。これは全ての結晶に備わっている仕組み^{システム}の一つであり、言わば初期段階となる。花に劣るとされる種晶は全てこの第一界層に行き着いただけで終着となる。だから身体能力自体を向上させる程度の能力ならそれだけしかない。雨弓のような風を操る能力ならば、それだけしか使えないのである。だから種晶は一つしか能力が備わらない。

しかし花晶は違う。固有の能力の前にこの第一界層に到達するだけで、戦闘能力を飛躍的に上昇させ、強化し、この能力だけでまず微弱な種晶の有能者と戦つて、勝つことも可能となる。本来の能力は更に一つ層を上げる必要がある。虹子のあの触れるだけで全てを壊し尽くす「虹壁^{レイン・ボネルファ}は全てを遠ざける」もまた第一界層ではなく階位^{ちから}を上げ、発動させた絶対なる異能である。

「なるほど……な、こうして俺が人間味が失われてしまったのはこ

の腕が原因か」

合点がいく。納得してしまう。やはり自分は無能力者だ。

時任雪哉は無能力者。

それだけは変わらない。結局、何も変わっていないかったのだ。

だってこの力は雪哉のモノではないのだから。その能力の一部が左腕から発した力ならば、それは理愛のものだ。無能力者という称号を捨てることだけは出来ないのだ。こうして地の上に倒れ、虹子に踏みつけられ、それでも戦おうとするその意思だけが雪哉の全て。この腕が無ければとくに肉細工に加工されて獣の餌だ。

「そうよ、そういうことよ。もういいでしょ？ わかったでしょ？ アンタが何か出来たわけじゃなかったって、その奇妙な腕だって、アンタ自身何かわかってないじゃない。それなのに、それなのにまだやるの？ まだ終わりたくないの？」

「そうだな、嫌だ。他人に結末を決められるのは耐えられない。俺は俺の成すべきことをする。それを果たすまでは、お前に抗ってやる」

「あつそう、そりゃ格好いい生き方ね、そんなにこれが大事ななの？ これを取り返したくて仕方がないわけ？ なんだ？ どうして？」

雪哉を足蹴にしたまま、虹子は手に持つ結晶^{理愛}を見せびらかす。それは理愛だ。どんな形であつたとしても、それが理愛の身体を創っていたのなら、それは必ず奪還しなければいけない。もう顔も見れない。声も聞けないとしても、それを抱き締めて死ぬ為に、ただ前へ手を。

「気持ち悪い、これはもうただの花晶^{レムリア}。それなのにアンタ……これを理愛だなんて思ってるわけ？」

「それがどうした、俺は言っただけ——理愛を、還せと」

どれだけ無様に寝転がりながら、傷つき汚れても、果たすべき使命さえあれば、後は勝手に結果がやって来る。願え、動け、止まることなく前へ、前へと、それだけを考える。

どんな形に変わり果てても、理愛であるならそれでいい。

「怖いわ、アンタが怖い。異常だわ、アンタは異常。異常者よ。こんなちつぽけな結晶さえも、妹だなんて思えるアンタのその頭の中身、気持ちが悪い。気色が悪い。気味が悪い」

「ああ、そうだな。でも、そうやって他人の過小に評価してどんな気分だ？ 上に立てて満足か？」

「ええ、そうね」

雪哉の言葉に適当に返事をして、虹子は上げていた手をぶらりと下げる。そして結晶に絡み付いていたその五指が解かれる。その結晶が雪哉の胸へ。ゆっくりとその結晶を傷だらけの右手で掴む。まだ右腕はしっかり人間のままだ。けれどそれは脆く弱い、何も成し遂げることが出来ない無能の手。けれどその手で握らなくては意味がない。この腕が雪哉の腕なのだから。左腕は理愛に与えられたものであつて雪哉のではない。だからそれではいけない。雪哉の腕で理愛を抱き締めなければ――

「ほら、お望み通りにしてやったわよ。それでどうするの？ 大好きな妹がそんな形になっても、それが妹って言えるの？」

「ああ、これは理愛だ。俺の、理愛だ。お前が殺した理愛だ。こんな形にしたのもお前だ。だから俺はお前を許さない。だから俺はお前と戦うんだ――」

胸元で握り締めて、もう離さない。

これでもう大丈夫。憂いは潰えた。けれど愁いは潰えず、ただこの悲哀は雪哉の身体を奮起する。

だが激情する雪哉をただ憮然とした表情で虹子は吐気を催している。人としての形は失われ、結晶に変化した妹を前に、悦に浸るその様が気に入らない。時任雪哉の全てが気に入らなかった。心は折れず、信念も砕けぬまま、それどころか何か達成感に満ちていたようにさえ見える。結晶を取り戻せたこといもつとがそんなに嬉しいのだろうか。それはもう喋る事も無い。人の形を成すことなど永遠に出来ない。それなのに、どうして雪哉はこんなにも喜悅に溺れる？ わからない。だからもう、お仕舞いにする為に、その感情全てを押し潰して

しまおうと、虹子は力を揮う。

「そう、だったら——時任雪哉、理愛^{ソレ}をずっと抱き締めたまま、そのままその素敵な思想ごと圧死^{つぶ}しなさいよ」

「お前の重みで、俺の想いを圧死^{つぶ}すだと？」

雪哉は鼻で笑う。

圧死——重みに耐え切れず死ぬこと。

その重みとは、力によるもの。吹き飛ばし、叩き潰し、壊れるまで磨り潰す。

触れれば壊れる虹子の手。収束する虹色の光を纏いながらその手が雪哉に触れる。しかし雪哉はその手を左手で叩く。ただ右から左へと平手を打っただけ。それなのにその光は失われる。虹が消え、虹子は呆然とその様子を見つめるだけ。そして時間が動けば虹子の形相が歪み出す。

「潰れるのはお前だ、お前が犯した罪の重さで！」

「理愛は勝手に死んだだけだろうが、お前の弱さが殺しただけだ、私のせいにするなよ！ この卑怯者が！」

その通りだ。何も間違っていない。虹子の言葉は核心そのものだ。

確かに殺したのは虹子なのかもしれない。それでも、その結果に至るまで雪哉に何が出来ただろうか。そんな悲しすぎる結末を招いたのは弱小で、脆弱な雪哉の無力さによるものだ。無能であるが故に理愛を守り通すことが出来なかった。だから、だから、だから、その結晶を大事に抱えたまま、何も遂げられぬままに、死んでしまえ！」

「ああ、そうするさ、そうやって死んでしまうさ………だけど！」

この戦いの終わりが、雪哉の「終わり」だから。

理愛が形を成す前のこの結晶を抱擁したまま、死ぬことは決まっているけれど。

でも、それを決めたのは虹子ではない。だから、虹子の思い通りにはさせない。

虹子が後退し、雪哉はすかさず立ち上がる。そして虹子は跳ねる。雪哉は駆ける。

虹子の七色が雪哉に迫る。幾度となく雪哉に襲い掛かるその全壊の力が雪哉へ向けられる。それでも雪哉は臆すことなく執拗に立ち向かう。

虹子の虹色の手が、雪哉の銀色の腕が交差する。

正対し、互いの憎悪が行き来した。しかし、その果てに行き着いたのは雪哉の腕だった。

虹子の額を雪哉の拳が打ち付けられる。まさにそれは鉄槌。結晶の腕は人の硬度をも凌駕していた。そんなものが直撃したのならば、無事ではすまない。二発目の直撃。虹子の手は雪哉の鼻の上で止まった。雪哉に触れることが出来ない。能力は発動されない。そして触れられても発動されるはずの能力もまた発動されない。硬いその左腕が虹子の身体を叩き割る。

何故？

虹子は自分の身体が宙に浮いていることよりも、無敵である筈の能力が何の効力も見せないことにばかり気を取られていた。そして身体が打ち付けられても、答えが出ないことだけに困惑する。痛い。痛覚とは無縁の世界で生きてきた虹子にとって、この初めての痛みに恐怖した。痛い、痛い、そんなことよりも胸が、痛い。心が……痛む。

「教えてくれた、この腕が。そうか、——「アンチ・マグナ」と言うのだな——」
それは偉大とは違う

雪哉は左腕を伸ばし、その花晶の名を呼んだ。

如何なる強固な力を撥ね退けるその左腕を手にしたとしても、偉大にはなれない。

それは雪哉が本当の能力者ではないから。

理愛がくれた腕。その奇跡の一片。願うことなく、気がつけば手

に入れていた。それに気がつかずここまで来てしまった。そんな人間が手にしたとしても、それで自分自身の価値が高まるわけではない。誇ることもできない。寧ろ滑稽だ。結局、雪哉は何一つ一切の努力もせずにここまで来てしまったのだから。だからお前は偉大ではない。お前はそんなものにはなれないという、そんな雪哉には相応しい名がその左腕に付けられている。

けれど、その腕は虹子の能力を無視する。その腕は左右されない。雪哉の左腕は周囲の能力を拒否してしまう。

「時任お！」

吹き飛んだ虹子を見て雨弓が叫ぶ。目の前で二度も殴られているのだ。怒声を吐くのも当然だ。

額に拳を打ちつけ、地の上に寝そべる虹子。虹子とは二倍の背丈はあるであろう男がそんな小さな少女に乱暴をする。これだけだと完全に雪哉が悪人であろうが、知ったことではない。

雨弓が怒鳴り散らし、「ARK」という名の銃器を振り翳し疾走する。そして雪哉に襲い掛かる。遠くから撃つのではなく、銃口を雪哉の身体に押し付けるように……これでは避けようがない。銃口が心臓に突き付けられる。しかし大人しく心臓を貪らせるわけにはいかない。危機を悟った瞬間、身体に命令を送ることなく自動的に防衛本能だけで行動する。左膝が動く。銃口を蹴り上げ、それは雪哉の心臓から空中に向けられた。撃鉄が落ちた頃にはその風の弾が空中に撃ち出された。この間、数秒も経過していない。

「殺す、殺す、殺すう！　よくも虹子をお！」

それはこちらの台詞だった。

雨弓の感情は雪哉のものと同じだった。それでもまだ虹子は地面の上で悶えている。しっかりと生存しているのだ。こんなものでは済まされない。こんなもので終わらせる気などない。雪哉は間違いなく虹子を殺すだろう。理愛を奪った殺「人」者を殺すだろう。そして、雨弓には同じ感情を植えつけることだろう。理愛がどんな存在であろうとも人として括り続ける雪哉にとって勝手に化物という

分類に分けられては我慢ならない。

「雨弓、お前にも教えてやる。だから、俺と同じ目に遭って、俺と同じように絶望しろ！」

復讐はただ殺し尽くすだけではない。

自らが受けた全ての負の感情を授けることもまた復讐の一つである。

だから必ず虹子を殺す。殺して、雨弓を絶望させて、それさえも殺す。殺してやる。そうしなければ雪哉の心は浮かばれない。

「だったらやってみろ、ごらあ！」

雨弓は銃を、使わなかった。

その銃は「ARK」と呼ばれ、能力を格段に強化する代物だった筈だ。しかしそれを使わないのは、

「なんだ……？」

身体を包み込む程に大きな風が通り過ぎる。

そして吹き抜けた風が消えた後、そこに立つ雪哉はまるで鎌鼬かまいたちに襲われたように全身を切り刻まれていた。ガクリと膝を落とし、裂けた皮膚を見る。魔風が雪哉の肉を刻み続ける。そしてその風は視界さえ遮る。左腕で顔を庇いながら、けれど身動きも取れずに雪哉の身体は地上に縫い付けられた。

「言っただろ！ オレは風しか操れない。この「ARK」は上手く能力をコントロールするために使っただけなんだよ！ 使わなかったら力の加減がでかねえから使ってたただけだボケ！」

荒ぶる暴風が雪哉に深い傷を負わす。

左腕を大きく振るう。しかしその風が掻き消せない。

「さっきみてえにやってみろよ！ 虹子の力を消し飛ばしてみろよ！」

出来ない。

雪哉は何度も手を振るう。しかし暴風は消えない。勢いを増すばかりのその風が幾度となく雪哉を襲い、雪哉は何度もその風に攻撃される。虹子の虹色の壁を突き破る程の力が備わっているわけでは

なかったのか？ 雪哉は考察する。

制限時間？ 使用回数？ この左腕は能力を打ち破れるのでは、なかったのか？

虹子の絶対破壊の能力を発動させることなく、封殺したとなると異能を持たない雪哉であつてもその左腕の謎は十分解くことはできた。銀の左腕は能力を消し去れるものだと思つていた。しかし、違う。雪哉の左腕で雨弓の能力を消し飛ばせない。しかし、一つだけわかったことがあつた。

「……この左腕、傷一つ付いていない？」

頬を、腕を、足を、全身に傷が作られていく。そんな中で雪哉の左腕は綺麗な銀のまま、原形を留めている。

「気色の悪い腕だ、ぶっ壊れるよ！」

竜巻を起こしたまま、その中心に立つ雨弓が再び「ARK」を取り出し、射撃を開始する。数発が雪哉の横に逸れ、そして一発が雪哉の左腕に命中した。巨大な大木さえも貫き通す破壊力で、その力は雪哉の身体を回しながら、木々を薙ぎ倒し、やがて止まる。

本来なら樹が折れる程の衝撃で飛んでいるのだ。即死もいいところだが……しぶとすぎた。雪哉はまだ生きている。本当に頭部でも切断しない限り活動は停止しないのではないかというその生命力。雪哉はまだ、生きている。

「がはっ……ははっ、なかなかどうして……人間じゃないな、これは——」

確かに左腕には風の弾丸が直撃した筈なのに、雪哉の左腕はしっかりと形を成している。それどころかやはりヒビ一つ入ることなく銀色の輝きを放ち続けていた。やはりこの腕は絶対に壊れないようだ。なら、攻撃にも守備にも使える。

「時任、お前、まだくたばんねえのか？」

「くたばる？ 俺は、こうして生きているぞ？」

裂傷と打撲、骨折その他諸々と傷だらけで雪哉は酷い有様。満身創痍もいいところだが、そこは忘却することで感じていないことに

する。そうすることだけが今の雪哉に出来たこと。自分を偽ることだけが、能力の無い雪哉が出来ること。全てを失ったから、全ての感情を自在に作り、嘘で構成できた。理愛がいてくれたから、理愛の前では強い存在だと書き換えれた。

「そうか、じゃあ死ね」

銃口は向けず、再び「ゲイルヘイル 呼応風塵」が雪哉の全身を撫でた。

雪哉のそんな突風に身体を支えることが出来ず、成すがままにその身を風に委ねることしか出来ない。そんな滅びの風が雪哉の身体を壊し続ける。左腕は壊れずとも、所詮は人族の身体である雪哉の耐久力は最早皆無に等しい。

突風が雪哉の身体を押し出しては、樹に衝突し、雪哉は吐血する。拷問のように雪哉に地獄を見せ付ける。しかし、これで地獄ならば生温いものだ。これ以上の地獄は六年前に経験している。そんな体験の前に、たかが身体を押されては樹にぶつけられる程度、まだ耐えられる。身体に受ける痛みならば、まだまだ耐えられる筈だ。限界をとくに超えているにも関わらず、心は未だに余裕のままだった。

風が止んだ。

雪哉は樹の下で、まるで死体のように崩れていた。それを見下ろす雨弓がやっと終わったと息を吐いては銃器を向けた。

「わかったか？ テメエはよくやったさ、虹子とあんだけ殺り合ったのも正直、感心してるんだぜ？ でも、やりすぎはダメだな。あと舐めた口も頂けねえ」

もう声も出ない。口元は少しだけ開いて、笛を鳴らすようにか細い音を上げるだけ。もう指の一本も動かせない。しかし、雪哉はまだ意識を失うわけにはいかない。

だって、あれだけ大事に握り締めていた結晶が無くなっていたから。

それだけで雪哉の閉じそうになる意識が覚醒する。

右腕にしっかりと握り締めていた筈の結晶がない。理愛が、いない。「お前、理愛をどこへやった！」

あれだけ死体のように押し黙っていた雪哉が突然、声を上げたことに雨弓は驚いたが雪哉の昂ぶったその声につい返答してしまう。手の中で氷が解けたように消えてしまった。けれどその融けてしまった理愛は何処へ行った？

「はあ？ あの石ころは虹子がお前に返してやったるう？」

「ふざけるな！ ない、ない、俺の手から消えてる、どこへ、どこへ！」

「知るかよ。なんだよ、さっさと死ねよ。もういいって、お前、犯罪級に変態だわ。虹子が苛立つのも無理ねえわ」

そして雨弓は銃をベルトに挿して、両手を合わせる。

左右の手の中で織り成す疾風。それは雨弓の手の中で形を作り、球状となる。

「まあ、これを手向けにしてやるよ。バラバラになれ」

小さなその暴風の塊。触れるだけで引き千切られそうな脅威を象ったモノ。それがこんな至近でぶつけられれば雪哉の左腕だけが地面に残り、それ以外の身体は塵芥^{ちりくた}だ。

「死ねよ」

死にたくない。

こんな形で終わりたくは無い。

でも、身体は動かない。もう動きそうもない。

どれだけ自分を偽っても、これだけボロボロになってもまだ行けるなんて、そう思っても限界なのだ。もうそれ以上は動けないのだ。終わりが、近づく。

『私の兄さんに、何をしてるの——』

消えそうになる意識の中で、確かにその声が脳裏を掠めたのが分かった。

『――殺しますよ』

右手が、動いた。雪哉の意思に反して――

雪哉を呑み込むはずの終わりの珠が両断される。そして雪哉ではなく、その背後の木々を呑み込み八つ裂きに細切れにしていくな。だが、雪哉は生きている。しっかりと、はっきりとそこに存命していた。

何が起こったのかも、自分が助かったことさえも、そんなことはどうでもよくなってしまった。もう終わりだと思った。やはり最後の最期で諦めという感情を抱いてしまった。だから、また情けないまま終わってしまうところだった。

けれど、それを拒絶した。雪哉の右手が意に反したまま動き出す。まるで見えない糸にでも引つ張られているようだ。そしてその右手の指先からゆつくりと白く光を放ち、雪哉は立ち上がった。理解し、認識し、開眼した。

そして、その糸は切れる。雪哉の意思でその右腕が動く。異常性が更に増長され、増幅される超越。けれど、そんな逸脱さえ、今の雪哉にはどうでもいいことだった。そんな進化よりも、雪哉は言葉を紡ぐことだけしか頭がない。

「なんだ、そこに、いたのか……」

結晶は失われた。理愛が消失した。世界から消えてしまったのかと、それは杞憂に終わった。だって、理愛は雪哉と一緒にいるから理愛は雪哉の右肩にそっと寄り添うように、天使のように銀の翅^{はね}を羽ばたかせながら、けれどそれは翹^{たか}じやない。結晶だ。雪哉の長い銀の髪が好きだった。宝石のように煌く瞳も好きだった。

初めは嫌いだったくせに、嫌悪の言葉を並べてきたくせに、今は何よりも理愛の存在が大きくて、いなくなるだけで地面が音を立て

て崩れてしまつて、空が割れて破片を落としながら落ちてきそうで、そんな雪哉の世界を支える柱のような、そんな存在。

それがいなくなったとばかり思っていた。

もう二度と逢えないとさえ、思っていた。

だから全てが終わつたら、すぐに迎えに行こうと思っていたから。それが天国であろうとも、地獄であろうとも、この世界ではない別の場所であっても、異世界であろうが現実世界ではない何処か別の場所であっても、絶対に、如何なる手段を用いて邂逅を果たそうと思っていた筈なのに、それなのに、

『往こう、兄さん。わたしは選んだんです。兄さんと一緒に、と』
「わかつた、理愛。これで最「後」だ。だから理愛と一緒に往く」

—— お前がいたら、終われない。終われないだろうが。

だから雪哉は心の中で呟く。

理愛は生きていた。雪哉の傍らで、見守るように、そつと、ずっと、そこにいる。

雪哉の髪が少しだけ銀に染まっていた。

そして、

「なんだよ、どういうことだよ、これは、これはよお！」

雪哉の長い前髪の合間、黒い瞳の片割れが銀の光を放ち輝く。

半身が銀に染まり、雪哉は理愛によって力を与えられる。

無能力者のまま、けれどその身には全能なる結晶を超える能力が備わっているであろう。

けれど、どんな能力であろうとも、雪哉は構わない。

理愛がいる、それだけで十分だ。二人がいい。二人でいい。

一人で勝てないのならば、二人で一緒に戦えばいい。そうするだ

けで勝つことなど容易いから。

「兄貴……」

「虹子……」

蹲っていた虹子がヨロヨロと足取り重そうに雨弓の横へ。月下兄妹が雪哉を見る、理愛を見る。

雪哉も理愛もそんな二人を見る。出揃った。ほぼ異形と化した雪哉を前に驚きながらも虹子は前を向く。

「なんなんだよ、理愛も、アンタも……私より立派にバケモノじゃないか」

なんて手を広げ笑う。銀に染まる雪哉を見て、ただ笑う。

右腕は白い翅を生やしたような光の腕。左腕はただ純粹な結晶の形をした石の腕。異形なる両腕を見せつけ、雪哉はその腕を前へ。

「ならバケモノは一人でいい、お前の兄の言葉だ。俺だけが、それでいい。だからお前はその環から消えろよ、出来損ない」

雪哉は言葉を操り、虹子に先手を打つ。

怪物であろうが化物であろうが、そんな存在は一人でいい。雨弓が理愛に言った言葉。大きな力を掲げ、その力を自在に操り、思うがままに行動する。だから雪哉はその通りにさせてもらう。理愛の為だけに、この理愛に与えられた力で、全て思うがままに。

雨弓は眉間に皺を寄せ、血管を浮かせている。虹子もまた口元を引き攣りながら七色の輝きを纏い始めた。

「バケモノが、ぶっ殺してやる」

「ああ、殺してみる、俺を殺してみる。俺はお前を殺してやろう」
雪哉は理愛を見つめる。

笑顔のまま、何も言わず雪哉の身体に寄り添っている。何も怖くない。怖いわけがない。二人で一緒に戦えるだなんて、最高ではな

いか。

そして、雪哉は飛翔^とぶ。

あれだけ溢れそうな憎悪が鎮まっている。

だからこれで終わりにしよう。あの日の穏やかな日常へと帰還^{かえ}する
為にも。

1 - 19 全能結晶の無能力者（10）

1 - 19 全能結晶の無能力者（10）

月下虹子は困惑していた。

同じ花晶レムリアの少女。それを手に入れることが「ark」から与えられた使命だった。

しかし、今、虹子の前に立ちはだかるは、虹子の知らない未知なる形成。

黒の中に銀が滲む。

黒と共に銀を灯す。

時任雪哉の身体はまさに銀で構成されていた。

両腕が、髪が瞳が。

その半身は銀で創り上げられ、そしてそれは理愛の面影を浮かさせる。死んだ筈の理愛が此処にいる。

花晶レムリアは結晶であるが、その結晶の中には幼い少女を眠るとされている。それが本当の結晶の形である。そしてその破片が種晶シードとなる。破片でさえ人が手にすれば限定的ではあるが能力を与えるとされている中で、花晶はまさにそんな異能の原型ともされ、そして力の頂点となる。

五千年も前からわかっていたことだ。人が形を成すより遠い過去。そんな世界がまだ出来たばかりからその結晶は存在していた。

そしてそんな人を超越させる、神秘の石の存在に人類が気付かなかったただけだ。世界を変革させる禍根は遙か過去からその形を見せていたのだ。

虹子もまた人ではなく、結晶。

そして目を覚ましたのは六年前だった。

花晶の中で眠るのは少女。そしてその眠りは永劫覚めることはない。だから、虹子はどれだけ眠りについてたのかさえわからない。千年？ 二千年？ もっと、もっと長い時間？ わからない。しかし目を覚ました時、「ark」がいた。奴ら^{ark}が虹子を目覚めさせた。そしてそれは虹子という名を与え、役割を与えた。

虹子、というその名は与えられたモノであって本当の名前ではない。

目覚めた後、「月下虹子」として名前を与えられ、月下雨弓の妹という役割を与えられた。雨弓の妹として生きることになった。ただ振りをするだけの、贗物の兄妹だった。

結晶が与えるその能力の名こそが、真名となる。

だから虹子の本当の名前は「レイン・ボネルファ」である。全てを遠ざける破壊の力。それだけが虹子の全てだった。だからその能力こそが本当の名。だから虹子は偽りなのだ。人間ではないのだから、叡智を刻んだ全能たる結晶。名前など、最初からその結晶に刻まれている。だから人の名を付けられたとしても、それが自分の名前だとは認めていない。雨弓の妹であるというその役割も演じているだけにすぎない。

なら、理愛は？ 本当の名は？

そして誰が理愛を目覚めさせた？

「また奇妙な格好になりやがって！」

考え込む虹子の横で雨弓は拳銃を構え、躊躇うことなく発砲した。それも回転弾層に込められた全弾が雪哉に向けて撃ち込まれた。不可視の凶悪な風弾が雪哉を貪ろうとただ真っ直ぐに飛んで来る。しかし雪哉は動かない。回避の姿勢すら見せることもなく、ただそこ

で立つだけだった。

しかし、風の弾が雪哉に当たるものだけを選び抜くように、三発は雪哉の真横に逸れ、そして残りの二発が雪哉に接近した時、雪哉はその光子を放ちながら、光る右腕を振り翳す。結晶の左腕ではなく右腕。その右腕を左から右へと振り払うだけで、雨弓の放った凶弾はまるで無かったことにされ、そして振り払われた腕は光の軌跡を描き、残滓だけが残っていた。

「なんだよ、これは……聞いてねえぞ、ただ花晶を回収するだけだつて、そんな簡単な話だったんじゃないか」

雨弓の言つのも無理はない。

さっきまで無能な様を見せていただけの男が突然、花晶の力を持つ虹子を殴り、死ぬ一步手前まで追い詰めれば、今度は死んだ筈の理愛が雪哉の傍らでそつと姿を見せ、そして雪哉の容姿が現実から掛け離れたモノとなった。

黒の髪に銀を交ぜ、片目は黒から銀へと変色した。そして結晶のような左腕と、光輝く右腕。これをどう見て人間と呼べるのか？ どう見たってそれは異形そのものだった。

「化け物……」

「聞き飽きたな、それは」

再三としつこく言われては飽きもする。

雪哉には自分の姿が見えないから、今の自分がどれだけ人と異なつた形をしているのかはわからない。けれど、十分人間から逸脱していることだけはつきりわかっている。けれど理愛がいて、一緒に戦えるから、だからどうということはない。

雪哉は一步足を踏み出すだけで、雨弓の前に立っている。腕を振り振り、そして拳を突き出す。瞬間で距離を縮め、攻撃態勢に入っている雪哉を目にした時、雨弓は全身を戦慄つるもろかす。雪哉の右腕の形は、左腕の結晶を象つたものよりもずっと凶悪的なフォルムをしていたから。

爪先はまるで猛獣の鉤爪を模したように鋭く尖り、そして光は白

い翅の形を創造りながら、そんなを冷酷だけを視認させるその爪が雨弓に襲い掛かる。

「避ける、兄貴い！」

そんな時、虹子が叫んだ。雨弓はすぐにその場から転がる。そして雪哉の前にとてつもない速度で打ち放たれたそれは、樹だった。

「なにっ！」

力を手にし、変質を遂げた雪哉でもさすがのこれには虚をつかれた。

まるで樹が巨大な槌のように雪哉に襲い掛かる。

それは虹子の力によって放たれた脅威。

触れたものを吹き飛ばし、壊れるまで飛ばすのなら、触れたものを射出し、それを弾丸のように扱うことも出来る。大木をまるで槌のように。

一瞬で壊れて無くなってしまうとしても、少しの距離ならば凄まじい質量と体積で雪哉を押し潰そうとすることだけは変わらない。雪哉は飛び交う樹木を回転し、回避する。躲した樹木はやはり雪哉の後ろで粉微塵になって消えていく。けれども巨大な砲弾と変わらない虹子が撃ち出す樹。しかし虹子は雪哉に近づくことなく、そんな遠距離からの攻撃を繰り返す。

「どうした……お前は、お前の力で俺を殺さないのか？」

「アンタのその左腕が、厄介だから。だから私は悔むことを止めた。その姿、その力、私も覚悟したわけさ、堅実にもなる」

「そうか」

虹子はもう嗤わない。

明らかな異形を前に覚悟し、戦うと決意したその表情はまさに戦士。雪哉は最初から覚悟している。だからこれで同じ位置なのだろう。雪哉は左腕に力を籠める。そして真正面から虹子の槌を受け止める。

ただ左拳を振り抜き、折れた樹の砲弾に拳をぶつける。痛みなどなく、ただ衝撃による負荷が身体に掛かる。それでも耐えられた。

そして高速で振り放たれた拳はその巨木を破砕する。それは何らかの能力が発生したわけではない。ただその腕の硬度が常識を遥かに超えているだけ。

雪哉の左腕は偉大ではない。^{アンチ・マグナ}しかし凡庸ではない。雪哉自身は自分を凡庸であると思っっているかもしれない。しかしこの左腕は違う。その腕は雪哉のものではないから。

「死ねえ！」

粉碎した樹の向こう、雨弓は飛び跳ね、「ARK」^{拳銃}を構えていた。走りながら回転弾層を廻し再び装填。弾層こそ空ではあるがその中には大気が籠められている。雪哉は巨木を破壊し、拳を振り切ったことで一瞬の間が生まれた。雨弓は走る。撃たない。そして雪哉の懷に飛び込んだ。

「こんだけ近付きゃ、さっきの手品は出来ねえし、^{弾消し}躲せねえだろお！」

雪哉が右腕を振るうことで雨弓の風弾は掻き消された。しかし銃口が雪哉の胸元に突き付けられている。これでは右手を振り翳すこともできない。

「だが、いいのか？」

「何？」

雪哉は慌てない。何度も危険を前にしてきたのだ。死を目前にしてこうして生きて来た。どんな危機も脱してみせる。だから、雪哉は「左腕」を振る。

「なんだと！」

雪哉は雨弓を攻撃せず、その武器を叩く。巨木すら塵に変える強固なその腕が「ARK」を粉々にする。雨弓は目を見開き、そして自分の武器が破壊されたことに悪寒が走る。しかしそれでも雨弓はまだ諦めない。両腕を振り、風が揺らぐ。武器を失ったところで力が失われるわけではない。そんな風の刃が至近で放たれ、雪哉の身体を切り裂く。

たとえ異形であろうとも、身体は人間と変わらない。左肩から抉

り裂かれた肉が真つ赤な鮮血を迸りながら地上を染める。それでも、雪哉は崩れない。

「な、なんなんだよ！ テメエはよお！」

危機よりも恐怖の方が大きかった。

肉を裂かれ、骨を砕かれて尚、立ち止まらないこの男が。雪哉

それどころか雪哉は膝を地に突くことなく、腕を折り曲げている。右手の五指全てが折り畳まれている。

「ははっ、でも、でもよお！ テメエはよお！ 消せないだろう！」

さっきはビビったけどよお！ オレの風塵呼応はあ———」ゲイルヘイル

雪哉は無言だった。

理愛は雪哉の首元にそつと寄り掛かり抱き締める。

「俺では、無理だろう。でも、お前は気づいてない」

雨弓の眼前には竜巻のような壁を織り成し、そしてその螺旋が雪哉を喰おうと口を開く。そんな大きな風に逃げることなくただ拳を、前へ、前へ。

「俺には、理愛がいる」

風を裂く、光の右腕。翅を生やすその腕がその暴風を殺し尽くす。青藍と輝くその光の中に理愛が微笑む。恐慌の風が止まる。雪哉の右腕が振り上げられる。

「届くかよ、お前の手が、オレに！」

『届きます』

理愛が呟く。雪哉はその言葉の通りにその手を振り抜く。

そして完全に風は死に、その死を超えて雪哉が駆ける。

『どれだけ離れていたって、どれだけ届かなくなって、きつと———』その手は頂に触れる

「リゾン・ラーヴァ」———」

雪哉が振り抜いたその拳が理愛の言葉と共に雨弓を打ち砕く。

雨弓の右頬に拳は叩き込まれ、雨弓の身体はグルリと何度も回転しながら吹き飛んでいく。そして樹木に身体を打ち付けられそのままピクリとも動かなくなる。

偉大ではない、けれどその手は頂に触れることぐらいは、出来る。

どれだけ遠くても、その差が離れていてもきつと届く。この腕はそれを叶える為の腕。

「兄貴、やられちゃったか」

「あとは、お前だけだ」

雪哉が地面に倒れる雨弓から虹子に視線を移す。

「その両腕、お互いの欠点を補っているんだね」

「そういうことだな」

「私の能力も、兄貴の能力も、どっちもその腕に阻まれて届かないなんて、そんなの、ズルいじゃん」

左腕は花晶を、右腕は種晶の能力を消し去り、封殺するという力。それが理愛の力。けれど、

「理愛、「どっち」が本物？」

その言葉の意味が雪哉にはわからない。しかし理愛は虹子の言いたいことがわかっていうようだった。

結晶には名前がある。そしてそれは一つだ。だが、理愛が雪哉に与えた左腕とその能力。そして右腕にも違う能力が備わっている。

『わたしは……』

理愛は答えられない。理愛もわからない。

「どっち？ どっちでもない。どっちかだなんて言葉はいらない、理愛は俺の妹だ」

雪哉はその白い右手で理愛の頭を撫でる。どれが本物かなんて、本当の名前なんて、そんなものは雪哉には必要のない答えだ。いま必要なものは雪哉の家族であり、妹である理愛の存在だけだ。それ以外は必要だし、そんなもの欲することもない。そんな雪哉の言葉に虹子は肩を震わせる。

「本当の兄妹でもないのに、それなのにどうしてそんなことを平然と言えるの？ 自分の本当の名前も、ここにいう意味も、何も、無いのに、一緒にいることが出来るの？ 手放せばいいのに、そうすれば本当の日常は返って来るのに、このまま理愛と一緒にいたってこの世界で生きていけるわけがない。私達はいつまでも理愛を狙う

わ。大きな力は必ず征服されるものよ。一緒に生きるだなんて、兄妹で居続けることなんて、出来るわけがないのよ！」

「ふざけるな」

雪哉は歩く。

理愛は不安そうな表情を浮かべる。自分が何者かわからない。結晶であつたとしても、本当の名前はわからない。未知が理愛の行く手に影をさす。けれどその陰影で理愛の心に暗闇を満たすわけにはいかない。雪哉が虹子に歩み寄る。そして、雪哉は怒りの形相のままに虹子の胸倉を掴んだ。

「出来る、出来ないを勝手に線引きするな。お前の価値観を俺たち「兄妹」に押し付けるな——」

「押し付けもする、そんな狂った思想、イカレた能力、私だって、「本物」だった筈なのに、私より強いってえ？　じゃあ私がここで負けたら、私は、私は何の為に生まれて来たのさ！」

虹子の慟哭が森林を覆い尽くす。

結晶は能力を与える。それだけだ。能力を与えるだけの道具。それは花であろうが種であろうが変わらない。花晶であろうが、それは生きているだけに過ぎない。生きた部品。世界の一部でしかない能力を持った生きた結晶は、それを目覚めさせた者の道具になるしかない。

虹子は「ark」によって目覚めさせられ、役割を与えられ、そして理愛という結晶を回収しようとするこの町に來ただけだ。強大な能力を秘めた花晶として、道具として、そんな道具として行動する虹子の前に同じ境遇に立ちながら、生きる意味を履き違えた花晶を見せられればおかしくもなる。

しかしそんな絶叫する虹子を前に雪哉は嘆く。なんて悲しい存在なのかとそう感じざるを得ない。

「何の為に、と？　生きてるなら、それぐらい自分で探せ。そんなことも出来ないのなら、お前の言う道具とやらのままで、生きたまま死者のように彷徨っている」

それは雪哉自身にも向けられた言葉。

雪哉が生きるその意味は、理愛と共に生きること。

虹子の胸倉を掴む手が強くなる。結局、生きていれば生きるしかないのだ。時間は経過していくのだから、死なぬ限り止らないのならば、足掻くしかない。

「だったら、私はあ……アンタをお！」

胸倉を掴まれながら虹子は暴れる。そしてその手が光る。虹色の光を付与させたその身体が雪哉の全てを破壊しようと暴走する。そして雪哉は手を離し、左腕を――

「俺は生きる。だから、お前のような小さな壁に阻まれて堪るか！」
アンチ・マグナという結晶の左腕はただ虹子の腹部に叩き込まれ、そのまま押し出されていく。虹子の身体に埋没する七色の結晶が罅割れ、そしてその光がゆつくりと雪哉の中に流れ込んでいく。花晶を殺す腕。その腕で幾度と無く打ち付けられた虹子の身体は限界だった。そして終にその身は人の形を保つことすら出来ず、花晶は碎け、虹子は消滅した。

「……なら、理愛に、教えて、もらおうかな」

散り際、虹子は自分の死を理解していながらも消える最中、そんなことを言う。しかし雪哉は答えない。復讐の対象に掛ける手向けの言葉など持ち合わせていない。

「あ……」

そして虹子が完全にこの世界から消え去ると、理愛がふと声を上げた。

「どうした？」

「いいえ、なんでも……」

「そうか」

「そう、寂しかったのね、アナタは――」

傍らでそう呟く理愛ではあったが、誰に対しての言葉なのか雪哉にはわからなかった。でも、構わない。雪哉は気にすることなく、構えを解いた。

だが、

「トキト、ウウウウウウウウウウオオオオッッッ！」

まだ、終わりではなかった。

のたうち回り、そしてもがきながら雨弓が立ち上がる。これを倒して初めて終わる。全てが終わる。雪哉は両腕に力を籠める。

「終わりだ、雨弓。終わったんだ、そこを退けてくれ」

「ふざけんなあ！ 虹子ぶっ殺されといて、こっちが潔く退けるわけにはいかねえだろあ！」

ご尤もだった。

雪哉も理愛が死んだと思い、特攻した。なら雨弓だって同じだろう。たとえ結晶の塊であろうとも、自分の妹ならば、殺した相手を放置することなど出来るわけがない。

「アレだけバケモノを罵りながら、お前もバケモノの妹を手元に置いていた……何故だ？」

「はあ？ バケモノだろうが虹子はオレの妹だあ！ それが悪いかい！」

悪くなど無い。

もし、同じ道を歩んでいたのなら、共に手を取り合うことが出来るほどに共感できる感情を雪哉は抱いていた。どんな形であれ、自分の信じたモノならば、周囲に左右されることなく真っ直ぐに進むことの出来るその生き方。

「なら、どうして理愛を狙う……俺の世界に攻撃する？」

「……はあ？ 花晶はバケモノなんだよ、そんなバケモノがこの人間様の世界にのうのうと生きていることがオレは気に入らないんだよ……」

雨弓が大気を纏う。「ARK」を失っている今の雨弓の能力は爆

発的な威力を持っている。あの拳銃は自らの能力をコントロールする為に装備していたものだ。

しかし今は違う。見境無くありとあらゆる万物を切り刻んでいる。そんな暴風域の中心に雨弓が立つ。今、その壁に近付けば輪切りにされてただの肉塊にされてしまうのかもしれない。

「オレの妹はなあ、とつくの花晶のバケモノに殺されちまったんだよ！」

暴風が縦横無尽に駆け巡る。樹木を切り倒し、自然を裂きながら、雪哉を喰い殺そうと暴れ始める。雪哉はそれを跳躍しながら、竜巻と竜巻の間を飛び抜けていく。少しでも躊躇えば、動くことを止めればその風にその身を貪られ、解体される。右腕に宿りし光であるリゾン・ラーヴァは種晶の力を潰し壊すことが出来る。しかし右腕に触れるということはかなりリスクを伴う行為だ。右腕は無事であっても、他の部位が飲み込まれれば右腕だけが現世に残り、それ以外が喰い破られてしまう。だから今は出来る限り躲し続ける。好機を見つけ、生誕した雪哉と同じ復讐者を穿つ為に。

「虹子の誕生日だったあ、綺麗な雪が降る六年前だあ、ケーキを用意してえ、プレゼントも用意したあ！」

回避に専念する雪哉は竜巻を躲すことで精一杯だった。しかし、雨弓の叫びが耳に入る。その声が聞こえる。それはまるで雪哉と同じ。六年前に地獄を見た者の悲痛なる叫び。

「いきなりやって来た。気色の悪い蟲が、オレの家族を喰い散らかしたあ！ 気がついたら、オレだけだ……妹はあ、虹子はあ、どうなっていたと思う！」

雪哉は何も答えられない。しかし雨弓は言葉を続ける。

「はははっ！ 上半身が無くなってよお、足だけだあ！ しかも片足だけ。おい、おいおい、オレの虹子、どこにいつちまったあ！」

雪哉の動きが止まった。前方から、そして後方から襲い掛かる暴風が雪哉を呑み込んだ。躲すことができなかった。一番やってはいけない停止という行動を雪哉は取ってしまったのだ。それは同じだ

ったから。雪哉もまた六年前に、両親を炭にされた過去があつたら。

そんな映像を見せ付けられてしまえば、狂ってしまう。壊れてしまう。だから、あの時は理愛がいてくれたから、理愛が助けてくれたから堕ちてしまうあと一歩のところで踏み留まれた。

しかし雨弓は？ 妹が殺されたとするなら、それは……雪哉も同じことになっていたら、想像するだけでおぞましい。そしてそんなことを思ってしまった時、足がピタリと止まってしまったのだ。だから雪哉の身体は暴風に巻き込まれ、大きく開いた風の顎あぎとに喰われてしまった。

「だから、オレは殺すぜ。花晶をな。『ark』はオレを選んでくれたよ。オレには力がある。オレには戦う才能がある。そして……

「虹子」レムリアをくれた。あれから六年だ、大きくなってよ、綺麗になつてよお、オレが憎んでる花晶でも何でもいい、藁にも縋るつて言うだろう！ なんだつていいぜえ、矛盾だろうがなんだろが、だけどよお、もう一度オレの人生が始まるつてそう思つてたんだよ！」

暴風の向こう側、竜巻に吞まれた雪哉に雨弓の言葉が聞こえているのかはわからない。それどころか絶命しているであろう雪哉にその言葉が届くわけがない。それでも雨弓は言葉を続ける。何度も叫ぶ。叫ばずにはいらなかった。雪哉の存在が憎いから。自分と同じように妹を持ち、家族を持ち、それをしつこく守り続け、守り抜き、傍らに一緒になつて立ち向かうその姿が憎くて仕方が無かつたから。

虹子と同じ容姿。虹子と同じ名前。それでもそれが嘘だということとを雨弓だつて理解している。その現実から背を向け、役割を演じる虹子レイン・ボネルを妹だと、家族だと信じ込ませていた。

けれど雪哉を前にすると、そんな偽りで塗り固める自分を惨めだと思わせられていそうで、滑稽な自分の姿が許せなくて、だから、憤怒という感情で隠すしかなかった。そうすることしか出来ない自分を更に呪った。

それなのに、それなのに、まるで戒めのように、もう一人の自分のような、そんな「もしも」の自分が消え去った竜巻の向こう側で立っている。血塗れになりながらも、意識を保ち、呼吸を整え、はつきりとその世界に繋がっている。

「それで、どうして欲しい？ 憐れんで欲しいか？ 同情して欲しいのか？ それでお前が救われるのか？ お前の心は保たれるのか？」

「いらねえ！ そんなもんはいらねえ！ でも、オレはテメエが憎い！ オレから何もかも奪っていくのは、いつだって花晶だあ！ またオレは独りになっちまったあ！ 時任お！ だから、オレは、テメエを、妹をぶっ殺すツ！」

大きく両腕を振り、またも創造される暴雨という結界。

雪哉は回避することを止める。そして左腕を前へ。その光が再び大きな翼を描き出す。しかしその白き光の翹さえも、今の雨弓にとつては妖しく輝く墮天使のモノに見えて仕方が無い。

「なら、俺はお前を殺そう。お前の世界を、お前の全てを」

理愛の悲しげな表情も、今の雪哉は目もくれず、そして地上が陥没する程に強く強く踏み込む。そして飛翔した。直線的すぎるその行動に、雨弓は呆れ返り、そして再び両手を握り、巨大な竜巻を召還する。

「なんだあ？ その気味の悪い右腕でオレの能力を消してみるってかあ！」

竜巻の数は前方に四つ。しかも全てが雪哉を囲むように蠢いている。右手を振り翳しても消し去ることが出来るのは一つだった。だから、どれを消しても雪哉を囲むその檻が雪哉の身体を磨り潰す。けれど雪哉は前方の一つの竜巻を消すことしかない。残りの三方から襲い掛かる、雨弓はその光景を凝視し、勝利をこの手にしたと、心を奮わせた。

なのに、

「まだだ、まだ、まだだ、もっと、もっと遠くへ——」

届くのだろうか？ 触れることができるのだろうか？ その腕はその光は。頂に触れることだけを叶える腕なのだろうか？ なら、頂上に指先すら届いていないその右腕の名は偽りか？ 雪哉は心の中で叫ぶ。リゾン・ラーヴァという名を冠するその腕が、頂点に触れることが出来ぬなど、その名は嘘かと。真なる力を見せる。その腕は飾りではない。そうだろう、と。

「届け！」

雪哉の呼応が、力を与える。

雪哉の奮起は、力を消せる。

その左右の腕は、如何なる力も殺すことが出来る。

右腕の翅が大きく瞬く。その光が風を呑み、喰い返す。風は全て咀嚼され、全ての空間から風が死を遂げる。

「ふざけ、んなあ！」

雪哉は歩く。

「そんなふざけた異能ちからがなかったらあ！」

雪哉は歩く。

「テメエなんかよお……即死なのによお！」

雪哉は歩く、そして、その手が頂に触れる場所へ到達する。

「テメエも、いつか喪うんだよお！ オレみてえに！」

そして、

「そんな結末は来ないさ。理愛を、守護まもる。だから、来ない——」

ただ結晶の左手が、雨弓の身体を打ち上げた。

雨弓はそれ以上言葉を口にすることなく、朽ち果てた。意識が完全に途切れ、今度こそ地面の上で動かなくなった。白目を剥き、無様に泡を吹きながら、もう動かない。

けれどその様を見て雪哉は何も言わなかった。その目もまるで何か思い詰めたように。

雨弓はまるで雪哉の合わせ鏡のように思えた。もし理愛が、死んでいたのなら、あの六年間の乖離の果てで、理愛も一緒に両親と喪失していたとするなら、自分は雨弓のように壊れていたのかもしれない。背中に悪寒が伝った。恐ろしい、そんなのは御免だと、雪哉は嘆息を漏らす。

『終わり、ましたね』

「ああ」

そして全てが終わった。

『兄さん、殺さないんですか？ この人を……この人を殺すと、兄さんは言っていましたか』

「殺さないさ、理愛が死んだから抱いた殺意だ、理愛が生きているのなら雨弓は殺せない」

詭弁かもしれない。

虹子は死んだ。なのに、雨弓は殺さないなんておかしいのかもしれない。それでも殺すことは出来なかった。人間を殺す選択を選ぶことなんて、そこまで強く生きて来れたわけではない。

『虹子のことですけど』

「ああ」

『死んでませんよ、なんだか、兄さんがやつつけたとき、わたしの中に流れて来たような、そんな気がしましたから』

「そうか」

雪哉はそれ以上何も言えなかった。もしそうだとしても雪哉の手で、雪哉の意思で虹子を殺したことは変わりない。消える一瞬、理愛と同じように七色の結晶の塊になったのだけはわかったが、その結晶もまた粉碎し、そして霧散してしまったから。しかし、そん

なことよりもだ――

「理愛、お前、いつまで俺の肩に寄り掛かっているつもりだ？」

雪哉はついそんなことを言ってしまう。重みも感触も何も感じられないが、このまままるで磁石のようにくっ付いたままというのも考え物である。それにこの異形な容姿。半分が銀と色に染まる雪哉もさすがにこのまま山を降りるのは問題があると思った。

『そ、そんなこと言われましてもわたしもどうすればいいのか……』

「こういった力による融合は、意外と感情で操作コントロールできるものだ。やってみる」

『に、兄さん……なんか詳しくありません？』

「くくく、装着型の聖異物は古き悪しき時代で見たことがあるからな」

『……相変わらず、なんとというか「死ね」といいなくなります』
帰還かえってきた。

このふざけた会話。馬鹿みたいな兄の言葉。そしてそれを辛辣なままに剣呑な目で見つめる妹。これがいつもの形。それが瞬間で戻ってきた。あれだけ命のやり取りをし、死の横を歩いてきた筈なのに、今はどうしてこんなにも愛おしい。当たり前が、こんなにも美しい。

『と、とりあえず……』

理愛は雪哉に言われた通り、心の中で「離れろ」とか「外れろ」とかそんな感じの台詞を呟きながら、雪哉の身体から離れたいという意思を浮かべる。すると、どうだろう……雪哉の身体はゆつくりと風前の灯のように光は小さく、そして消えた。白い翹も、銀の髪も瞳も、まるで元通り。雪哉の右腕は人間のものに戻り、左腕は結晶のまま、元の身体へと回帰した。

「す、すごい……兄さんの言う通りなんて」

まさか雪哉の言う通りにしたただけなのに、元の身体に戻るだなんて思えなかっただけに、こうも簡単に事が運ぶと返って怖いぐらいだった。しかしこの世界に再び生還いきかえることが出来るとは思って

なかっただけに度重なる奇跡の中でこうして再び地を踏む事が出来たことに理愛は感謝する。

しかし、そんな感謝の気持ちで溢れる理愛を前に雪哉はというと啞然としたままボカンと口を開けたまま動かない。こうして帰って来たというのに、もう少し嬉しそうな顔をしてくれたっていいのに、なんて理愛は不満げに頬を膨らませるのだが――

「理愛、どうしたんだ……その格好は……ッ」

「……………へっ？」

自分でもやけに情けない声を上げたと思っただけ、そんなことよりも雪哉が指差す方を見る。それは自分の身体。なんというところか、理愛は自分の身体を見た時、驚愕するしかなかった。

だって、今の理愛の姿は一糸纏わぬ赤子の姿となっていたのだから。

「り、理愛……そんな破廉恥な姿、どうかと思うぞ。たとえ兄の前であっても、そんなことをしては、いけないんだ、うむ」

雪哉はコホンと咳を。そして理愛は顔が爆発するであろう、ボンッという擬音が聞こえる程に

真っ赤に紅潮し、そして大事な部分を隠しながら、

「に、兄さんが破廉恥です！」

凄まじい速度で理愛の右拳が雪哉の顎を砕いた。

雪哉は声を上げること無く、そのまま地面に倒れた。

「ははっ、不味いな……血が出すぎたなあ、もう、無理だ……」

そしてそれが決定打。

出血死してもおかしくない量の血を流し続けた雪哉は限界だったのだ。そして今の一撃はそんな雪哉の意識を繋ぎ止める最後の一本の糸を断ち切る威力だった。雪哉の意識が消えて無くなるには充分すぎる。

そして、日常への帰還と一緒に、雪哉の意識も遠い別の世界へと帰還したという。

1―20 塞げ、言葉（エピローグ）

1―20 塞げ、言葉

深淵があつた。

闇黒の中、小さな光が見えた。

そんな小さな光を今まさに喰い潰そうとする闇の下で、大きな円卓に座る人影。

そんな円卓を囲むように座り、声が並ぶようにして上げられる。端から聞けば、何を言っているのか、何を喋っているのかわからない程に、早く言葉が上げられる。そんな戦場のように激しい轟音を、会話と呼ぶのは間違いなのかもしれない。だが、言葉はただ乱雑に撒かれていく。

「やはりこうなってしまったね」「ははっ、いいじゃないか。順調ではないかな」「いやはや、本物には勝てないか。力も、絆も、全てが劣るか」「妹役を当てて、兄に仕立て上げたつもりだったが、やはり脳味噌を少し弄ったぐらいでは、あの子らを止めることはできないようだな」「酷いことを」「どれだけ此方が小細工をしたところで、あれは出鱈目だ」「星に手は届かない、わかりやすい存在ですよねえ」「嘘の席に座らせた時点で、敗北は決まっていたよ。無駄だったかね？」「いいえ、成功ですよ。無駄ではないです。十分すぎますね、成功です」「そうか、それならよかった」「……それで、どうする？」「ははっ、そうだねえ、じゃあ次は自分が組みましようかね？」「君は少々、やり過ぎるところがあるが、今は人手不足だ。すまないが頼めるかね」「ええ、構わないよ。そろそろ新しい玩具が欲しいと思っていたところでした」「頼むから、君の持っているアレと同じようなことはしないでくれよ、使いモノにな

らない——なんて、そんなことになってしまったら大変だ」「そうですね、自分としても別にアレの強弱は関係ありませんので、ついついやりすぎてしまつて。でも安心してください、ちよつとだけ壊すだけなら問題ないでしょう？ やりすぎて壊してしまつては自分が危ないですしね」「次はいつ？」「近々」「早急」「まあ、待ちたまえ」「そうだなあ、まあ、少しだけ時間を上げててもよろしいのでは？」「今回だけは特別に」「確かにここまで来るのに少々、急ぎ足だったかと」「とにかくちよつとだけ待つてあげよう」「そうだな、まだ時間はあるか」「我慢できないね」「ちつとも」「でも、少し待つ」「しかし、こうも上手いくと、怖いものですね」「最高級の餌で最高級の魚が釣れなくては此方も困りますかね」「まあ、いいでしょう」「そうですね」

そしてあれだけ激しかった音が急に止む。
時間が止まる。全てが止まる。

「諸君、もうしばらくの辛抱だ。永遠に近付く為に、今しばらくの猶予を」

注がれるは赤い液体。それは酒^{ワイン}だった。

「では、^{フアンタスマゴリア}いつか来る永遠の日」の為に——」

そしてその言葉と共に、合掌し、その血のような赤いワインを呑み干した。

「……」

目を覚ませば、いつぞや雨弓の凶弾で腹部を撃ち抜かれた時に運ばれた病院だった。

左腕には聖骸布が巻かれていた。いや、ほぼ全身に包帯が巻かれている。これでは重症患者だ。ダンプカーにでも撥ねられたか、なんて、雪哉はすぐに思い出す。

日常を掛け離れた非日常と対面していた。非現実を駆け抜けていた。左腕はまるで封印されたように白い布が異常を包み隠している。そして右腕は――「人間」のモノに戻っていた。

思ったより見た目はミイラのようにグルグルに巻かれているせいか酷く見えるが、案外身体はよく動く。痛いというより「重い」のだ。気だるいだけで、動こうとするその意思さえ抱けば難無く身体は動いた。そして鏡を取れば、髪も瞳も半身銀と化していたその異形がまるで嘘のようだった。

眩しかった。

外が、空が。何もかもが、眩しかった。

朝だった。

この陽射しを見る為に生きていたのだろうか。理愛が消えて無くなったままならば、もうこの陽日を見ることも出来なかっただろう。あれだけ死ぬことさえ厭わなかった雪哉が、今もこうして現世に存命している。

まるで諧謔。どれだけ眠っていたのかはわからない。しかし目を閉じる前、あの夜。理愛と共に飛翔したあの日、まるで絵空事のような、そんな世界で、戦い、勝ち、前へ進んだ。

だから、日常がある。

そして――

「よっ、生きてるう！」

パイプ椅子背凭れに身体を預け、胡乱という腐った臭気を放つ男。
瀧乃曜嗣だった。

朝日を拝むのも忘れて雪哉はその胡散臭い男を不審げな瞳で見詰めてしまった。

「いやあ、理愛ちゃんから電話があった時は驚いたね。行ってみれば雪哉くん、ほぼ上半身裸でしかも血塗れで寝てるもんだから、オラチンの口から言えない凄いことしてたと思っただけ」
相変わらずだった。

道化が雪哉の前にいる。けれどそれは恩人。どれだけ不気味でも、疑わしい人間であっても、侮蔑を口にしてはいけない。

「程々にしてよお、連載できなくなっても構わないよお？」

「勝手に俺の人生を書籍にしないでください」

「まあ、まあ、そう言わずに、生きててよかったねえ。さつさと実感してよねえ」

「それは——」

言い切るより早く、曜嗣の言葉の意味を理解する。

雪哉のベットの横、小さな机に突っ伏して、頬の肉が押し潰れるぐらいにそれは可愛げな寝息を立てて眠っている。理愛が寝ていたのだ。

「シーっ」

曜嗣が人差し指を口に当てて、息を漏らしていた。

静かにしろとも言いたいのだろうが、その本人が騒いでいたようにも思えたので納得できない。

そんな片目を閉じて、人差し指を立てる曜嗣ヘンタイが小さく口出す。

「芸術的だよねえ、まるで聖母だあ。理愛ちゃんって可愛いよね、ね？ 雪哉くん」

「ええ」

否定する気など微塵もないので、すかさず答える。

「オラチンの嫁さんにしたい」

「芸術的な頭脳構造ですね、くたばれ」

曜嗣の発言を完全否定しつつ、死刑宣告しておく。

今はただ陽の光よりも、理愛に視線を。

これだ、これを守る為に雪哉は戦ったのだ。そしてここまで来れた。幾度と無く試練は雪哉を襲ったものの、こうして何も失わずに来れたのだけは奇跡だろうか。

いや、それは違う。雪哉は首を横に振る。

これは勝ち取ったものだ。必然だ。決まっていたことだ。

雪哉は最後まで選んだ。

だから、これは、そう——選出だ。

雪哉は選ばれたのだ。

勝者は先へ進むことが出来る。そしてこれからも勝ち続けなければいけない。理愛を狙う輩がいるのなら、その脅威は退かなければいけない。戦わなければいけない。いけない。

けれど、今は勝者の余韻に浸らせて欲しいと、雪哉は理愛の寝顔をジッと見る。何の為に逸脱たなかうのか、ただの無能力者が、何の力も持たぬ、出来損ないが、ただ与えられた力だけで、その先へ進もうとするのか、

「理愛と、一緒に……居たい、それだけなんだ」

それは単純明快で、至極当然のよう。同じ、だろう。そうだろう。それでいい。

たったそれだけの理由。小さな覚悟を胸に、信念一つで、世界の反転さえ耐えられる。

そつと雪哉の銀髪に触れた。

滑らかな絹のような感触。川のように流れるその長い銀にいつまでも触れていたいと指先がその銀の上を流れていく。そして毛先まで指は伝い、やがて離れていく。

「んんっ……兄さ、ん？」

理愛はゆつくりと目蓋を開け、目尻を指で擦る。口を開き、その欠伸を両手で隠している。

そんな理愛を雪哉はただ黙って見ていることしか出来なかった。何と声をかけていいのか、こんなにも近くて遠い。この不可解な距離感をどうすれば縮められるのだろうか、雪哉は眉間に皺を寄せる。

「兄さん、あれから「また」一週間も寝ていたんですよ」

だがそんな距離感は容易く零になる。だって動いたのは理愛だったから。

立ち上がると、理愛は雪哉の横へ。

「まったく、心配させないでくださいよ。そりゃあ……「前」と比べればまだ我慢できましたけど」

結局、曜嗣に言われた一週間の謹慎の倍の時間、雪哉は学校に行かなかった。行けなかったと言っべきだろうか。しかし学年が上がったばかりだというのに学業を疎かにしては、後に繋がってしまう。自業自得だ。受け入れるしかない。それでも、今はそんなことで後悔している場合ではない。

「あ、灌乃さん」

不機嫌そうに苦言を並べながら、理愛は腕を組む。そして曜嗣が視界に入るとその腕を解いてペコリと会釈。

「やぁ理愛ちゃんおはよう」

そして曜嗣は椅子から離れ、いつの間にやらタロットカードを何度も切りながら病室から退出しようとする。

「じゃあオラチンは帰るよ。ト。ネで録ったアニメ見ないと」

そう言っ、手を振り病室のドアに向かって、

「選んだんだろう？ 進めよ」

いつもとは違う真面目な口調。

茶化すようないつもの調子でもなく、敬てなければ聞こえない声。だがその言葉を雪哉ははっきりとしっかりとその耳で聞いていた。言われるまでもないと、雪哉は一切の反応を見せず無表情のまま、

ただ黙止した。

曜嗣は、病室を退出した。

「今回ばかりは瀧乃さんにも感謝してます」

曜嗣のことはいつも悪いように言う理愛が世辞を言うのはかなり珍しい。

「俺を負ぶさつてくれたとか？」

「まあ、その通りです」

この辺りの話は過去のことだ。血塗れで上半身裸で倒れていた、などと無様な姿を見せていたことは曜嗣から聞いている。だからもうこれ以上格好の悪い話はしたくない。雪哉はそれ以上は聞くことはせずこの話はここで切り上げる。

——とは言うものの、やはり雪哉から会話を切り出すのは難易度が高いようで。

瞬間で距離を零にしてくれた理愛も黙り、気まずい空気だけが流れていた。立っていた理愛は自分が座って椅子に腰掛けていた。

やはり、気まずい。

おかしい。兄妹だろうに。どうしてもいつものように軽い気持ちで会話を切り出せぬのか。

相変わらず無能な兄の姿が、そこにはあった。

「兄さん、お身体のほうはいかがですか？」

「大事無い、と思う。見た目は大袈裟だが痛みはない。大丈夫だ」
そう言つて、手を上げてみる。

本当に痛みは無かった。裂かれたし、折れもした。身体は酷使し、壊死こわれもした。それでも今、こうして病室のベッドの上で五体満足のまま生きている。

しかし、会話はここで途切れた。

「きよ、今日「も」いい天気ですね」

理愛が気を利かせてそう言ったのだが、よもや会話の出だしが詰まったとしてこんな切り出し方を使うとは思わなかった。しかし、
「今日も？ 昨日「も」晴天だったのか？」

雪哉が目を覚めたのは今日。昨日の天候は存じていない。雪哉の言い回しに理愛は気がついたのか、申し訳なさそうな顔をして床を見つめている。雪哉はしまったと思いつつも、吐いた言葉は呑み込めない。取り返しもつかないので逃げるように黙殺することにした。

「昨日は、雨でした」

「ああ……そうか……」

致命的すぎる。

結局、ここで再度会話が途切れてしまう。

弾を撃てば不発する理愛に、そもそも装填する弾がない雪哉。状況は最悪だった。

数分程、経過しただけだったが正直雪哉は息が詰まりそうだった。白いベツトの上で溺死したくはない。とにかく、何でもいい。雪哉は小さく呼吸を整える。

「兄さんにお願ひがあります」

意を決した雪哉だったが、その覚悟は徒勞に終わった。

やはり最後まで先手を打って来るのは理愛だった。

「言ってみろ」

「二つも、あります」

「いい、言ってみろ」

「わたしは、兄さんの妹でいてもいいですか？」

「それは願ひではない。叶っているのなら、願ひとは違う。そういうことは言っない。聞きたくない」

雪哉は鋭利な刃物のような言葉で理愛の願望を切り捨てた。

聞きたくはないのだ。それは雪哉の願ひだから。自分が兄でいいのかなどと、そう思う。だが、雪哉もまたそんな言葉を吐くことはない。その言葉は自分の弱さを口にすることだから。だから、理愛のそんな台詞が、まるで自分の台詞のように聞こえて、理愛を叱咤する為に雪哉は返答したのではない。自分の弱さを違う声で聞かされていような、そんな気がしたから。だから、聞きたくなかった。

のだ。

「では、一つだけ」

「それでいい」

理愛は床に視線を向けたまま、雪哉を見ずにスカートを両手で握る。そんな強く握っては、皺になってしまふ。止めると言いたかったが、雪哉はただ理愛の次なる言葉を口にする事だけを待った。

「わたしが何なのかわかりません。花晶^{けっしょう}だなんてよくわからないですし、生まれた頃の記憶は殆どないです。わたしの記憶は兄さんの「妹」になれたあの日からしかないと言ってもいいです。だからわたし、何のかわかりません」

理愛が立て続けに言葉を流す。その言葉の濁流を雪哉はただ受け止めるだけ。

「わたしは、「わたし」を知りたい。だから、兄さん、わたしと一緒に探してくれませんか？」

「それならお安い御用だ」

自分がわからない。未知という存在。それはとても恐ろしいことだ。

自分が何なのかなんて、そんなのおぞましいじゃないか。

結晶の子。種を超える花の結晶。生きた結晶。「行き」続ける結晶。

異常なまでな力が、世界を変えてしまふ。

理愛が雪哉と同じ高校へ入学して、たった一ヶ月。

雪哉も理愛も、生き方を随分変えられてしまった。

たった一度の戦闘で全てが終わったとは思えない。それでも、今はまだ。

だからこの戦いは、手に入れる為の戦い。

平穏を、記憶を、全てを手に入れる為の戦い。

理愛の銀の瞳に意志の光は強く、雪哉は返す言葉が見当たらなかった。

それが理愛の願いならば、叶えてやれるのならば、こんな自分で

よければ、なんて——そう思う。

だが、それだけなのだろうか？

願いを叶える為の助力を貸すだけで、いいのか？

それは違う。

「なら、俺の願いも叶えてくれるか？」

「ええ、わたしが出来ることならなんでも」

それなら何だって出来るな、と雪哉は心の中で呟く。

「理愛」

「はい？」

「好きだ」

「はい、……………はいっ!？」

頷いたと思ったら、頷きながら理愛は大声を上げていた。病院では静粛に。後で看護婦が飛び出して来て、怒られたとしてもそれは雪哉のせいではない。原因は雪哉にあるだろうが。

「い、いきなり何を言ってるんですか!」

「いや、本当のことだ」

事実だ。

血は繋がらず、人としての繋がりも無く、人間の兄と結晶の妹という関係。

ずっと守りたい存在。六年前の地獄じごくから生きる意味をくれた存在。左腕を、絆をくれた。与えてくれた、掛け替えの無い——妹。

だから好きだ。この想いに偽りは無く、喻え世界がそれを狂っていると選別しても、世界という天秤から堕ちたとしても、それは世界の分別でしかない。雪哉は此処にいる。理愛の手を取る。躊躇いなんて最初から無い。嘆きなんて吐いた覚えも無い。

何処までも往ける。

でも、それには理愛が必要だ。だから、

「理愛、俺の手を取って欲しい。これからも、この先も」
信じて欲しい。

それだけだった。

格好の悪い処ばかり見せて来た。無様で、滑稽で、軽蔑され、唾棄されてもおかしくない姿ばかり見せて来てしまった。それでも、信じて欲しかった。

だから、雪哉の言葉は切望だった。

理愛を失うことが、終焉だから。この手を取ってくれるだけでいい。それだけで先へ進める。

「死ね」

そんな雪哉の言葉に理愛は辛辣な一言と剣呑な視線で責め立てる。「そんなこと言わなくていいです、兄さん。わたしは兄さんと一緒にいたいだけなんですから」

その手が包帯で包まれた雪哉の傷ついた手を握る。

冷たく、氷のような手。けれど、この冷たさが、今は心地良い。終わらない。まだ、終わらない。終わりにはまだ早い。

まだ始まったばかりなのだから――

「べ、べべべ別に、兄さんのことが好きだからとか、そんなんじゃないんですから。そ、そりゃあ、兄さんのさっきの台詞は**好き**びびつくりしましたけどどど、ともかく、わたしはですね、そのですね、ああ、なんですかね――」

言葉が破綻していた。最後まで言い切れていない。

そんな狼狽する理愛の表情を見て、雪哉の頬は緩み、口元が綻ぶ。ああ、その顔が見たかった。その顔だけを見ていたい。

雪哉は理愛の頭を撫で、そして自分の顔へ近付けた。

そしてそつと理愛の言葉を、塞いだ。

「prologue . . .了」

1-20 塞げ、言葉（エピソード）（後書き）

一ヶ月とちょっとでしたが、ありがとうございました。
こんな感じですが、まだなんか続きそうです。

登場人物・用語集（1）（前書き）

ネタバレを含みます。「prologue・-兄妹-」を読み
終えてからの閲覧をお願いします。

無事に序章を書き終えることが出来たので作者の息抜きで書いた
ものです。

本編でちゃんと説明できていない用語とかの登場人物の紹介とか
を下記に書いていきます。

作品の世界観をぶち壊すような書き方をしているので、あと別に
いらぬような説明もされていますがお気になさらずに。

登場人物・用語集（1）

■ A r k

アーク研究機関。六年前の結晶の飛来。墮落によって姿を見せた結晶。

その結晶の研究をするために設立された組織である。
しかし結晶は実はすでに数千年年以上前に発見されており、ずっと前からその研究はされていた。

■ A R K

「A r t i f a c t ・ R a d i c a l ・ K n o w s」の頭文字三つを重ねた用語。

結晶を科学の力を用いて抽出し、能力者の力を増強させる為に作られた謂わば「武器」

本来の「科学」の意味とは語弊がある。この装備を元に、使用することで能力を増強することで意味を成す。また能力を安定させたりと恩恵は大きく、多い。ちなみに形は様々である。

■ アンチ・マグナノそれは偉大とは違う

包帯で隠した雪哉の左腕に秘められた「異能」だが、その左腕は理愛に与えられた腕であり、その腕の能力であるからして、雪哉は結局ただの無能力者である。

包帯を解けば透明なその結晶は姿を現す。結晶と同じ透明度。そんな不思議な腕。

とても硬く、頑丈。傷一つ付かず、その強固は盾として使うこと

も出来る。

そして本来の能力は触れれば「花晶」^{レムリア}（＝「花晶」に関しては後述にて記載）が発動する能力の封殺が可能とされている点。しかし花晶の能力「のみ」に有効。

凄まじい能力だが、欠点がある。偉大ではない。そして雪哉自身、偉大ではない。

■ 査定団（イグザミナ）

Arkが作った戦闘集団。異能等を使用し、治安を乱す者を裁く集団。

ただの行政機関ではどうにもならない場合、査定団が動くことになっている。また能力を見極める為に動くこともある。

■ 最期

死^おわりの前。

■ 最後

終わりの前。

■ 界層（かいそう）

花晶（レムリア）に秘められた異能の段階の事を指す。

本来、結晶が与える能力は一つだけしかない劣悪品とされているが、その結晶の中でも頂点とされている、花晶には段階を踏むことで能力が強大なものへと進化していく特性がある。

まず「第一界層」だが、これは潜在能力を飛躍させる。その為、

運動能力や反射神経、五感が超越される。よってこの時点で十分戦うことは出来る。またこれは能力そのものを使用しているわけではない。所持者の補助のようなものである。

そして「第二界層」からが本来の能力であり、その花晶の基本となる。ここからは千差万別であり、能力は様々なので省略する。更にその上――

■ 種晶（シード）

結晶の下位。持つのではなく、身体に埋めることが必要。

しかし装備しただけで能力を発動できるわけではなく、選ばれた者だけが使用できる。

これにより有能力者が無能力者が決まることとなる。今や高度な能力を使える人間が未来を有望されることとなっている。

そんな世界に仕立て上げてしまった透明の石である。

そんな世界の摂理さえ変えた結晶も、所詮は下位でしかない。

花晶から零れたただの断片。そんな搾りカスが今日も人を狂わせている。

■ 種晶保有検査

種晶は身体に埋め込まなければ意味を成さない。

よって、見えない部分に埋め込んでいる可能性もあるので、それを調べる必要がある。

これは国の義務で定められている。

■ 序列（じょれつ）

能力を持つ人間を数字によって分類している。
それは四十三位まで存在する格差。
当然、数字が若ければ腕のある能力者ということになる。

■ 聖骸布（せいがいふ）

雪哉の左腕に巻かれている白い布。
ただしただの布。どこにでもある包帯。
どこぞの神様を巻いた聖なる布ではない。ただの、ただの布だ。
何の意味もない、何の役にも立たない、異形を覆い隠すだけの布。

しかしそれはスイッチだ。
敵と認識した時、外される。攻撃態勢に移行する為のスイッチ。

■ 厨二病（ちゅうにびょう）

インターネットスラング。

それは、人に幻想を抱かせる観得ぬ病。妄想が人を変える。
本編の主人公である時任雪哉ときとうゆきやが疾患している。

この症状は人を別物に変えてしまうおぞましい病であり、タイプも千差万別であるが、時任雪哉は凄まじい力を秘め、その力を隠し、いもしない謎の組織と戦い続けているなどという夢想起きたまま見ている。勿論、発症した理由は他にある。

ただ、この病は特効薬や効果的な治療方法も見つかっていない。
罹れば終わりである。

■ 時任 雪哉（ときとう ゆきや）

本編の主人公。高校二年生。無能力者。

六年前の飛行機墜落事故の被害者であり、唯一の生還者。

しかし、その時に左腕を損失。理愛に与えられた左腕が変わりとなっている。

前髪を無駄に伸ばし、左腕には包帯を巻いているという不審者。

勿体無いのは170センチ後半の身長で、一般的に美形に分けられる容姿ではあるにも関わらず、「厨二病ちゅうにびょう」という病気を患っているせいで、その満足さは残念に反転している点。

不可解な言動等が変人さに拍車を掛けており、そのせいで理解者は皆無である。

よく台詞で出てくるルビが振られた謎造語は全てこの男の妄言でしかないので、騙されてはいけません。ちつとも本編には関係なく、そんなものこれからも一生出てきません。こんなもん使えません。そもそも使いません。

そんな病気に罹った理由、それは妹の理愛を守る為にした虚勢である。強さを嘘偽りで塗り固めているがそのベクトルが間違っているという。

好きなモノは書くまでもないので省略。こいつ病気。頭の中が爆発してる。そもそもそんな感情一つで死に掛けても前に進もうとするその姿勢——変態です。

異能ちからは持たないが、理愛から貰った左腕には「アンチ・マグナ」という能力が備わっている。本来の武器は覚悟と信念のみ。これだけが雪哉の唯一の術。

■時任 理愛（ときとう りあ）

雪哉の妹。高校一年生。口癖は「死ぬ」と度々、雪哉は殺されている。

長い銀の髪、銀の瞳をしている為、周囲からは異質な目で見られることが多かったせいかな人間嫌い。友達を作ることもしせず、孤立を決め込んでいる。

雪哉と同じ高校に入学してから行った「種晶保有検査」にて結晶が感知される。

人間ではなく、その正体は結晶。レムリア花晶の一つである。（＝「花晶」に関しては後述にて記載）

異能としては、「リゾン・ラーヴァ」という能力が備わっている筈なのだが、単体での使用は不可能。雪哉を触媒とし、雪哉の右腕を使わなければ発動すら叶わない。（＝「リゾン・ラーヴァ」に関しては後述にて記載）

■夜那城 切刃（やなぎ きりは）

雪哉の数少ない一友人（？）である。無能力者。

種晶を首元に装備しているが、髪の毛を伸ばし隠している。

雪哉の妄言に平然と着いて来るのだけは同じ病気を患っているのか、それとも？

■瀧乃 曜嗣（たきのようじ）

タロットカードを持ち歩く謎の男。雪哉と理愛の保護者。

白衣に無精髭、眼鏡といったきな臭いを形にした男。胡乱とも言える。

今はまだこの程度の説明しか出来ない。

■月下 雨弓（つきした あゆみ）

雪哉の最初の敵。高校三年生。有能力者。
ゲイルヘイル序列七位。能力は「呼応風塵」である。

その能力は風を操る。

■ 月下 虹子（つきした にじこ）

高校一年生。理愛と同じクラス。

栗色の髪に、虹のように何色にも変わる不思議な目を持つ。
姓は雨弓と同じだが兄妹ではない。花晶の一人。

覚醒した雪哉と理愛の前に敗れ、消失。よって死亡。
雪哉の目には明らか死んだかに思われたが……？

■ 飛行機墜落事故

六年前に起こった大きな事故。雪哉と理愛も同乗していた。
突然の爆発。原因は不明。唯一生き残った雪哉と理愛。両親は死
亡。

そしてそれが始まり。全てが変わった日だった。

■ ファンタズマゴリア / いつか来る永遠の日

そ——は、s / おお終

■ リゾン・ラーヴァ / その手は頂に触れる

理愛の花晶としての能力。その能力は種晶の力を殺し切る。また
銀光の粒子を撒き、翅を象る。そしてその光に触れても能力は掻き
消える。当然、翅であるからして飛翔も出来る。

しかし単体で使いが出来ず、別の相手に分与することで初めて使
用できる。雪哉に取り憑き、雪哉の右腕にその力を付加させるので
ある。その際、髪色と瞳の半分が銀色になる。

しかし、雪哉の左腕も理愛のモノ。そして能力の名こそが本当の名前。

さて、どちらが本当の名前か？ それとも……別の？ いや、それはまた後の話。

■レイン・ボネルファ／虹壁は全てを遠ざける

虹子の花晶としての能力の名前。そして真名。
本来、花晶は少女を象つてはいるが所詮は結晶。物。道具である。
よって、能力の名こそが本当の名である。

能力としては単純に、触れれば吹き飛び、止まったところで壊れるという出鱈目。

しかし雪哉の花晶の力を封じる左腕の前に無効化され、敗れてしまった。

■花晶（レムリア）

結晶の上位。この世界の裏側にあるもの。

人は種晶を本物と思っているがそれは違う。少し夢を見ているだけに過ぎない。夢のような事を現実でやってのけることが出来れば、勘違いもする。

だが、種は種。花を咲かせなければ意味はない。花晶こそが本物の結晶であり、至高。

その能力は種晶を遥かに凌ぐものばかりである。そして本当の結晶は石ではなく、幼い少女とされている。結晶の中に少女がいる。その結晶は棺のようなものなのだ。そしてその破片が種晶であり、中身が「本物」である。

そして雪哉の妹である理愛もまた、その結晶そのものである。

■無能力者（むのうりよくしゃ）

何の能力も持たない人間。また「ヌーブ」と言われる。なりたがりの出来損ない。種晶を装備しても能力が発現しない者を言う。

これは能力を望んでも使えなかった者のことを指すので、元々種晶を装備していない者を指す言葉ではない。

しかし差別的な意味を持たせて、能力を使えない使わないに関わらず「能力を持たない者」をまとめてこのように呼ぶ場合もある。

■有能力者（ゆうのうりよくしゃ）

何らかの能力を持つ人間。また「コーダー」と言われる。

異能を使用する際、能力としての基盤を組み込み、読み込むことが必要である。これを脳内で行うことが出来るようだが、これが出来る人間は本当に僅か。まず能力を使用するということが未知そのものであるからして、想像出来ない。能力を使ってもそれを他人に説明することも出来ない。

ブラックボックスのような仕掛け。しかしそんな「箱」を開けることが出来れば能力を使用することが出来る。

今や能力を自由自在に操ることが出来れば、それだけで未来は明るくなる。称えられる。

登場人物・用語集（1）（後書き）

第一章は一週間後に。

2―1 あのを越えて

2―1 あのを越えて

六年前、結晶が地上に降り注がれた。

そしてその結晶は人々を進化させ、世界を作り替えた。

「超常たる異能。超越なる能力。それは「力」――

それでも、時任雪哉ときとうゆきやはそれを持たない。無能力者ちからをもたない。

常識から逸脱することではなく、非常識に接触することもなかった。

そう、妹である時任理愛ときとうりあいが人ではなく結晶であつたという事実を知るまでは。

最初は種晶が見つかったただけだと思っていた。けれど、それは違つた。

結晶の最高位――花晶レムリア。

それは少女を模した結晶。それを狙い、襲ってくる者を退けることは出来た。

しかし、それだけだ。それしか出来なかった。何も解決はしていない。

だから、やっと始まつたのだ。

ゆつくりと成長し、前へ、前へ進んでいく。

これは何の力も持たない愚兄が、有力を与え、戦わせる愚妹の物語。

だからいつか見るであろう「わたし」を知るまでの物語。

そして、一切の力を持たぬ無能力者が全能たる結晶に立ち向かう物語。

そう、物語だ――

2 - 2 乖離への反逆

2 - 2 乖離への反逆

――神は死んだ

「兄さん、三日ほどお別れです」

もう一度、言おう。

――神は死んだ。

雪哉は神という存在を見ていない、信じていない。

けれど今だけは、そんな陳腐な台詞を言わざるを得なかった。

その一言は、時任雪哉を狂わせるには十分すぎた。

妹の時任理愛の突然の告白は、雪哉を錯乱させる程の威力だった。

通学路の真ん中で、雪哉は足を止めては動かない。理愛が雪哉の前を歩くような形になったが、すぐに雪哉の様子に気がついた理愛は振り向く。

「……と、言うことで兄さん、三日ほど留守にします」

再び呪いの言葉を口にする。雪哉は――

「理愛、エイプリルフルは先月だぞ？ 今日が五月一日だぞ？」

「兄さん、わたしは嘘を吐くのが苦手です」

「では、エイプリルフルの日に嘘を吐けなかったからか？ 確かに一度だけ許されるというのはとても魅力的だからな」

「そんな一回の為だけに、人を騙したいなんて思いません！」
「理愛、エイプリルフルは先月だぞ。今日は五月一日だぞ」
「疑問符が消えただけで、台詞が変わってないです」
「エイプリルフル、四月一日、今日、五月一日、嘘、駄目」
「鬱陶しいです、死ね」
戸惑っていたせい、終には単語を並べることしか出来なくなつた。しかしそんな滑稽極まりない雪哉は理愛の言葉で殺害された。二人は学校へ向かった。

事件と言つべきかどうか、ただ時任兄妹にとっては大きな事件だった。

理愛の身体に結晶が見つかったというだけで大事だったというのに、それはただ力を手にすることの出来る権利けつじょう——種晶シードではなく、結晶そのもの。

それは花晶レムリアであつた。少女の形を模した結晶。力そのもの。窮極的な異能そのもの。そう、理愛は「それ」だったのだ。

時任雪哉と理愛が知つたその事実。それを教えてくれたのが月下つきした兄妹だった。

この世界のどこか——「Ark」と呼ばれる組織が存在する。結晶を研究しているという、そんなお伽噺の世界の集団。しかしそれは夢想ではなく現存する存在。世界を大きく変革させた原因。世界は「異能ちから」を認知してしまった。そして、誰もがそんな能力を身につけることを許された世界。強大な力を探し求める「Ark」が作ったのは「査定団イクザミナ」だ。

月下兄妹はそんな戦闘集団の一員であり、理愛を強奪しようとした。雪哉を殺人しようとした。

しかし、その脅威は何とか撃退することができた。

理愛は花晶であることを受け入れ、雪哉は無能であることを受け入れた。

だからこそ月下虹子を殺し、月下雨弓は斃たおされた。

全てを受け入れて雪哉と理愛は先へ進むことを選んだ。

こうして月下兄妹を撃破することが出来たものの、それで何かが変わったわけではない。まるでそれはなかったかのように、日常そのものは変化せず、二人はまるで最初から「居ない」ものにされていた。まるで脚本が添削されたように、登場人物が削除されてしまった。

誰もが二人が消えたことに疑問を持つていないようだ。勿論、そんなことはあり得ない。人物が二人も消えて無くなるなどと、そんな異常性に疑いを抱かない時点でおかしいのだ。

だけど、人は「納得」してしまった。しかも教師らは虹子と雨弓はどこか遠くへ行つたと、引越したなどと、そんな理由程度で納得してしまった。所詮は他人。唐突に姿を消したところで、気にならなければどうでもいい。自分の人生に関与しないのならば、問題無い。

だから、終わってしまった。月下兄妹との関係は終焉した。あの夜、あの戦い、そして勝敗が決まってからというもの顔も見えていない。声も聞いていない。もう邂逅することも無いのだろう。

そんな別離を越えたところで、雪哉や理愛の世界が変わるわけがなかった。何も、始まっていなかった。だからあの結晶の力を身に宿した夜を越えるまでは、出発地点にすら到達していなかったのだ。理愛は、理愛のこの先の深淵へ進む理由を見つけた。そして雪哉はそんな理愛が路頭に迷うことのないように、道を示す。道を創る。道を歩む為に守り続けることだけを成し遂げればいい。二人は見つけたのだ。自分たちの物語の新たなページを。見えない暗闇の中で道を見出すことが出来たのだ。

始まりから、既にやるべき事ははっきりとしているのだけは大きい。何がこの先、待ち受けていても、それを乗り越えるための覚悟

と信念は持ち合わせている。

だが肝心の守護対象が突然、三日間の別れを告げた。雪哉が困惑するのも無理がない。守るべき対象が姿形を消すなどと、そんなことをされてしまえば雪哉はどうなる。最初、理愛にそう告げられた時、本当に雪哉の目の前は真っ暗になり、地面が音を立てて崩れたようだった。

なら、理愛は三日間もの間、どうして家を留守にするのか？

答えは簡単。林間学校だ。入学した一年生の最初の行事であろう。高原にある施設に宿泊し、校外学習を受ける行事。雪哉も一年生の頃には当然、参加した行事だったが「あの頃」はまだいい。まだ何も無かったのだから。

だが、今は違う。

理愛はきつと「Ark」^敵に狙われている。もし何かあったからでは遅い。だからこそ今、雪哉は三日間という時間も何も出来ず無事を祈るだけなどと、そんなことしたくはなかった。祈るだけならと

つくに祈っている。それでどうにかなるなら神も信じる。しかしどうにもならない。何も変わりはない。そんな無駄な行為に及ぶのなら、少しでも長く理愛の傍らにいたいことを選ぶ。

だが、それは不可能だ。

「七十二時間、四千三百二十分、二十五万九千二百秒、それまでの間、俺は無力に晒されるといつのか」

雪哉は小さく絶望を吐き散らかす。

それほどの膨大な時間を何も出来ずただ浪費しろなどと憤懣の極みである。

何かいい手はないかと考察するものの、何一つ手は浮かばず学校に到着した。

何か。

そんなことを考えながら自分の席に座る。しかし雪哉自身も一生徒な為、サボタージュなどという手を使うことも出来なかった。雪哉は優秀ではないが、だからとて常識まで失っているわけではない。いつだって自分が正しいことを行う。その覚悟は曲げぬが、それで全て自分の行動が正しいなどと湾曲した正当を周囲に押し付けるつもりはない。確かに月下兄妹の一件では長い間、学校を休んでしまったがそれは仕方が無かったことだ。

学校を無断で休み、それで理愛を追いかけるという手はどうしても選べない。それでも、もし他の手が無いのなら最後は悪しき行為とわかっていても、選んでしまいそうだが。

「どうしたんだい雪哉、いつもより深く思考を張り巡らせているようだけれども？」

仏頂面のまま自分の顔に手を置いて席に就く雪哉に声をかけたのは夜那城切刃やなきりはだった。雪哉が前髪を伸ばしているのなら、切刃は後髪を伸ばしている。雪哉と違うのは人当たりが良く、愛想のある笑みを浮かべ見る者に好印象を与える所だろうか。雪哉は常に眉間に皺を寄せて目元を吊り上げているせいかどうかどう見ても近づき難い印象しか植え付けない。これが雪哉と切刃と違い。しかしこの二人は朝、いつも一緒だった。だってそれは、

「何か強い意志を感じるよ、雪哉。また戦いが始まったのかい？」

「戦い……そうだな、始まったな。今度の戦いは今までのものとは規模が違いすぎる。「図書館」の連中の相手をしている暇も無い。今は泳がせておこうと思う」

こんな風に「いつもの」不可解な会話が開始される。この二人はいつもこうやって他人が聞けば首を傾げるか訝しげに見つめるか決まったような会話になる。しかしそんな会話に唯一着いて来る切刃こそは雪哉の友人に値する人物なのかもしれない。雪哉自身は切刃を「友達」に分類してはいないが、いつの間にか無意識の内に自分の領域への侵入を許していた。どんな人間であっても、自分と「同

じ」ならば嬉しいものだ。孤独だった雪哉にとっては切刃の登場は大きかったことだろう。

そして今回もまた雪哉は切刃に愚痴を零すのである。

「理愛が林間学校でな」

「ああ、そっぴやそんな時期だね」

切刃は握り拳をもう片方の手の上に乗せて、そう言った。

雪哉が切刃という「友達」を手に入れたのはこの林間学校という行事のお陰であつた。孤立する雪哉に接近する他の生徒らは何人かはいた。その中には女子もいた。元々は背丈も高く、顔立ちも良いのか気になる女子もいたそうだ。しかし発言するは理解に苦しむものであつて、前髪で顔半分を隠し、左腕には包帯。そして拳句は顔に手を当てて、嘲笑すればただの不審者である。そんな奇怪な人間に好意を抱くのは余程のモノ好きでしかない。そんな珍妙に手を出す女性は逆に見てみたいものではあるが、今のところ雪哉に対して好いた感情を見せる女性は皆無に等しい。

そんな面妖に満面の笑みで手を上げては近づいたのが切刃だった。雪哉のように背丈は高く、長い後ろ髪に美形などと、それはまるで拮抗だった。当然、雪哉は切刃に対しても不可解極まりない造語を、妄言を並べたのだったが、そんな言葉を全て受け止めて、雪哉のよくな創造された新しい言語を言い放つたことは雪哉にとっても驚愕だったろう。それ以来、雪哉は切刃の接近を許している。

「どうにかして、理愛と一緒に行けないだろうか」

さすがに今の発言は切刃も虚をつかれたのか、言葉を失っている。多少の間が生まれたものの切刃はそんな雪哉の発言に冷笑することなく反応する。

「一学年の差は大きいね、「フリ」をして——なんて、すぐにバレるだろうし」

「それもそうだ。だがそれも選択の一つだった」

寧ろ雪哉が最初に出した選択の一つだった。

だが些か常識というものを破綻させている。一年生のフリをして

理愛のクラスの一員に溶け込む。教師や生徒らに強力な催眠術でもかけられるのなら可能かもしれないが、そんなもの空想の世界だ。いや「使える」人間もいるのかもしれない。だが生憎と雪哉は無能力者だ。そんな都合のいい幻想で常識そのものを書き換えることなど不可能である。だがこの案は即効で却下された。

「雪哉、妹さんが大事？」

「ああ」

言うまでもない。

「それなら頼んでみればどうなんだい？」

「……は？」

雪哉は気の抜けた声を上げてしまった。

「いや、ほら、確か雪哉の今の保護者の人って……確か、この先生じゃなかったっけ？ 臨時だけど先生なんでしょ？ なんとかしてもらったらどうだい？」

「なるほど」

全くその選択肢は考えていなかった。自分以外のものを「利用」することは考えていなかったただけに切刃の提案はあまりにも名案すぎた。見えない闇に光が射した気がした。雪哉は立つ。

「先生に聞いて来る」

「いや、雪哉」

こうしてはいられないと雪哉はすぐにでも曜嗣の元へ向かおうとしたが、妙案を提示してくれた切刃がそんな雪哉を制止する。

「何をする切刃、俺は往かねばならない」

「授業、始まるよ」

雪哉が立ち上がると同時に教室には一時限目の授業の教師が入室していた。授業が始まってしまったのだ。このまま教室を飛び出すことは出来なかった。悔しげに下唇を噛み締め、雪哉は自分の席に座るのだった。

2 - 3 諦観

2 - 3 諦観

時任雪哉は諦めない。

最後まで決して、微塵ともそんな感情を抱くつもりはなかった。切刃の提案通りに「先生」である瀧乃曜嗣たきのようじを利用する為に校内を駆け巡っていた。

しかし、昼休みまで瀧乃曜嗣を発見することが出来なかった。一時限目が終了と同時に駛走したものの曜嗣はいなかった。その次の時限も、次も、いつしか昼休みに入り、やつのことで保健室にいた曜嗣を発見することが出来た。とはいっても曜嗣の行動原理を読めるわけもなく、雪哉はいつも曜嗣を保健室以外では見たことがなかったわけ。だから保健室にしか足を運ばなかった。もしいなければ、十分の休憩時間内で発見できる自信もない。だがやっと四度目の探索で発見することが出来た。いや、それを探索というものかどうか怪しいところだが、見つかったのだから問題あるまい。

雪哉は保健室で待ち伏せをしていただけに過ぎない。昼休みが終わるまでただ静止していただけだ。だが賭けには勝った。昼休みが始まってから十分後、瀧乃曜嗣は大袈裟に扉を開いては機嫌良く、スキップしながらやって来たのだから。

「探しましたよ、先生」

「どしたの？ 金なら貸さないよ？」

「お話があります」

曜嗣の軽口に付き合うつもりなど毛頭無い。寧ろ少しでも反応してしまえば曜嗣の世界に引き込まれるだけだ。なら最初から何も言わない。何も聞かない。ただ自分の意見だけを押し付ける。強引かもしれないが、この男にはそんな意思で押し通らなければ会話すら成立しない。

「理愛のこと、なんですが」

「やっぱり「その」ことだよねえ。ホント、雪哉くん……キミはいつだって遅すぎるよね。待ちくたびれたよお。疲れた、ああ、疲れた」

雪哉がそう口にした途端に、曜嗣は呆れては回転椅子の上に腰掛け廻り出した。

「林間学校のことだよねえ？」

「え？ ええ、そのことなんですが——」

「オラチンの代わりに行って来てよ。あれ三日も拘束されてちょー面倒な行事でさ、あの間、ネットは出来ないアニメも見れないゲームで遊べない！ 死ぬしい、ちょー死ぬしい。ホント臨時教師まで何で行かなきゃいけねえんだって。だからさ、代わりに行ってよ。エライ人には適当に都合つけるからさ」

曜嗣は無茶苦茶なことを言っている。

そんな自分の都合で、どうこう出来るなどと、そんな子供じみた思考で。

けれどそれは願ってもいないことであって、雪哉にとっては好機でしかない。そんな転がってきた幸運を黙って見過ごすわけにもいかず、雪哉は首を縦に振る。それでも、違和感を抱かずにはいられない。

「なんで……」

「なんで——なんて、聞くなよ。予言してたとも思ってる？ ねえーよ。そもそも「いつ」来るか待ってたぐらいなんだから。雪哉くん、理愛ちゃんが林間学校行くから、それで孤立しちゃうから困ってたんでしょう。そんなもん行事始まる前からわかってたことでしょうに？ それとも何か？ 「この前」のことでそんなことも忘れてた？ おいおい、しっかりしてくれよ。頭蓋骨の中には何が入っているんですか？ 豆腐ですか？ 豆腐が入っているやがりますか？ だったら豆腐マンにでもなっつて子供に夢でも与えてるよお！ ねえ？ こんなことになるのは最初から決まってたことなん

だよお？　しつかりしてくれませんか困りますなあ」

小馬鹿にしている。しかし正しい。

そして雪哉は迂闊だった。

最初からわかっていたこと。その通りだ。

理愛が人ではなく、結晶であつて——それを狙う「敵」がいるとして、理愛が孤立するであろう林間学校（行事）の日程がわかる前より早く、曜嗣に相談できた余裕は腐るほどあつた。その余裕を失念のままに投棄したのは雪哉だ。それは明らかな雪哉の失敗だった。曜嗣が嘆くのも無理はない。曜嗣は何もしてはくれない。助力さえ与えてはくれない。だがこちらの意思さえ向ければ拒絶はしない。だから助けてくれた。

今回だって、こちらから動けば助けてくれたのだ。それを咄嗟にしなかったのが雪哉の失態。申し訳ない気持ちになる。

「いやね、まあ、オラチンはそれに参加したくない。雪哉くんはそれに参加したい。わかりやすい利害一致ってるしさ、そうじゃなけりゃオラチンだって雪哉くんに手を貸す真似しないさ。わかつてるでしょ、オラチンとキミらはどう足掻いても他人だし。だからその辺は履き違えないでください。だけど今回は運がいい、だから力を貸そう」

いつだって、力を貸すわけではない——そういうことだろう。

理愛が一人で戦いに向かった日も、その戦闘に勝利し雪哉が倒れた日も、曜嗣は雪哉に助言を与えてくれた。

たった一つの個人的理由——「面白くない」という理由で。

だからずっと曜嗣は雪哉の手助けをしてくれるわけではない。きつとただの気紛れでしかない。そう、曜嗣は善人ではないのかもしれない。しかしそんな人間は雪哉を、理愛を引き取り、保護者として現存している。だから、どれだけ読めない男であつたとしても、面妖な男であつたとしても、雪哉は頼るしかない。曜嗣は「大人」なのだから。どれだけ強く振舞つても「子供」では、上手く立ち回ることなど出来ないのだ。だから雪哉は曜嗣に頼るしかない。曜嗣

が雪哉を利用していたとしても、一人では何もできないのだから。

「ありがとうございます」

「じゃあ金くれ」

「無いです」

「そうでしたか」

雪哉の返しに曜嗣はつまらなさそうにつぶやいた。

逆に雪哉から言わせてみればさっき金は貸さないと聞いていたのは何だったのだと尋ねたいところだったが出そうになる言葉を呑み込んでおく。

「ところで雪哉くん、昼休みあと十分ぐらいで終わるけどゴハン食べた？」

「ああ……」

曜嗣を見つけることだけに頭がいっぱいで、自分の昼食のことは頭から完全に抜け落ちていた。誤算ではあったが、大きいものではない。我慢もできる。あれだけ時任雪哉は諦めないと豪語してはいたが、今日の昼食は諦めることになった。

時任理愛は諦めている。

独りでいることを選んでいる。誰かと共に行動することは、決してしない。信じられるのは一雪哉 兄 だけで、それ以外の者を信用することなどあり得ない。信頼することなどきつと無い。

それはきつと世界のせい。

銀の髪と瞳を認めぬ世界のせい。

理愛は、迫害された。幼き頃に、そして――

（何を今更、別にどうってことない）

一ヶ月も経過すれば、周囲の視線も和らげなものに変わっていた。最初こそまるで珍妙な生物でも見るような、そう、「人」を見る目では無かった。いつものことだ。誰だって黒色が通常なのだ。その

中に銀色などと、異常を混ぜ込んで不思議がる、奇妙と思う。

しかし、それも時間が解決する。時間というものはおぞましいものである。異常がいつしか正常へ。理愛の銀色に対して怪訝そうな視線も感情も、今や殆ど向けられることはない。

そう、世界そのものが異常なのだから。

能力などと、そんな世界の端くれに銀色の髪など、そんなことで突っかかる様に反応することの方が余程におかしい。先天性のものであって、髪を染めてこうなったわけではない。ただそれだけ。そう言うだけで誰も彼もがそれ以上を尋ねない。

世界が異能で満ち溢れた中で唯一の役得と言えよう。もしそうでなければ理愛の容姿はもつと非難されていたに違いない。

だから誰もが時任理愛を蔑まない。声には、出さない。小さいが未だに理愛の見てくれに対して厭な視線を向けるものもある。だがそれは仕方が無いことだ。この世全てが「個」^{わたし}を愛してくれるわけがない。必ず嫌悪を抱く者は存在する。仕方が無いことだ。敵は必ずいる。全てが「個」を正当に評価してくれるとは限らない。だからこそ理愛は感謝しているのだ。この世界全部、一切合財が理愛を不評しているわけではない。たった一人、そう一人、雪哉^{ひとり}だけいれば。

他は何も言わず、放置してくれればそれでいい。銀色を帯びた人間がいた。その程度の記憶が残っているだけでいい。寧ろ忘却してくれれば僥倖だが、それは難しいだろう。

「あ、あのあの、あのさ」

そうやって孤立を徹底する理愛に声が掛けられる。

思えば一ヶ月前も、「こんなこと」があつたような気がする。

此方は結界を張り、不可侵領域を築いているにも関わらず平然と侵入してくることが。

「……はい？」

突然、声を掛けられた。理愛は、人間が苦手だともうしつこい程に説明しているが、冷徹というわけではない。声を掛けられれば返

答するし、一匹狼を装って敵意を剥き出しにしているわけでもない。だから今回も声を掛けられたから返す。ただ事務的に。機械のように、感情すら籠めず。冷たい銀の瞳で凝視する。その冷たさは敵意すら籠っていない。そう、無感情である。視線は逸らさず真っ直ぐに。そんな直線的な視線とは裏腹に、理愛の感情は目先の人間には決して向けられることはない。

だからそんな無感情な、ただ刃のような光を見せる銀の瞳に見据えられれば、大抵はこの時点で相手がただ声を掛けたただだと、それだけで終わる。

諦めた銀の少女は、孤独を願っている。

他人と関わりを持つことが、おぞましいから。ただこの銀を愚弄されることを恐れているから。なら最初からその道を破壊しておけば、最初から何も発生させなければいい。そうしておけば、まず傷つくことは無い。だからこそ瞳には一切の感情を籠めず、氷海のような銀をその少女に放出する。

これでおしまい。

だからきつとこの長い黒髪を後ろで結った少女も同じだろう。座高が理愛より高い時点で、明らかな身長差が垣間見れる。元々、身長や体重が平均以下の時点で、殆どの人より背は低く、軽いのだ。だが、その差に劣等感を抱くことはない。生まれてからずっと抱いた劣等に憎悪を感じる方が愚考であろう。そして、周囲に視線を向けぬ理愛にとって他人の姿など何でもいいのだ。

「あ、あたし、あ、藍園逢離。あいそのあいりよ、よろしくね！」

最後の辺りが間違っていた。噛んだのだろうが、だが理愛は指摘しない。その少女が噛んで言い間違えた箇所は、文字にすれば案外似ているな——なんてつまらないことを考えてしまった自分を呪い、ただ殺す。

一ヶ月も経っている筈なのに理愛はクラスメートの顔と名前を一致させることが出来ない。関心というものが欠如しているのが原因か。もっと酷いことを言えば、「こんな人いただろうか？」と言わ

せる程に理愛は「藍園逢離」という人物を知らない。付け足すならば理愛のクラスは数日前に席変えをしている。運が良いか悪いのか、理愛の席は同じ位置だった。前回、月下虹子が座っていた場所にこの藍園逢離が座っていたというところか。

——なんて、他人に対して思考したこと自体、どうでもよかった。すぐに自分の世界へ戻る。そして愛理には会釈だけして終わらせる。理愛の中ではもう会話が終了しているのだが、藍園逢離と名乗る少女は言葉を囁んだことに羞恥し独り言を呟いていた。

そんな逢離の様子など気にも留めず、理愛は教科書とノートを机の中に仕舞う。

四時限目は終わったばかりだ。昼食の時間は少し過ぎたが大丈夫だ。理愛はそのまま逢離を置き去りにしたまま教室を後にした。

2 - 4 　いつか敵になるのなら

2 - 4 　いつか敵になるのなら

理愛は最初から嫌悪していたわけではない。

きつと悪意なんてモノを抱かぬように、生きて来れた筈だ。

この銀に憎悪が生まれたのは、兄の言葉がきつかけだったのかも
しれない。

兄が初めて理愛を見て言った無垢なる言葉は「へんないろのかみ」
だった。一切の色を無関係のものとし、銀であろうが黒であろうが
そんなものがこの世界に關係無いと信じていた理愛の価値観を崩壊
させた一言だった。

しかしそれは決定打ではなかった。

何故なら、それでも兄は理愛を「妹」として迎えてくれたからだ。
きつとそれは兄の逃避だったのかもしれない。縋るものが全て消え
て無くなってしまったから、最後に残った「紛い物」を選んだのか
もしれない。

でも、それでもいい。どんな理由であっても「家族」になれるの
ならそれでいい。理愛はそれでよかったのだ。だから、理愛は自分
のことを嫌いにならずに済んだのだ。

なら、どうしてそんな歪んだ性格になってしまったのか？

それは兄と「家族」になってからだった。

始まりが、理愛の心を歪曲させてしまった。救済の日を越えて、
新しい世界を見つけた筈の理愛にとってそれは皮肉のような。

やはり幼さはただ純真であり、小学時代に真っ先に理愛の容姿は
からかわれた。それだけならよかった。問題は後からやって来るの

だ。

中学時代、そう、それが本当に決定打。
そこで致命的な心の傷を負ってしまった。

友達ができた。

本当に心の底から嬉しかった。

こんな自分に親しくなってくれる人がいるなんてと、神に感謝する程だった。楽しかった。ただ銀の髪を汚らわしく、銀の瞳を不快めいて、常に向けられる負の感情に逃げたかった理愛にとって最初の友達は、本当に掛け替えの無いものだった。宝物だった。

否定された。

それは唐突に否定された。

いつものように理愛をからかう連中と一緒に理愛を指差し笑っていた。理愛は何もしていない。何もしていないのなら、どうして「友達」は、理愛を蔑んでいたのだろう。

今となってはもう理由さえ、どうでもよくなってしまった。

それはただ興味本位で、くだらない理由だけで人の心に土足で入り込み、理愛を蹂躪したに他ならない。どうして銀色なのか、そんなこと理愛自身が知りたかった。生まれた頃からこうなのだから。裏切られた。いつしか周囲が敵に見えた。誰も信じるな。接近を許すな。心の領土を侵す者を迎撃しろ。だから全てが敵になった。

それが時任理愛の今の心を形成することとなる。他人を信じることは出来ない。友達は出来ない。敵だけが出来る。雪哉^兄だけでいい。それだけでいい。それしか――

最高の居場所を、発見したと思う。

理愛は他人には決して見せぬ満足げな表情を浮かべ腰を下ろした。それは月下虹子に誘われた屋上がきつかけだったろう。

屋上は不可侵。

開放されていない場所へ足を踏み入れることは許されていない。当然、勝手に入り込まないように厳重に施錠されている。その扉の向こう側は理愛にとつてとても魅力的であり、誰の顔も見なくていい、誰にもこの顔を見られないであろう完璧な孤立になれる楽園にさえ思える場所だった。

だがその先へ進む扉は堅く閉ざされ、鍵を破壊してまで侵入する価値があるのかとすれば諦めるという選択をしてしまう。

だが、そう簡単に諦めたのには理由がある。

この屋上へ進む階段の真後ろ、そこは死角となっている。だからその場所を理愛は自分の陣地と決めた。理愛の学校には食堂もあるが、あんな人間の海に吞まれるようなそんな自殺はしたくない。そんな場所へ行けば奇異の視線で刺殺されそうなおぞましさを感じない。

だから理愛は孤独を望んだ。理愛にとっては昼休みなど要らぬ時間だった。ただ授業だけ受けて帰らせて欲しかった。拘束し、束縛し、そして解放されて終わるだけでいい。教育機関の在り方を恨んだ。休憩とは自由だ。一個人の人間が常識の範囲内で思い通りに行動することが許される。要らない。そんなものは要らない。自由は要らない。だって、その自由さが理愛にとっては不自由だったから。孤独であることには何ら迷いはないが、その孤立する理愛に興味を持って接近する人間が少なからずいるということが何より面倒だ

った。「違う」ということが、それだけで関心をそそる。誰が決めたのだろうか。どうして理愛の髪は瞳は、こつも違うのだろうか。だから呪った。

何者も、一片の興味を示すことの無い、「無」を演出し、「存在しない」ように教室を抜け出し、屋上に続く階段の隙間に隠れるように昼食を取ろうとする理愛の前に、別の人間がいるということを。「一緒にゴハン食べないって誘おうとしたんだけど、先にいなくなるから追いかけてちゃった」

リノリウムの床に腰を落とし、昼食を取ろうとするそんな理愛の前には藍園逢離が立っていた。

理愛は今まさに袋の口を開き、中身を取り出そうとしていたのだが声をかけられた拍子に石のように動かなくなった。気がつかなかった。自分の新しい孤独の為の空間に赴くことだけを考えていたから。

理愛は嘆いた。

どうしてついて来るのだと、これでは二人つきりになってしまう。こんな時間にしかもこんな場所、誰もやっては来ない。それがいいのに、それだけを愉しみにしていたのに。

だから今頃は教室なりなんなり好きな場所で楽しく会話でもしながら食事でもしていればいいのだ。そうしてくれば誰もが理愛のことを忘れ、理愛は孤立できる。それなのにこの場所にどうして自分以外の人間がいるのだと。そんな理愛の嘆きに気付く様子も無く、逢離は理愛の真正面に立つてはパンパンに膨れた白いビニール袋から紙パックのコーヒー牛乳と、大量の菓子パンを並べていく。

「時任さん、どれがいい？ 出来たらメロンパンかカレーパン以外にしてくれると助かるかも」

目の前の理愛に意識を向けている割には理愛のことを完全に無視して一人で会話を進めていく。何も言っていないのに、理愛の膝元に三色パンとチョココロネを置いていく。

「お弁当が……ありますので結構です」

頑なに拒絶した。

理愛は袋から小さな弁当箱を取り出し、逢離が置いたパンをビニール袋に戻す。

「ああ、お米派？　ごめんごめん、でもあたしだってパンよりお米の方が好きだよ。いや、食べられるモノならなんだって好きなんだけどね、それにしてもおいしそうだなあ、あたしも料理出来たらなあ、羨ましいよ。時任さんは料理上手なんだね」

「いえ」

それは違う。

不正な評価だったのですがにそこは正さなくてはと理愛は口を開いた。

他人に自ら声を掛けるなどと、そんなことはしたくなかったのだ。が正しいことだけをしたいという理愛の信念は曲げられない。

「これは、兄が作ったモノです。わたしは食べるだけです」

なんとこの小さな弁当箱の中身、おかずから白米まで全て兄である時任雪哉の作品である。あの容姿、あの性格の割に料理や裁縫といった家庭観丸出しの母のような真似をする。しかし妹の分しか作らないのは単純に理愛の為である。そう思うとやはり妹に対しての執着が不気味な程に強い男である。

「お兄さんいたんだ……へえ、それにしてもおいしそう」

近い。近過ぎる。

いつの間にか逢離は理愛の持つ弁当を覗き込んでいた。理愛はその弁当を逢離の見えない位置へ。そして明らかな敵意に向けた視線を浴びせる。

「なんですか、いきなり――」

「ああ、ごめん。ホントは独りの方がよかった？」

わかりきった事を聞くなと理愛は黙ったまま首を縦に。すると、逢離は肩で息をしてはビニール袋に菓子パンを戻していく。理解してもらえたと理愛は安堵したのだが、逢離は確かに菓子パンはビニール袋に戻したものの、その場を立ち去ろうとはしなかった。

「ごめんね」

「それなら——」

それなら早くここから立ち去れと、そう言いたかった。

しかし人間という「全」が嫌いであって、逢離という「個」が嫌いというわけではない理愛が直接、逢離を拒絶することは難しかった。

逢離は理愛の真正面の位置に立ったまま壁に凭れ掛かった。先程よりか幾分は離れたが、それでも理愛の視界に入っていることには変わらない。これでは孤独になれない。孤立を望む理愛にとって、立ち去ることのしない逢離は邪魔でしかない。何か不穏な動きを見せれば排除する気でいたが、十分に離れている為か座ったままの理愛ではどうすることも出来ない。

溜息を吐き、理愛は黙殺を決め込み、逢離を視界から外した。いないことにする。今はもうそうすることしか出来ない。逢離は何も言わなかった。ビニール袋に戻した菓子パンを今度は自分の膝の上へ。口が開いたままのコーヒーマル牛乳にストローを挿している。このままこの場所から立ち去ることはないようだ。理愛も無視を決め込み、箸を取り出す。

雪哉の作った弁当は相変わらず美味しかった。中学時代から給食がなかった為、雪哉が理愛の昼食を作ってくれた。理愛が中学の頃、雪哉だって中学生だった。それなのに理愛の為に弁当を作った。それは理愛に対しての贖罪の一つだったのだろうか。幼い頃の雪哉が無知恵を振り絞って出た罪を償う行為の一つが理愛の為にしていること、全てをすることだった。

しかし力も無い、知恵も無い。何も無い。そんな無能な雪哉が理愛にした出来たこと——それが弁当を作ることだった。

最初こそ形の悪い、世辞にも美味そうには見えない見栄えの悪いモノだった。だが時間が経てば、経験を重ねれば立派へと昇華する。定番すぎる目玉焼きも、今では海苔が中に仕込んであったりする。形も整って、均一に一口サイズで切られてある。甘い方がいいと言

った理愛の言葉を忘れぬように少量の砂糖で甘めの味になっている。それをゆつくりと口に運ぶ。今日もいつもと変わらぬ文句のつけような無い良い味だった。それなのに、違和感が折角の幸福を台無しにしてしまう。

チラリと一瞬だけ逢離を見れば、逢離はメロンパンを平らげてカレーパンの封を切っている。そして目と目が合ってしまう。理愛は見えないように装い、すぐに視線を逸らす。逢離は口元を綻ばせ、では取り出したカレーパンを千切って口の中へ。

雪哉が作ってくれた弁当を毎日の楽しみにしているというのに、これでは楽しめない。いつもなら勢い良く食べ尽くすのだが、箸の進みは悪い。いつの間にか八割以上が残ったまま、そんな食べかけの弁当の中身を見つめていた。

「食べないの？」

「いえ」

箸が進まない理愛を見て逢離が尋ねる。だが理愛はすぐに言葉を返す。素っ気無いまま、瞬間で会話が終わる。不快に思えばいい、愛想の無い女だと思って早急に消えてしまえと理愛は心の中まで冷たいまま。

「時任さんは、あたしのこと嫌い？」

「いえ」

返って来た言葉は逢離自身の評価に対して。

しかしそんなわけない。嫌い以前のもののなのだ。

だってそれは藍園逢離という個に対して嫌悪しているわけではないから。

「藍園さんが嫌いじゃないんです。わたしは、人間が嫌いなんです」「よかった」

逢離は安心し、安堵の息を吐いては微笑んだ。それがあまりにもおかしくて、つい言葉を紡いでしまう。

「どうしてですか？」

「だって「あたし」が嫌いならきつと諦められるけど、「それ」だ

とまだ諦めなくていいから」

そのままカレーパンも食べ終えて、ゆっくりと立ち上がる。まだビニール袋の中には菓子パンが詰め込まれていた。あの量を全て食べるのだろうか？ 気にはなったが聞くことはしない。

だって、そんなことをすれば逢離はきっと返事をするに決まっているから。逢離は理愛と友達になりたいのかもしれない。印象的に悪い人間ではないと、理愛は思った。寧ろ「良い」に分類される。屈託無い笑み、真っ直ぐな気持ち。一緒にご飯を食べたかたというその気持ちを言葉にして伝えてくるその姿勢。理愛には真似の出来ないことだ。羨ましいと思う。

「時任さん、あたしね、時任さんの友達になりたいんだけどダメかな？」

「それは……」

いきなりそんなことを言われても困る。

そして答えは決まっている。

友達なんて、いらない。

どうしてそんなことを言うのか、どうして友達になりたいのか、不可解すぎた。

「どうして、そんなことを？」

「どうしてって、それって理由があるのかな？」

そんな逢離の言葉に更に謎は深まるばかりだった。

いつか裏切るのなら、いつか敵になるのなら、そんなモノは最初からいなくていいのだ。

だから、「友達藍園逢離」だって理愛はいらなかった。

理愛がそれを欲することは、絶対にあってはならないのだ。

「ごめんなさい」

だから理愛は逢離に謝罪したのだった。

2 - 5 その意味は識れない

2 - 5 その意味は識れない

逢離の言葉は、理愛を混乱させる原因となった。

そんな理愛は使われなくなった図書館で一人、本を読み漁っていた。

時代が進み、科学が進化していく中で今では紙媒体の書籍は過去の産物として扱われている。そしてそれは全てデータ化され、携帯情報端末を用いて読むことが主流となっている。今や現人類の常識とされ、携帯電話自体が今やその端末の機能を持っている。

そんな機能が備わっているはずなのだが理愛は機械に疎く、今や常識である携帯電話の使用も兄に繋げる以外の機能しか使っていない。もっと深く言えば使えない。使い方を知らない。受話器を押して電話を掛ける程度が理愛にとっての使い方だ。携帯電話なのだから、それさえ使えば十分なのではないだろうか？　なんて、理愛はメールの画面すら開いた試しが無い。送る相手も、受け取る相手もないのだからメール機能を使う必要もないのだけれども。ともかく、それ程までに機械というものに触れない理愛であるからして、だから電子書籍を読み漁ることすら出来ないのだ。

だからこそ理愛にとっては図書館は稀少の存在であり、知識を手に入れる数少ない施設でもあった。今や倉庫のような存外な扱いをされているこの場所が勿体無くて堪らない。過去を生きた人は本を読み、知識を吸収したということを忘れたくはない。

では、理愛はこの場所で一体何の知識を手に入れようとしているのか？

「やはり、そんなもの……ありませんよね」

片っ端から見て回ったが理愛が所望する書籍を発見することは出

来なかった。

椅子に溜まった埃を掃い、そこに座る。すると机の上を何冊かの本が滑り、理愛の前へ。

理愛はその本を手に取り、表紙を確認する。そこには「友達」という単語が書かれていた。他の本にも「友達」という単語が記されている。

「友達——」

声のする方を見れば、そこには白衣を羽織る一人の男——瀧乃曜嗣だった。

図書館の鍵は彼が持っている。そして図書館を開放して貰うように頼んだのだが勝手に着いて来た。曜嗣の存在を無視し此处まで来たが、理愛の調べ物は曜嗣が先に見つけていた。

「友達とは——喋り、遊び、同じ時間を過ごし、互いの心を許し、共有する者——いやいや何か難しい書き方してるねこれ」

曜嗣が読んでいたのは国語辞典だったのだろうかかなり分厚めの本だった。そして口にしたのは「友達」の意味が書かれていた部分だったのだろう。

そう、理愛はその意味が知りたかった。今更ながらに気になった。しかし見つけられず、曜嗣に声を掛けたのが事の始まりだった。こんなおかしな頼み事、とてもじゃないが兄には出来なかった。

そう、逢離の行動の意味を知りたかったから。

ただの赤の他人。入学して一ヶ月が経過しているのだから初対面では無いが、それでも声を掛けられたのは初めてで、返事をしたのだって初めてだった。それがいきなり友達になりたいなどと理解に苦しむ。何をしたい。何がしたい。理愛にはわからなかった。そう、友達を作りたいというその感情がわからない。一度、友達というものを作った筈の銀の少女はたった一度の裏切りによってその行為の意味さえわからないものになってしまった。

それを未知とする理愛を嘲笑うように曜嗣は声を上げる。人を小馬鹿にしたような高笑い。机を叩き、本を叩きながら曜嗣は笑う。

「友達の意味を知りたいって言うからさ、さすがのオラチンもどうしたらいいのかわからないっすわ。これで満足？」

辞書を引き、その内容を読んだだけだった。勿論、そんなことで深く知ることなど出来ない。寧ろ、言葉だけの意味ならばとづくに知っている。辞書で探すまでもない。だが、曜嗣には理愛の言葉の意味がわからない。まるで母国語の通じない外の人間と話をしているようにさえ見える。情報の齟齬が生まれ、曜嗣の提供する知識は理愛の欲するモノとは違う。曜嗣の言っている意味は確かに正しいのだけれど、理愛が必要としているものとは大きく掛け離れている。「そんなことわかってるんです、わたしが知りたいのは——そういう「モノ」を欲しがる思考ですよ」

「ははっ、何それ！ なあにそれえ！ 理愛ちゃん哲学う！ なんそれ？ もしかして哲学ってる？ 高校生の台詞吐いてくれよお！ その台詞はさすがに引くわあ、オラチンでも引くわあ」

理愛の発言は常人からすれば不可解そのものだった。友達を作るというその意味を知りたいなどと、若者のましてや年端もいかない少女の台詞ではない。そんな大人びた、いや、大人でも中々そんな発言はしないであろう理愛の言葉に曜嗣は腹を抱え、大声で笑う。それは嘲笑ではない。爆笑であった。

「面白いね、理愛ちゃんって。これってさあ、本読まなきゃ意味わからないこと？」

「だから……わからないから、ここにいますんでしょ？」

「ええ？ それって変だよ、変すぎい！ 理愛ちゃんって友達いないの？」

核心に触れられ、理愛は気分を害した。曜嗣とは殆ど口を交わしたことがない。だから理愛のことなど何一つ知らないだろうし、理愛自身も曜嗣のことを何一つ知らない。ただ一つ理愛が言えることは好意などこの男には微塵も湧かない、ただ単に生理的嫌悪とい

評価だった。

「でもさ、理愛ちゃんはロボットじゃないんだから。情報なり知識で納得できるものなの？ 違うでしょうに。そこんとこ履き違えちゃダメでしょ？ 識^しったところで納得できるモノじゃあ、ないよね」

曜嗣の言うことは正論すぎて、理愛は何も言えない。

どれだけ知識として意味を知ったところで、それで逢離の行動理由までも明らかにするわけがない。そんなことわかっていた。ただ迷ったから、その為に行った逃避だった。けど、

「じゃあ藍園さんはどうして……わたしと友達になりたいん、でしょう？」

「え？」

理愛の発言に曜嗣はついに呆れた。

「いやいや、だから、だあかあらあ、なんなの？ なんでそんなこと考えるの？ 理愛ちゃんってアホ？」

「誰がアホですか」

大変失礼である。

「別にオラチンがどうこう言って理愛ちゃん納得できる答え上げれないから言わないけどさ、そんなに「怖い」の？」

「なっ—— な、なにが怖いって！」

曜嗣の言葉に逆上し、理愛は凄^ひい勢いで椅子から立ち上がった。勢いが強すぎたせいで、その椅子は倒れ大きな音が図書館に響く。

理愛は怨嗟を籠めて曜嗣を睨み付けた。だが曜嗣は口元を尖らせて、笑みを浮かべる。ただその顔が理愛を苛立たせる。今にも胸倉を掴んで殴りに行きそうだった。

「オラチンは理愛ちゃんの過去は知らない。興味もない。どうしてそんなおかしいことを言うのかも、調べたいのかも、別にどうでもいい。けどね、キミに好意なり厚意なりを持った人間がいたことを忘れちゃいけないね。人の心なんて読めない当たり前だ。どうしてそんなことをする？ んなもん相手に聞けよ。本、見てわかったらオラチンはとくにヴァチカン辺りの図書館で一生本読んでる。心

が読めるなんて、んなもん出来たらすぐに素敵な未来が待ってるよ。羨ましいねえ。でもね「ヒト」はそれが出来なくて当然なんだ。出来ないならどうする？ 理愛ちゃんみたいに本でも読んでガタガタこんな廃墟に隠れて終わるまで待つ？ 無理だろ。なら、どうするんだ？」

今度は曜嗣は立ち上がり、理愛の前に立つ。

大きな身体で、小さな理愛の前に聳え立つ。そして見下ろされる。眼鏡越しに見える鋭い眼光。恐ろしかった。こんな恐ろしいモノと一緒に過ごしていたなんて、身震いが止まらない。全身の毛が逆立ち、理愛は戦慄し、下唇を噛み締める。

「でも、それもわからないからここにいるんだよねえ？ だったらさ、まあ、時間はまだあるんだ。もう少しだけ考えてみなよ」

身の毛もよだつおぞましさは何処へやら。目の前にいたのは怪物ではなく、ただの白衣を着た男だった。いつものように不審そうにいつものように不気味に笑み、ただ立っているだけだった。ではさっきいたのは？ 考えなくなかった。だから理愛はそのまま倒れた椅子を元の位置に直し、そのまま座った。

「ところで理愛ちゃん」

「は、はい？」

さっきの恐怖の余韻が残っているのかまだ声は震えていた。そんな曜嗣は腹部の辺りを摩りながら、

「下校時間だねえ、なんかお腹空いたわ。そろそろ帰らない？」

「そうですね……」

下校のチャイムが鳴っていた。

本当に意味の無い行為だったと思う。愚かにも程がある。曜嗣に言われなくてもわかっていたことだったのに。それなのに、それは、きつと、

（わたしが、怖い？ 何を、どうして？ そんな感情、抱くわけ——）

曜嗣と一緒に図書館を出る。

曜嗣は図書館を施錠し、理愛は空を眺めた。

図書館を出れば暗雲が垂れ込めていた。朝の天気予報の時点で夜から雨が降ると言っていた。夕方までずっと曇りのままだったが限界寸前だった。今にも真つ暗な闇から雨水が零れ落ちて来そう。理愛の鞆の中には備えとして折り畳み傘が入っているので問題はないだろうが。

「ん？」

胸ポケットに入れたままのマナーモードに設定している携帯電話が震えた。理愛の携帯電話のメモリにはたった一人の情報しか登録されていない。

携帯電話のディスプレイを見ればそこには雪哉の名が映し出されていた。すぐに受話器のボタンを押せば、電話越しに兄の声が聞こえる。

「今日の夕飯はシチューにしようと思うのだが」

いきなり今晚の夕食のメニューを口にする。家事全般は雪哉の仕事。夕飯も当然、雪哉が作る。逆に理愛は何をしているのかと言えば、何もしていない。何もさしてくれないと言った方が正しいか。そのせいで理愛は料理を作ることが出来ない。なら洗濯や掃除だけでもと雪哉の負担を少しでも減らしてあげたかったが、雪哉自身は趣味だと――そんな一言で理愛の提案は却下され、片付けられた。だから甘んじている。理愛は雪哉に依存する。

「ではクリームシチューをお願いします」

「そこで悪いがシチューのなんだ、あれはルウでいいのか？ とにかくあれを買って来てくれるか？」

「市販のですか？」

「悪いが俺は料理を作る上で材料や調味料を厳選して、一から作る

程のこだわりがあるわけではない。俺は料理人^{コック}ではないからな」

「そりゃ、まあ……兄さんが作るカレーだって市販のルウを使ってますしね。わたしも別に気にしませんけど」

美味しければそれでいい。理愛も雪哉も料理に関してはそこまでの考えしか持っていない。食材から調味料に当たるまでありとあらゆるルールを持って料理を作るわけでもなく、ただ美味しくだけをモットーにしているだけであって、無駄に細かなこだわりを持っているわけではない。そんなことに毎日気に掛ける程に料理を作るという行為を楽しんでいるわけでもないのだから。ましてや理愛は「作る」のではなく「食べる」側の人間だ。文句を言う筋合いなど存在しない。寧ろ文句を言おうなど思わないが。

それから他に必要な具材を聞いて、受話器を切った。少し帰りは遅くなるがスーパーに寄る必要がある。携帯電話を胸ポケットに戻し、理愛は歩く。曜嗣は放置する。

「何？ 今日シチュー？ いいね、早く帰ろうすぐ帰ろうお家に帰ろう」

「ルウが無いので買いに行きます」

「ええ？ 肝心のヤツ無いのかよ」

「先に帰ってくれてもいいんですよ？」

「いんや、このまま帰ってもメシ無いんでしょ？ それ無いとダメなんでしょ？ 一緒に行くよ」

「でも瀧乃さんって仕事があるんじゃない？」

「無いよ。給料泥棒だねえホント」

早退と言うのかは定かではないが社会人としてあるまじき行為である。理愛からすれば曜嗣の行いは反面教師であり、こんなダメな大人にはなるまいと誓わせてくれる。だが理愛が曜嗣を裁く力を持つてはいない。目の前で不正を行っている大人を黙って見過ごすことしか出来ず、それが自分の保護者であるということが余計に悲しい。

しかし何か出来るわけも無く、そのまま理愛は後ろから付いて来

る曜嗣を無視してスーパーに向かうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140w/>

それが全能結晶の無能力者

2011年10月18日22時43分発行